
いちばんうしろの
大魔王
ACT10
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばんうしろの
大魔王
ACT10


メイド娘による皇帝簒奪計画発動!!
「やる！　やるですよ、父ちゃん母ちゃん！」
皇位を巡っての新たな騒動が巻き起こる!?




「僕はみんなを愛している。愛する人
が一人だという物語も幻想だ。だから、
僕は君たち全員の気持ちに応えたい」
阿九斗はきっぱりと言い切った。

いちばんうしろの大魔王
ACT 10

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次


登場人物紹介
服部絢子（はっとりじゅんこ）
阿九斗に対する恋心は強まる一方の、純情なクラス委員長。阿九斗の発言に動揺を隠しきれない。今回はついに……。
紗伊阿九斗（さいあくと）
皇帝との戦いの後は、けーなの支配下に置かれることで何とか社会復帰。周囲の誤解による困難はまだ続きそう……？
江藤不二子（えとうふじこ）
阿九斗に忠誠を誓う黒魔術師にして薬物使い。真の黒魔術の再興を目指している。
曽我けーな（そが）
「魔王戦争」後、実は皇帝の血筋であることが発覚。皇帝になったり宇宙を飛んだり、その正体の謎は深まる一方。
三輪寛（みわひろし）
阿九斗の弟分を名乗るトラブルメイカー。勇者ブレイブという顔も持つ。
ころね
阿九斗の監視と護衛を行なっていたが、けーなの皇帝即位後はその御側係に。いたずら好き。



リリィ白石（しらいし）
小粋な帽子がトレードマークの生徒会長。
大竹美智恵（おおたけみちえ）
蝙蝠の群れに変身できる生徒会副会長。語尾は「ありんす」。
アルヌール
長身のリラダンにして生徒会書記。基本「ぐが」としか言わない。
神山カンナ（かみやま）
狼に変身する能力を持つ生徒会会計。語尾は「ぎゃ」。
木多淑恵（きたよしえ）
ゼロ復活の一因を作ってしまったが、阿九斗のことを気に入り、その後は協力する。今は何となく学院に居ついている。
けいす
初代魔王ゼロと共に仮想空間内にいた小柄なリラダンの少女。役目は無くなってしまったが、何となく淑恵の元に留まっている。

笹原望（ささはらのぞみ）は二十六歳である。

何？　と問われれば、老舗（しにせ）旅館の若女将、である。

人間、寿命（じゅみょう）が長いこの時代のことだから『女将の旅館は代々の娘が継ぐ』ことになる。

それは大したものだと感心したくなるが、この旅館その歴史のほとんどの期間において経営は傾（かたむ）いている

のだから、褒（ほ）められるべきかけなすべきか、微妙（びみょう）なところだ。

経営状態が良かった時代もあったが、すぐに赤字を出（だ）したのがケチのつきはじめ。それ以来十年おかずに事件が起きる。テ

ロリストが女将（おかみ）を人質（ひとじち）にして立てこもって『旅館事件』として大騒動（おおそうどう）になったこともある。ボイラーの爆（ばくはつ）

が旅館の半分を吹（ふ）き飛（と）ばしたこともある。温泉のお湯が尽（つ）きたので、ただのお湯に温泉の素（もと）を入れて誤魔化（ごまか）している

のを週刊誌にすっぱ抜（ぬ）かれて叩（たた）かれたこともある。自殺者がわざわざこの旅館を選んで首を吊（つ）るのは日常（にちじょう）茶

飯事（はんじ）。あまりのことに祟（たた）られているのかと祈祷師（きとうし）を呼んだら、門をくぐる前に逃（に）げ出したという有様

である。

そんな不運に見舞われた旅館でありながら、何故（なぜ）営業を続けているのか？

「それは一族の誇（ほこ）りだから」

と望の母は答える。望がまだ幼い頃（ころ）から何度聞いても母の答えは同じだった。

「私たちの一族は、皇帝（こうてい）の血を引いているの。だから、やめるわけにはいかないのよ」

一族が皇帝の血を引いていることと、旅館の経営をやめないことに因果関係があるのかどうかは望もわからなかっ

た。いや、きっと母もわかっていない。しかし、まぁ、先人がそう言うのだから、そういう

ことなのだろう。

何しろ、この時代は魔術と超人が普及したことで、帝国民である限りは最低限の生活水準というのは保障されている。

そんな社会であって、仕事というのは自己実現の意味しかない。つまり「生き甲斐」「贅沢」のための仕事。この『

ができないどころか、収支はマイナスであるので、ある種の趣味だけが店舗を継続させているのだ。

しかし、跡を継ぎたる唯一の望、そう言われても困ってしまう。やめたが、裕福になるのだから、続

ている理由などない。まして、『皇帝の血』を引いているのなら、帝国から給付的に助けられてしかるべきではない

のか。そもそも、そんな状況なので、当然ながら知り合いはおろか、周囲の誰も家族が『皇帝の血』を引いていると信じて

くれてはおらず、つまるところ誰からも尊敬されていない。

、然の望む日常は、鬱々としたものになった。経済的にいえば聞えはいいが、未来のない、客待ちだけの退屈な日

のままでは大人の歳に、青春を完璧なまでに無駄に費してしまうことになる。

とはいえ、自分自身背も高くなく、頭が良いわけでもなく、度胸もない。家を飛び出して何かをなす度量もないこと

は、本人も自覚していた。そうなると、希望を支えるものは、本当かどうかすら怪しい「私たちの一族は『皇帝の血』を引

ているの」という、一縷の望みということになる。

そんなわけで、ちんちくりんの体に精いっぱいに「『皇帝の血』を引いている」というプライドだけをため

んでいた希望だったが、あるとき、ニュース放送を見ていて、そのプライドが間違った方向にはじけ

ことになってしまったのだった。

《新しい『皇帝陛下』が誕生す。新皇帝陛下、庶民派でありながら、魔王をその圧倒的な実力で従えておくほどのお力を持っておられ……》

ちゃぶ台で食事をとっていた望は、箸でつまんでいたメザシを取り落とした。マナスクリーンに

いと顔を近づけ、新しい皇帝の姿に目をこらす。

[illegible]な、と言うらしい。輪郭から目鼻立ちまでどれもが丸こい。[illegible]と言われるのも納得の、高貴さはま

るで感じられない顔だ。

「まさか、皇帝って交替できるものだったってことなの？」

望は思わず声をあげていた。

けなという凡人の顔。自分とさほど年齢の変わらない娘が、どういういきさつかはわからな

いが、皇帝加寿子様の死によって、次の皇帝になったということらしい。その事実が望の頭をぐちゃぐ

やにかき回してしまっていた。

——庶民でも血筋を引いていたらいいってことですか？

——それならウチも皇帝になれるですか？

——皇帝ってのは、マジで皇帝ってことですか？

《[illegible]な様は、これからもコンスタン[illegible]れることになります。歴代の皇帝と同じく、[illegible]神髄を究め

とされる[illegible]の、[illegible]長とも[illegible]れておいででした……》

けなを紹介するナレーションが続

それを聞いていた望の頭がぐるぐると[illegible]はじめる。彼女は、わずかのことでも混乱してしまう

た[illegible]を持つ少女なのだが、さらに迷惑なことには、混乱してしまうと大胆な行動に出てしまうという癖

で持っていた。

「やる！　やるですよ、お父ちゃん、お母ちゃん！　ウチは宮殿に行って皇帝に直談判してくるですよ！　やるですよ！」

由望は両親にそう宣言した。

両親は呆気にとられ、続いて反対も言い難く、[illegible]口にしはじめた。

「ちょっと、そりゃ、お前無茶ってもんだよ」

「だいたい、あの[illegible]から[illegible]難しいんだぞ。お前なんかではとてもとても」

しかし、由望は[illegible]から[illegible]に至るまで[illegible]きっており、もはや[illegible]なに[illegible]るという[illegible]考えられなくなっていた。

「問題ないですよ！　これがありますです！」

由望が両親の前に突き出したのは、マナスクリーンに映し出された[illegible]だった。

「[illegible]募集……？」

「ウチの[illegible]で培ったホスピタリティは[illegible]ろうと駅のホームだろうと発揮できるはずですよ！　[illegible]ど[illegible]すよ！」

由望は[illegible]言い放った。

しかし、両親はそれなりに[illegible]の資質を見極めていた。

「いや、ホスピタリティって、お前まともに[illegible]できたことあったかい？」

「そうだぞ。だいたい今の自分達は客に見付けられていないじゃないか」

「お客さんがいないからですよ！」

灯里は大きな声を出す。そう言われると兄貴は黙(だま)り込むことも知っていた。

その通り兄貴は黙り込み、灯里は勝(か)ち誇った笑(え)みを浮(う)かべた。

「父ちゃん母ちゃんは待っていればいいですよ。必ずや館を復興してみせるですよ！ 今の『天プラス』回避困難な状況は

という状態から脱却(だっきゃく)してやるです！ それもこれも幸運な話できればなんとかなるです！」

そんな姉を残して灯里は家を飛び出していった。

さて、そんな紆余曲折(うよきょくせつ)あって灯里の向かった『コンスタン職業紹介所』は、多数の若者が列をなしていた。職業紹介所おは

る職業斡旋所というのは、国家の厳しい審査に合格した者が運営する職業斡旋所であることもあり、将来有望な若者たちとの有力なコネを作ることのできるお得な

のだった。

の列の後ろに加わった灯里、さすがに不安になってきた。

――これは、さすがにまずいかもしれないですよ。いくらプロのウチでも、今回の依頼は劣(おと)

かもしれないですからね

どこにそんな妙(みょう)な自信を持つ根拠(こんきょ)があるのかわからないが、灯里から見れば

鑑定人が精霊(せいれい)『ヤタガラス』による適性職業の診断(しんだん)だった。あらゆる人間の才能を記録されているデータベースを照らして、そ

の人物に適した職業を割り出す。この鑑定法、一見すると占(うらな)いのようだが、精霊の思考と癖から独自に導き出した結果を告げるものであるの

で、これまで外れたことがない。鑑定料は『高価格』に設定されていた。灯里は当時まだ自由な身だったことだが、『自分の天職』はな

いとも言えるわけで、『システムエンジニア』から『魔石工学』まで、ほぼ完全に身内で回せてきたと言い切ってい
いだろう。もちろん、実家の家業を継ぐ、などの理由で一族の方針に従わずに、別の職業に就く者もいるが、そうした場合もあまり
い結果になることはない。
試験に合格すれば、この一族の推薦による特権は、かなり大きな恩恵があると言えた。一族の人間としては、『執事』として各方面に派遣されるような者が選ば
でいれば問題ないわけだ。試験を受ける側も心得たもので、自らの適性を知りながら努力している者も多い。適性のままの
に就かなかった者も、その後の技術者や研究者として生きるケースが多いのだ。
ちなみに、過去これまで一度も不合格者を出したことがない。どきどきしながら八咫カラスの前に立つ
の希望職種の判断を終えた『ヤタガラス』は、甲高い独特の声でこう告げた。
「内閣府人事局」
驚いたのは、試験を担当していた事務官たちだった。
「ええっ！　一万人に一人いるかいないかですよ、そんな人」
確かに、内閣府というのは国の行政の中枢であり、簡単に入れる職場ではない。それが適性判定される者など、そうはいない。ま
た、いないからこそ、こうして募集がかけられたわけだ。
「すごい……」
「そんな人がいるんだ……」
他の受験者たちも、その希望職種の判定を聞いてざわめきはじめた。その声には、羨望とも失望ともつかない、様々な感情が混じっ
ている。誰もが、技術者や研究者などの適職でありながら、席が空かずに待機していた者ばかりである。それがコネを

てやってきてみれば、目の前に出現したのはナチュラル・ボーン・新人類。どんな声をあげればいいのかは誰にもわからないだろう。

しかし、望はそれを素直に、好意的に受け取った。

――いける！　いけるですよ！　ご主人様、見ていますか？　ウチは今最高に輝いているですよ！

望はキラキラと瞳を輝かせた。

こうして新しい新人類がここに誕生したのだった。

その名は石垣望。

生まれながらの新人類である。

1　因果応報の恐ろしい罠！

曽我けなは主役になってから、粛々と自らの行為をこなして……いるはずもなく、時折、いや、しょっちゅう逃げ出しては周囲を困らせていた。

「つ[illegible]て言うけど、[illegible]にお祈りをしたり、署名したりするだけなんだよ。[illegible]なんだからね。あんななことを繰り返すのって」

けなは阿久斗が寝ていたベッドに座り込んで、一人でべらべらとしゃべり続けていた。阿久斗のふとをひっぺがして身体に巻き付け、目の前の床に炊飯器を置いて、そこからしゃもじで直接ご飯をひっきりなしに「んでいるという姿。

阿久斗はベッドに身体を起こし、ひとしきりけなの話を聞いた後、時刻を確認した。

今は、朝の四時過ぎ。起きる時間までは四時間ほどある。

つまり、頭の中で何かがまとまった。未知の領域って丸こい宇宙の、巨大なブラックホールともいえる胃袋の持ち主にて、時折謎めいた一面を見ることの少なかった彼の寝顔と同時、寮に忍び込んできて、食べ物をむさぼり食っているということだ。

「胃がもたれるんじゃあないのかい？」

阿久斗は炊飯器を指差した。

「知ってる？　宮殿って、おかわりが一杯までなんだよ？」
けなは答えになっているようないないようなことを言った。
「だからって、朝の時間の鐘のチャイムが鳴る男子寮の規律は仕方ないよ」
純也はぼやく。
「だって、最近は騎士にも慣れてきちゃって、姿を消そうと服を脱いでの作業の邪魔をしてくるんだよ。手助けないとうまく抜けられなくて」
けなは姿を消す魔法が使えるという特殊な体質の持ち主。その能力を使っては逃げ出しているというわけだ。
「魔術師の存在は王室の意思を持ち主に言っていたよ」
純也はベッドから起き出してあくびをした。
けなは口をとがらせる。
「あちゃんが他のことをまともな感覚か言えないでしょ」
それも事実と言えば事実である。純也は才ある妹が将来は魔王になると告げられた存在。現在はすでにそうなってしまってい
る。とても王子は呼べない人間。
しかしながら、両面は生真面目であるのも確かで、今はけなが脱いだ服を探して引っかき回した寮の備え付けを寝間着のまま
ではじめていた。
「騒動はもう沢山だよ。普通に生きられないのは確かなんだから。僕はなるべく隠遁して生き
ていきたい。好奇になる夢もずいぶん遠くなったものだよ。いや、遠くなったんじゃない。不可能

だ。だけど、真っ当に生きたいという気持ちが変わるわけはないじゃないか。そうなると、僕は君た
っ当に学業や勤務をしてもらわなくちゃ困るわけだ。真面目にやっていれば、組織の内部や外部からの支持によって可能になるか
もしれないし」
周囲に散らばった服を押し入れに戻しながら言った。
生きた戦闘機械である魔王でありながら、普通の世界を選択したのは、自分によって魔王の制御が可能であることが判明したから
だ。それは精神的だけなの、無限の力が放置されたままこれから生きていくということである。内なる体だけなにか
かっているのだ。欲望のひとつも言いたくなって当然である。
けなの心も、その言葉はそれなりに重く響いたらしい。
「そうだよね。しっかりした生活にならないといけないよね！」
決意を固くそう言うと、しゃもじの米粒を舐めとってから炊飯器に戻し、けなは、すっくと立ち上がっ
た。
「まず最初の洗濯物からはじめないと！　そう、もちろんお米の素晴らしさをみんなにわかってもら
うの！」
けなの情熱は燃焼していた。握り拳も勇ましく、まるで将軍が立ち上がった女神であるかのようだっ
た。
ただし、彼女は全裸だった。
まとっていた布団が落ちて、やや寸胴の肢体があらわになっている。

「けな！」

それに気づいた阿求は、目を伏せた。

「え？……何？　って、ひゃあ！」

自分の身体を見下ろし、ようやく状態に気づいたけなが、慌てて着物を拾い上げた。

「もう、あっちゃんのエッチ。姿を消した時のままだったんだよ」

「……それはそっちの勝手じゃないか。服を取ってこないと」

阿求が部屋を出て行こうとすると、それを呼び止める声がした。

「それには及びません」

天井近くの高い位置にあった棚の、扉が開き、そこから姿を現したのは、人形のような美しさを持った少女だった。棚の狭い扉から身体をくねらせながら器用に抜け出てくると、大人の背丈よりも高い位置から頭から落ちたにもかかわらず、猫のように身体を回転させて、見事に部屋の中央に降り立った。


だ～め!
だ～め!

人間はありえない行動を見たのも当然、彼女は人間ではないのである。人間の見かけだけなの監視役、その名をころね

「今は自分の主の侍女のひとりですから。さぁ、ここに服を」

ころねはさげていたポシェットに手を突っ込むと、そこからずるりと一揃いの衣服を取り出した。小さいポシェットだが、内部は異空間になっていて、大抵のものは収納することができるのだ。

「わーい、ありがとう」

けなは一言で服を受け取る。すぐさまころねは人間の後ろに回り込んで、その目を再びふさいだ。

「……別に着替えを見ようなんて思っちゃいないよ」

「しかし、思春期の男性が異性の女の子の裸体に抱く欲求は、それはもう強いものがあります。隣町の自動販売機で[illegible]こぐこともいとわないほどです」

「いや、僕はそんな性欲はないんだけど……」

人間は抗議するが、ころねは何も聞かずに人間の目をふさぎ続けた。

そして人間が服を着替えただけなは、改めてこう宣言する。

「あたしは、主人として、まずこの学院から改革をはじめます。それはお米の方による菓子を禁じられたおの魅力を発揮する運動を通じて、生徒たちの意識を変えていきましょう！　これは付属するならばコメ・ルネッサンス！　お米を愛していた時代の精神を呼び戻し、健全な食生活を取り戻すのです！　そして、やがては全国に広がるライスフィルドへと変化させましょう！」

「んな無茶苦茶な」

純也は言ったが、ころねがそれをかき消すかのように、拍手をはじめる。
「すばらしいアイデアです！　万歳・万歳・万歳」
「あのねぇ……」
純也は、ころねの顔を見ながら、無責任なため、何を考えているのかわからない。それでもころねは、焚きつけるようなことを言い始める。
「このころね、及ばずながら盛り上げるために、粉骨砕身尽力いたします。必ずや盛り上げて大成功を！」
「いいえ、違います。お祭こそ大成功！」
けなは、まるで聖人のような態度でそう言った。
「だから、あのねぇ……」
純也はぼやくことしかできなかった。それほどけなの言っていることは馬鹿らしかった。
それゆえに、責められることはないと思っていたからだ。
しかし、けなのコメル・ネッサンスは、早速その日の昼に実行に移されたのだった。

○

昼休みにはいつものことだが、購買は混み合っていた。ただし、その日だけは、尋常でない混み具合を見せている。

生徒たちの列は、食堂の外であふれ、しかもいっこうに動く気配がない。その列の先頭、そこに問題があるのだった。

「スパゲッティ・ミートソースを」

その時、列の先頭にいた江藤不二子は、細い指を差し、しなやかに使った優雅な手つきでカウンターに食券を置いた。

黒髪の美しい上品なお嬢様という風情の美少女である。生徒たちの人気も高く、わたしたちのお姉様として慕われている。もっとも、本人は表裏を使い分けるずるい性格であり、本性は根っからの悪女。魔女としての顔を見せることは、心底から慕っており、そのことだけは隠してもいないが、周囲の生徒たちには「お姉様」「魔女」と呼ばれている。

「スパゲッティはありません」

不二子は、素っ気なく返ってきた声に驚いて、カウンターの中を見返した。

その声には聞き覚えがあった。

食堂の料理を担当しているのは、ころねである。

「ころね、何をなさっているの？　それにスパゲッティは無いってどういうこと？」

「不二子さま、皇帝陛下のご命令により、食堂を担当させていただいています。スパゲッティの方ですが、申し訳ないことに、無いものは無いんです。食券はそのままでかまいませんので、ご注文の変更をお願いします」

ころねは無表情でそう言った。

「そうね、それなら仕方ありませんわ。おうどんとかいいわね。きつねうどんを」

亜矢子は優しく微笑んで告げる。

「ありません」

ころねは即答した。

「は？　それもございませんの？」

亜矢子は驚いて問い返す。

「そうです。ご注文は」

列車長は理由はわかったが、いろいろと解せない。亜矢子はいぶかしむ表情をしつつ、注文を変えた。

「天ぷらそばでよろしいですわ」

「ありません」

またも断わった。

「ラーメンを」

「ないです」

「焼きそばなら？」

「何でもいいから」

「きしめんは？」

「あるわけないです」

「ええい、冷やし中華」

「もちろんありません」

「わたくし、日本の麺類（めんるい）の大ファンですのよ！　ええい、まさか、麺（めん）がないなんてことはございませんわよね！」

千子は声を荒（あら）らげる。

ところが、ころねは平然とこう言った。

「麺ですか。ビーフンならあります」

「は？　ビーフン？」

「はい。これでも妥協（だきょう）させていただきました。あれはお米でできていますので」

そのころねの言葉で、千子は何が起こっているのかを理解した。

「……そうでしたわ、韓国と言えば、今は料理なのことでしたわね」

「その通りです。お米の素晴らしさをお伝えしろとのことですので、思い切って米粉込みのメニューを実施（じっし）します。おすすめはK定食です」

「……K定食……」

千子は恐怖（きょうふ）とともにつぶやく。

K定食。それは、けな用いて作られた恐るべき定食である。揚（あ）げ物（もの）、汁物（しるもの）までも米を使用した料理は食べられぬ

メニューだ。メインのおかずはライスコロッケである。

「それで、この惨状（さんじょう）ですのね……」

子牛田が周囲を見回した。列が長いのは子牛田様がもめていたからだろう。食べ物をもらって席に着いている生徒もいるが、彼らも子牛田様を絶望した表情で、箸を握ったまま動きを止めている。よく見れば、彼の前に置いてあるのはすべて食べかけのＫ定食だ。

「あなた、どうしてこんなことを？」

紙を差し出した。他の生徒たちの前でできるギリギリの怖い表情。

しかし、ころねは表情を変えない。

「お米がなくなるところとの命令ですので」

「ええい、なんだかわかりませんが、特製メニューを頂くことを要求いたしますわ！」

子牛田が大声を出し、後ろに並んでいる生徒たちの同意を求める。それまで黙っていた生徒たちも、子牛田の扇動とあって、これ

に呼応して声をあげはじめた。

「そうだ、そうだ！」

「横暴だ」

「我にパンを！　麺を！」

生徒たちが列を乱し、カウンターに詰め寄りはじめた。

「麺がないならご飯を食べればいいじゃない」

ころねは、騒ぎはじめた生徒たちの前に立ち、堂々と腕を組んで断言した。

生徒たちはさらにヒートアップする。

「なんだと！」

「可愛(かわい)からって、女帝(じょてい)みたいなこと言いやがって！」

「いや、言ってるのはころねちゃんだけど。後は材料が不足しているから」

「とにかくメニューが元に戻ればいいんだよ！」

けっして狭いとは言えないが、普段(ふだん)は昼休みでも食後すぐに席を立たないといけない程度の広さしかない食堂である。カウンター近くは押し寄せる生徒でぎゅうぎゅう詰めになりはじめた。

そんな中でも、ころねは冷静というか、あくまで無慈悲に対処しはじめた。

「仕方ないですね。交渉(こうしょう)しましょう。カレーライスまでは認めます」

そのころねの発言に、一気に生徒たちの怒りが爆発(ばくはつ)した。

「ってか、カレーも駄目(だめ)だったのかよ！」

「そしたら、マジでメニューはＫ定食しかないのか？」

「ふざけるな！　条件闘争(とうそう)などあり得ない！　メニュー全面回復、徹底抗戦だ！」

「そうだ！　我々にまともな食事を！」

「これは俺(おれ)たちの米騒動(こめそうどう)だ！」

生徒たちの表情は凶暴(きょうぼう)なものになっている。自制心の強い生徒が多い学院ではあるが、冷静さを失うような生徒は誰(だれ)もいないはずだった。それが、今は完全に暴徒化していた。食い物の恨(うら)みは恐ろしいというところだ。

「違和感というのは、何か違うような気もしますが、ともかく、皆さんのおっしゃっていることは、こちらに対して攻撃に出るという意図と解釈いたしますが」

ころねが言った。

生徒たちの顔が緊張したものに変わり、ざわめきが波のように広がる。

やるか、やられるか。そんな物騒な雰囲気が食堂に満ち始める。その場の誰もがころねの戦闘力については熟知している。しかし、一度その場の勢いで膨れ上がった集団は、それでも臨戦態勢を解かない。

「食券を寄越せ！　メニューを決定！」

「我々は戦闘も厭わないぞ！」

「そうですよね、藤森先輩！」

カウンターのすぐ前にいた生徒たちが、事態のきっかけとなった本人を求める。

しかし、列の先頭にいたはずの本人はそこにはいなかった。

「あれ？」

カウンターの前の生徒たちは、自分たちを煽った本人がいないことを疑問に思ったが、そのことを深く考えている間もなかった。

その次の瞬間、ころねの背後から、騒ぎの声が響いてきたからである。

「何の騒ぎなんだい？」

なんのことはない、至極簡単である。つまり、その簡単なことが戦略的なのではない。ひょい、と姿を現したのが魔王

ったのが、戦略的なのだ。

生徒たちが一斉にカウンターから距離をとった。

「ひ、卑怯だぞ！　そんな危険な存在を使役するなんて！」

「俺たちを脅す気かな！」

「和平を行おう！　そうだ、和やかにお茶を飲んで話し合おう！」

生徒がおびえた声をあげはじめる。それも当然だろう。帝都に災厄をもたらした闘技場の元凶である。現在の皇帝側についていたことでおとがめなしとなっているが、名実ともに魔王であることは揺るぎない。

「こ、こころねちゃん、その魔王なんて……」

教室の生徒が震える声で聞いた。

「手伝ってもらっているのです」

こころねは答えた。

その言葉は嘘ではなかった。毎日の大きな釜でひたすら米を炊いて、茶碗に盛りつけるという重労働を行っていたのである。

しかし、生徒たちはそんな純粋な受け取り方はしなかった。

「て、手伝い……！」

「魔王に料理を手伝わせる、手伝いはずがない……。やはり脅迫だ！」

その言葉を聞いた阿久比の表情が、硬くなる。

――いや、料理が得意なのを褒めたんだけどなぁ……。

阿久比の心は、そう思っていたが、阿久比はそれを言葉に出さない。そして、そのことがさらに生徒たちに恐怖心を与える結果になった。

「お、怒った！」

「やる気だ！」

「ひぃいいい！　恐ろしい！」

人混みの中で、どさりと何かが倒れる音がした。どうやら気絶した生徒がいるらしい。

――なんか前よりひどくなっていないか？

阿久比の心は困惑したが、それでもなんとなく事情を悟った。出来る限り厳しくしてころねに言う。

「ころね、説明してもらおうか」

が、ころねは頬ひとつ動かさず、こう答える。

「お米を食べさせようとしたら騒動が起こりました」

阿久比は予想通りだった。

阿久比は額に手を当ててあきれる。

「あのねぇ……。それじゃあ、まさか、僕の言う通りにしなかった？　米を食べさせるにしてもやり方ってものがあるだろうに。この調子でどうするつもりなんだ？　明らかに君の失敗じゃないか

そう、ころねを叱る。
ころねは性格を変えなかったが、生徒たちは、黙ってはいられなかった。
つまり、彼はこう解釈したのだ。
「僕の言うとおりにしなかった？　そうか、これは魔王の仕業！」
「米だけを食べさせて、俺たちをビタミン不足の脚気にする気だ！」
「なんて恐ろしい計画なの！」
「しかも、皇帝の妹を利用して！　皇帝のせいにしようとした！」
「そうだ！　けーなちゃんや、かわいいころねちゃんが自分からそんなことをするはずがないもんな！」
「先生を無視しておきながら、それに失敗したころねちゃんを叱責するなんて！」
——なんだかよくわからないけど、なんで、またこんなことに……。
阿九斗は、心の中で絶望する。
それでも、気を強く持って、生徒たちに顔を向けた。
「まあ、細かい解釈の積み重なりはともかく……。ここはゆっくりと話し合うじゃないですか、ねえ？」
阿九斗は、笑顔を作った。

その案の賛否はともかく、走り手段はあるが、問題意識の彼ら彼女達で「話し合おう」と言うのは、対立した人間にとっては不愉快でしかなかった。

悲鳴と怒号に満ち、出口に生徒たちが殺到しはじめた。

――あ……。

死神以外の全員が販売と気づいた頃には、食堂は誰もいなくなっていた。

がらんとした空間、ただ落ちた食券が風に巻き上げられているだけだ。

「なんにせよ問題は解決しましたね」

ころねが平然として言い放った。

「……あのねぇ、もしかしなくても、君がメニューを半分だけにしたのが原因じゃないか」

メニューを確認し、ようやく事情を理解した死神がぼやく。

「需要と供給の調整ですから」

「……それも、もっとお米を食べようって言ってただけじゃないの？」

「ですので、そこを強引に推し進めました」

「強引？」

死神の問いに、ころねはうなずいた。

「とても強引」

「……じゃあ、やっぱり君が悪いんだよね？」

「そのような見方も可能ですね」
「君が勝手に騒動を起こしたんだよね？」
「見解によってはそうなるでしょう」
「というか、騒動を起こして面白がってる？」
「やや」
「…………え？」
「やや」
もう一度ころねは繰り返した。
九郎は微妙な咳払いをする。
「ごほ……。いや、そ……そうなんだ……」
「ご心配なく。やや、というのは、すべてがそうではないという意味です。悪意はなかったが、最後の方
なってきてしまったという意味にとってもらってもかまいません」
平然ところねは言った。
「いや、説明しなくていいからさ……」
「そうですか。では、自分は事態収拾のために失礼します。陛下をお呼び出しして、人外の村の閉鎖を宣言していただくよう
にいたします。幸い、住人の皆様は魔物の騒動には慣れておりますので」
ころねは、ひょいと頭を下げて、まるでこうなることを計算していたかのように言った。

「もしかして、こうなることを最初からわかっていて？」
「そんなところです」
ころねは、振り返らずに言った。
——まあ、そうだよな。僕を使って[illegible]になったたけなの[illegible]げるのが良いに決まってるもんなぁ。
[illegible]そう納得することにしたが、隠遁して本を読むだけの生活に入ろうという思いが、いや増してくるのを抑えることができなかった。

○

さて、[illegible]笹原望は、『コンスタン魔術学院』の[illegible]を歩いていた。[illegible]のことだが、汚れてもいい服、と言われていたので、[illegible]家にあるメイド服を着ている。貧乏故に、それしかないのだ。
[illegible]センサーの[illegible]である。[illegible]ていた[illegible]ものだが、[illegible]チェックは[illegible]なる。
[illegible]望 その[illegible]を実行していた。[illegible]家がボロ屋であることが功を奏していたのか、ナチュラル・ボン・[illegible]目躍如というべきか、彼女の[illegible]手際の良さを誇っており、[illegible]ひとつのチェックにかかっているところである。
そのとき、[illegible]が飛び込んできた。
「[illegible]」

耳がぴくりと動き、むき出しにしたおでこがきらりと光る。

「[illegible]」

望月の白い内に足を出す。そこでは、けながら生徒たちに囲まれ、喝采を受けていた。望月は事情を知らないが、全て可能に

戻ったことで生徒たちから歓迎されている最中である。

――あれが……！

望月の目には、けなに釘付けとなった。彼の反応面はわからなかったのだが、けなの顔は、庶民的なだけでなく、かなりっ馬鹿っぽかった。

――な、なんだろう……？　とても馬鹿っぽいですよ……？

望月の頭がぐるぐると回転をはじめる。思考が混乱したのだ。

――あんな馬鹿でも生徒会長になれる？

――やっぱり外見だけでいいですか？

――それならウチでも生徒会長になれるに決まってるですよ！

――でも、生徒会長はすでにいるわけですよね……。

そして望月は、間違った答えを導き出した。

「そうだ！　生徒会長と話して、その座を譲ってもらおう！」

そもそも無理やってきたのだから、無鉄砲な答えが出るのは当然のことなのだが、当の望月は自分の考えを素晴らしいものだと陶酔さえしながら、改めてけなを見る。

――さて、どうやって話したものですかね……。

けなは、生徒たちに囲まれており、近づくことは不可能。

――ここは、しばらく待ってチャンスをうかがうですよ。

望は、校舎裏にあった大木の陰に隠れる。

やがて、けなが解放された後、生徒たちが戻りはじめた。けなところねだけが残され、やがて二人は仕事を打

ながら歩きはじめた。

――こ、こっちに来た！

望は、けなたちが近づいてくるにつれて、心臓の鼓動が速くなるのを感じていた。

――き、緊張してるんじゃないですよ。ウチ、い、いやだなぁ……。

そう自分に言い聞かせたが、確かに望は緊張していた。

、元来気が弱いのである。

――ひ、ひぃ！き、来た！

すぐそばまでけなたちが来ている。

「今日の休み時間、宮殿のお庭は日向ぼっこをすることにしたんだよ」

「そうなさると思っていました」

「え！　なんでわかるの？」

そんな会話まで聞こえてくる。

――さぁ、行こう。

――いや、もうちょっと近づいてから。

――よし、行こう。

――いや、それより通過してから後ろから行ったほうがいいのかも……。

少女は逡巡する。

そして、当然のことだが、逡巡しているうち、けなたちは目の前を通過していく。

意を決して、物陰から飛び出した頃には、けなたちの姿はすでに見えなくなっていた。

――なんで？　どうして？

混乱した少女は、再び頭をぐるぐるさせながら追い詰められた思考を巡らせはじめた。細かい経緯は省くが、もちろん

には完全に追い詰められた結論を出した。

――こうなったら、罠を仕掛けて足止めしてから話を聞いてもらうしかない！

そして、少女はけなの今日のスケジュールを探るべく、自分の情報網を生かすことに決め、速攻で仕事を終わらせる

と、自分の携帯情報端末である黒い端末で、情報を調べはじめた。

「今日の午後はクラスの遠足……っと。ここで罠を仕掛ける場所があるですよ！」

罠を仕掛ける場所も決まった。後は罠の道具を揃えたっていいだろう。

――どんな罠にするですかね……？　やっぱり、とりもちが下に敷いてあるとかそういうのですかね。いや、でもとりもちは扱いが難しいし、関係ない人が通りかかっても貼りつくですね

でも、最後はとりもちが望ましいです。なら、とりもちは普通届かないところに……そう、壁
につけておけばいいですね。かなり高いところに。飛翔魔法を使う人でも、そうそう飛んでい
ないような場所。すると、そこに誘導するための仕掛けが必要になるですよ……。
もはややり過ぎているとか、そういうことを指摘するのも馬鹿らしくなるような罠を準備している姿
ある。

結局、望み描いた計画は、このようなものになった。
けなの通り道にバナナの皮を置く。けなが滑って転ぶと上を向く。上には「お米大特売セール」のチラシが貼ってあ
る。その指示する先に歩いて行くと、見えないところに。そこに米袋が置いてあり、それを取ると
から金だらいが落ちてくる。頭に当たり、ふらふらしてよろけ、脇に置いてあるトランポリンに
れ込む。トランポリンによって舞い上がり、壁の高いところに貼ってあるとりもちに絡め取られ
てしまう。

――そして、その横である意図を待っていたウチが、さりげなく話しかける。「完璧！　完璧ですよ！
今の能力、怖いくらいですよ！」
これがうまくいくと考えるのもある種の才能であるには違いない。ともあれ、準備。それを実行に移
ことにした。実行日に罠を設置し、けながそれを待ち受ける。予定では、けなはクラスメイトたちの誘導
で移動するらしい。

望はけなのクラスメイトたちがわいわいと声を立てて通り過ぎたのを見てから、渡（わた）り廊下（ろうか）の真ん中

バナナの皮を置いて、素早（すばや）く柱の陰に隠（かく）れた。

「ふふふ……。これで、転ぶはずですよ」

ほくそえむ望である。

しかし、そこに現れたのはけなではなかった。けなに付き従っていた美しい人間

――もしかして、侍従（じじゅう）だけが先に……。

望ははっとするが、それよりもショックを受けたのは、その人間――ころねが、すい、と

て、バナナの皮をぽい、とゴミ箱に放（ほう）り込んだことだ。

「ウチの完璧な計画が……」

何が起こったのかわからないが、望は白い灰になった。

そのままさらさらと崩（くず）れ去（さ）ろうとしていたとき、ふと、望を呼び止める声があった。

「もし」

「…………っ、え？」

望は意識を取り戻し、そちらを見る。驚（おどろ）いたことに、そこには、ころねの顔があった。

「うひゃあ！」

声をあげて望は逃（に）げようとするが、ころねは静かに望の腕を捕（つか）まえる。

「待ちなさい」

「ひぃぃぃ！　許して！　堪忍（かんにん）して！　出来心だったんですよ！」
「何を言っているんですか。あなたが呆然（ぼうぜん）としているから声をかけたまで」
「え？　それじゃあ、罠を仕掛けていたことを知らないんですか？」
「罠？　そんなものを仕掛けていたんですか？」
「しまった、ばれた！」
望は声をあげた。そして、腕を捕まれていることをすっかり忘れて逃げだそうとするが、当然のように
それは無理だった。腕を引っ張られてつんのめる。
「あなた、鬼畜ですか？」
ころねが侮蔑の眼差しで語りかける。
「うう……鬼畜と言われたくないですよ……。しかし、今のウチは鬼畜です……」
望はあっさりと認めた。膝（ひざ）をついてさめざめと泣いた。
「泣いても許しは有りません。あなたの罪を告白するのです。罠は何ですか？　何のために仕掛けたのです？」
ころねは望を見下ろして、そう問う。
望は涙（なみだ）を拭（ふ）きながら、何をしたのかを正直に告白しはじめた。とりもちを仕掛けて皇帝（こうてい）を捕まえようとしたこと。そして、自分の話を聞いてもらうためだったこと。そして、自分が皇帝の血を引いているらしいことも
「なるほど。それでこんなとんでもない罠を」

「そうなんです。しかし、傷つけるつもりはなかったんですよ？」
「こんな下民が皇女を捕まえようなんて」
「だから、すいません。本当にすいません」
「そうですよ。こんな下民なんとかなると思うなんて、甘いですね」
「へ？」
皇女が顔をあげた。



ころねは無表情のままうなずく。
「だから、こんな罠は、あなたが幸福に成り代わることはできません。もっと現実的に考えるべきです」
「へ？ へ？ へ？ 何ですか？」
戸惑う幸望に、ころねはこう諭すように言った。
「ですから、考えてみてください。捕まえて、お話したところで、あなたは幸福にはなれません」
「そ、そうですね。捕まえて、お話するなんて……」
「そうです。幸福は話し合ってなんとかなるはずはありません」
「へ？」
「交渉は、相手をなんとかして自分の条件を飲ませることです。つまり、相手が窮地にあるときに交渉を行えば、これは成立する可能性が高い」
ころねは淡々と言った。
「ちょ、ちょっと、あのぅ……」
異様な雰囲気に気づいた幸望は、おずおずと声をかけるが、ころねは真顔だった。というか、全く表情が変わらない。それでも、ころねが何を考えているかは、幸望もよくわかった。
「……それは、脅迫というのでは？」
そう問われたころねは、首を横に振る。
「まさか。交渉ですよ。説得とるかどうかは人によります」

「駄目(だめ)です！　それは駄目です！　駄目ですよ。駄目なんですってば……。だけど、参考までに、どうやったら純情は……逃げきるのか教えて欲(ほ)しいですよ？」

里は、ぎゅっと目をつぶりながらも、しっかりところねの手を握(にぎ)り返して言った。

「まずは、罠は目立たないものにすべきです。しかし、達成感を感じさせなければいけません。つまり、相手を精神的に追(お)い詰められるようなものであればよろしいのです」

ころねはそう言った。

里は、少しだけ考え込むような表情になった。が、やがて、ふと手を叩(たた)く。

「それは、たとえば、罠にかかると下着が全裸(ぜんら)になってしまうような？」

「そういうやり方もあるでしょう」

ころねはうなずいた。

「ああっ！　ありがとうございます！　親切な方」

里は泣きながら感謝する。が、ころねの手を放して罠をしかける作業に移ろうとしたものの、どうしていいかわからずにその身を泳がせる。

「……あの？　罠ってどうすればいいんでしょう？」

「なるほど。それならばアドバイスをいたしましょう。あなたのような複雑なものはよくありません。単純なものこそ効果を発揮するのです。原則はふたつあります。マナを使用しない。そして、ワンプロセスで目的を達成する」

ころねは淡々と説明をはじめた。
「マナを使用しないのは、魔術に長けた生徒たちによる罠の発見を遅らせるためです。そして、ワンプロセスで目的を達成するのは、素早く辱めることで、魔術師の精神集中を妨げ、責める時間を延長することが可能です」
「なるほど、勉強になります」
望月はメモをとりはじめる。
「そうすると、有効な罠の種類がしぼられます。具体例を見ましょう」
ころねはマナスクリーンを展開して、罠の詳細を表示した。
「どういう理由でそんなものを保存していたんですか……？」
望月の質問は、ころねは答えずスクリーンを指さす。
「キモになるのは、このロープです。対象の体にロープを引っかけたら自動で発動する程度のもの、が良いのです」
「ふむふむ……」
望月も納得させられてしまい、うなずく。
「両足をロープで縛り上げて、逆さづりにする罠も有効なのですが、危険なので避けた方が良いでしょう。おすすめは特殊な薬品を頭からかけるものです」
「薬品？」
「それは、これです」
ころねは、いつも提げているポシェットから薬瓶を取り出して、高く掲げた。

「フクトケル！」
「ふ、ふくとけ？」
「フクトケルです。服だけを溶（と）かす恐ろしい薬です」
「なんというか、そのまんまの名前ですよ？」
「それは名付け親に言ってください。バクテリアの働きで化学繊維（せんい）を溶かすのです」
「すると、あっ、という間に衣服は……。いや、化繊（かせん）の衣服なら全裸に……！」
「その通りです」
ころねはうなずいた。
そして、望の前に瓶を突（つ）き出す。
「原液は薄（うす）めて使います。この小瓶だけで、バケツ一杯分の溶解薬ができます」
「い、いや……でも……」
望は後退った。
「これって、かなり恐ろしいことじゃないんですか？」
「そうでしょうか？　全裸になったところで、恥ずかしがるだけです。何か問題でも？」
ころねは望の手に瓶を押（お）しつけようとする。
「も、問題ないですが……それでも……。ひ、ひぃ、いい……」
望は怯（おび）える。

彼女は元来気が弱いわけで、ノリノリでそんな前口上を語られてしまえば怯えるのも当然である。望の目には、ころね
がメフィストフェレスのように映っていた。かなり無害の悪魔(あくま)が

震(ふる)える指を伸(の)ばしてくる。

と、その時だった。

「ころね、その人は?」

年老いた男の声が、すぐ近くでした。

「ひやぁあああああああ!」

望は悲鳴をあげて駆(か)け出す。

「ちょ……」

声をかけた男は突然の出来事に声をあげたが、望はその声すら聞こえなかった。わけもわからず走り回って、ようやくどこかの茂(しげ)みの陰に落ち着いた。望は息を整え、その時、自分の手にしっかりと何かが握られていたことに気づいた。

「こ、これは……」

望は息をのむ。

さらに……。

「あぁっ、なぜかウチの手描きのマナスクリーンに描いた絵のコピーが!」

「ころね、あれは誰？」

純也は、走り去る[illegible]の後ろ姿を見て首をかしげた。

「[illegible]です」

ころねはこともなげに答えた。

「それなら、どうしてメイド服？　いや、そうじゃなくて……。一体何を？」

「何か、妄想を抱いた可愛そうな人のようですので、対話していたのです」

「は？」

純也は首をひねった。

「いえ、奇妙な罠を使って、[illegible]を捕まえようとしていました。こうしてバナナの皮を置いて……」

ころねは一度拾ったバナナの皮を元の場所に戻した。

「話がまったく見えないな」

「そうですか。それほど特殊な状況だったということでしょう。[illegible]はおさぼりになっていたので[illegible]しましたが、ともかく、その人物を見極め、場合によっては拘束できないかと思案していたところ、あなたが来たことで、逃げ出してしまいました」

ころねは、そう言い切った。

阿丸 これには困惑。

「……それは、僕を思ってってこと？」

「いえ、そうは言っていません」

「でも君達は彼女を拘束しようとしていたって……」

「いえ、拘束できるほどの犯罪を犯していませんでしたので、確信はそのための駆け引きをしていた

わけです」

「……やっぱりわけがわからないな。まさかとは思うけど、なんでもいいから状況をややこし

くして楽しもうとしていない？」

「やや」

「いや、駄目だろ、そんなことしちゃ……」

「大丈夫です。真面目にやっています」

「あのねえ……」

阿丸はわけのわからない会話を打ち切り、逃げたメイド服の女性を追いかけることにした。突っ立っているこ

ねをおいて、少女が走り去った方向に駆けていく。

——えっと、確かこっちに……。

阿丸の後を脇道へと入っていく。そして、狭く細い道はあるが、最短距離の通り道のはずの、手前の場所に少女を見つけた。

メイド服の小柄な少女——少女が壁の隙間に罠を仕掛けている最中だった。

の脇の茂みにしゃがみ込んでロープをごそごそとやっている。
「あの……」
阿知花が声をかけた。
返ってきたのは悲鳴だった。
「ひぃいやぁああ！」
そして、次の瞬間(しゅんかん)には、もう望は駆け出している。
「ちょっと待……」
引き留めようとするが、望はあっという間に校舎の角を曲がって消えてしまう。
阿知花も後を追って駆け出そうとしたが、望の仕掛けていた罠が足下(あしもと)に引っかかりそうになっていることに気付
いて立ち止まる。
――危ないな……。これがころねの言っていた罠……。
望が仕掛けていたところを見ていたから気付けたが、足下に渡されている紐(ひも)は、細い釣(つ)り糸(いと)で、普通(ふつう)に歩いて
いれば、まず引っかかってしまうものだ。そして、その釣り糸に足をかけてしまうと、頭上にある
バケツから白い液体がこぼれてくるという仕組みだ。バケツは木の枝に巧妙(こうみょう)に隠されていて、これ
われなければ存在には気付けない。
「こっちを取っ払(ぱら)うのが先だな」

凪紗は釣り糸をたどっていき、大木の幹の裏に隠された仕掛けを探し当てた。どうすればバケツを落とさずに仕掛けを外すことができるか考えはじめた。

――このロープを外すとバケツが落ちるから……。誰も来ないうちにバケツをこぼしちゃうことにするか……。

そう考えて、枝と石の錘（おもり）を組み合わせた仕掛けを外そうとしたときだった。

「何をしているんだ？　そんなところでこそこそと」

声が聞こえてきた。

「うわ、ちょっと動かないで！」

凪紗は慌（あわ）てて叫（さけ）ぶ。

やってきたのは服部絢子（はっとりじゅんこ）だった。クラスの委員長であり、凪紗とは浅からぬ因縁（いんねん）がある少女。凛々（りり）しい雰囲気（ふんいき）と竹を割ったような性格で、周囲からの人望も厚いが、その実かなりのうっかり者であることは凪紗だけが知っている。

そして、そんなうっかり者の絢子がその場にやってきたということは……。

「動かないで、とは何だ、貴様こそこっそりと何をやっている！」

絢子は大股（おおまた）で歩きはじめた。

「だから、止まって！」

凪紗は止めるが、絢子はさらに歩幅（ほはば）を広げた。

「怪しい態度だな！　何か隠して……っと……！」
綺羽は足を釣り糸にひっかけてつまずく。
「あっ……！」
凪咲は慌ててバケツを支えているロープを握ろうとする。
しかし、綺羽が足を引っかけたことで外れた石の錘が予想よりも速く、ロープは凪咲の手をすり抜ける。
「うわっ！」
綺羽も転びそうになるが、バランスをとってその場に踏みとどまる。
それがいけなかった。
綺羽の頭上でバケツの中身がぶちまけられる。
「ぶっ……！　何だ、何これは……！」
顔を起こし、濡れた髪を振って水を飛ばした綺羽は文句を言いながら凪咲へと歩み寄る。
「あ、だから……」
凪咲はブンブンと首を振った。
綺羽はそれが何を意味しているのかわからず、前を向いたまま歩いて行く。
「誤魔化すな！　何か子供みたいないたずらを……」
そう怒りながら凪咲を指さすと、その前に向いた腕の服の袖が、粉になったようにぽろぽろと剥がれ落ちはじめた。

「な、なんだ……いったい……え、え、ええぇ！」
綺羽は驚きに目を見開く。服がすべてぼろぼろになって身体から剥がれ落ちはじめたからだ。
「ひぃいい！」
綺羽は腕で身体を覆ってしゃがみ込む。幸い、下着はさらしと下帯。それは溶けてしまうことはなかった。
「だ、大丈夫か！」
阿見は急いで綺羽に駆け寄り、上着を脱いで彼女にかぶせた。
綺羽は上着をしっかりと握って身体を寄せ、涙目になりながらも眼光鋭く阿見を睨んだ。
「き、貴様っ……子供っぽい奴だと思ったが、なんと悪辣な……。まさか私を脱がすためだけにこんな周到
な……」
「いや、これは君を脱がそうってしているわけじゃなく……」
「そうか、私ではなく通りかかった誰かを脱がすための罠……。わ、私の裸を見たいという理由なら、まだ
しもしたが……」
綺羽は唇をかみしめて立ち上がった。阿見の上着に袖を通して身体を隠すと、左手にマナの光を宿らせる。
「ちょ、だから、それも違うって……」
「どこが違うと言うんだ。力を封じられてふぬけた一般人のごとくにいたずらをしたくなった
というわけだろうが！」
「いや、そういうことでもない……んだけどな」

「幸い、今の状態なら私も会話できる。それに、多少のことでは死なないこともわかっているしな……」

納得、凶暴な顔で阿見に迫る。

一般の生徒たちは事情をよくは知らないため誤解しているが、さすがに今の阿見は、覚醒した後のような無茶な使い方な

い。身体だけは頑丈なのようだが、マナの制御も未熟なままだ。つまり、殴られれば痛

「いや……だからね……」

阿見はじりじりと後ろに下がる。

「逃げるのが、反省していない証拠、覚悟しろ！」



絢斗がマナ球を撃ち込む。阿見丸はそれをかわして走り出す。
「うわっと!」
「ええい、そこに直れ!」
「直ったら殴るだろ!」
「当たり前だ!」
怒鳴りながら走り回る絢斗と阿見丸である。
と、その騒ぎを聞きつけたのは、そもそもの騒ぎのきっかけとなっておきながら面倒になってくると真っ先に逃げ出した冬子であった。静かな中庭で、購買で買ってきたパスタ弁当を食べていたところだ。
「あら? 何の騒ぎですの?」
ベンチに座っていた冬子は顔をあげ、阿見丸が絢斗に追い回されていることに気付くと、慌てて立ち上がった。
「ちょっと! 何をなさっているの!」
冬子は急ぐと、絢斗を追いかけて走り出す。
「先輩といえど、この暴行を止めさせはしません!」
絢斗は追いかけてきた冬子を振り返りつつ叫ぶ。
「事情はわかりませんが、阿見丸は仕切り屋です! それがわたくしたちのあるべき姿でしょうに!」
冬子は戸惑いを返す。
「何ですか、わたくしたちって! いつから仲間になったと!」

「違いますわ！　大人の女性は優雅に振る舞うべきということですわ！」

「そんな無茶な！」

納子は千尋と言い合いつつも、その足のは止めない。

「どっちにしろ、追いかけないでくれよ！」

虹丸は後ろを見て叫ぶが、また顔を前に戻した。そして、そこで見たものに驚いて足を止める。

「うわ！　ちょっと待った！　危ない！」

虹丸が見たのは、物陰から走って逃げていく望の姿だった。それは、この近くに罠が仕掛けられていることを意味する。

「危ない？　そんなことで諦められるか！」

納子は虹丸を襲うべく、跳び上がる。

「お待ちなさい！」

それを阻止すべく、千尋が前に出る。

と……。

千尋の足が何かにつまずいて、ぺたりと転んだ。

「あ……！」

「え……？」

虹丸と納子は、俯せに倒れた千尋を見て、動きを止める。

だばぁ、と倒れた卑弥呼に上から衣が降り注ぐ。
「ちょっと、これは何ですの……？」
卑弥呼が立ち上がる。
その身体から、はらはらと服が溶け落ちていく。それに気がつかず、卑弥呼は惜しげもなく鼻先に裸体をさらして仁王立ちに。
「ああ……」
阿丸が顔を手で覆った。
「竜君」
絢南が慌てて手を振る。
「な、何ですの……って、あら？　ひゃ、ひゃあああ！」
卑弥呼が自分の身体を両腕で覆い、顔を赤らめて阿丸を見る。
「わたくしの裸体をご覧になりたいのなら、おっしゃってくだされば、いつでも……って、今はそんな照隠しじゃありません……わね！」
途中で口調が変わった卑弥呼が、絢南が着ている阿丸の服を着ていきなりひっぺがした。
「う、うわっ！　ひゃ！……せ、竜君何を……！」
絢南が身体を手で覆ってしゃがみ込む。

「おほほほほ！　どうしてあなたが明神の制服を着ているのかと思えば　そういうわけでしたのね
の生徒会長あなたにはもったいなくてよ！」
千年子は着衣を組んで、その襟にいとおしげに頬をこすりつけた。
「……せ、生徒会長、いえど、この持ち主は……」
絢斗は歯噛みしつつ千年子をにらむが、しゃがんだまま動くことができない。
「なんと言ったらいいか、その……」
明神は一度自分のシャツを脱いで絢斗にかける。
「あっ！　なにかそちらのほうがうらやましいような……」
千年子はシャツに袖を通してボタンをとめる絢斗を見下ろしてつぶやく。
絢斗は顔を赤らめた。
「なっ……何て馬鹿なことを……。こんな汗の染みたシャツ……」
「それをご褒美と言うのでしょうに！」
千年子は目を輝かせた。
「いや……。その言い争いはともかく、僕がやったんじゃないってことはわかってもら
たかと思うんだけど……」
明神は口を挟む。
「確かに、妙なのが逃げたのは見たような……」

綺羅がばつが悪そうに目をそらす。

「つまり、この魔術を考えた誰かがいるということですわね」

斉は言い、周囲を見回して、軽く目を閉じる。

「あら？」

「どうしたんです？」

純司は聞き返したが、答えを待つ必要はなかった。かなりの数の生徒たちが遠巻きにこちらを眺めていたことに、すぐに気づいたからだ。

「なんだ、露出プレイか……？」

「ああ、また王子さまが魔王にたぶらかされている……」

「いや、体格はいいけど、最後の姿が裸ワイシャツとかすごいなぁ……」

「校内でやるんだから、すごいわよねぇ……」

ざわめきが聞こえてくる。

「人が集まってきてしまいましたわね。まぁ、見せつけてあげるのもよろしいかと思いますけれども」

余裕のある王子に対して、綺羅は気色を失った。

「うわ、うわ、うわ！　何で貴様は私にこんな屈辱を与えて……！」

「だから、僕じゃないって」

阿九斗は苦情を言うが、絢子は恥ずかしさからか、まともに取り合おうとはしない。
「うるさい！　貴様の狼藉は悪に決まっているだろうが！　ええい、もういい、とりあえず貴様を退治してから考える！」
絢子はついにどこからか取り出した刀を抜いて阿九斗に向かって突進を開始する。
「だから、ちょっと考えようよ！」
阿九斗は追われて仕方なく走り出す。
「こら！　だから、阿九斗を襲うのはおよしなさいと！」
王子もまた絢子を追って走り出した。
「ああ、こりゃあ、ますますあの子を見つけないと……」
阿九斗はぼやく。そして、逃げつつも、望を捜さんと首を巡らせ、ぎょっとした。
「女の子に恥をかかせるなんて許せない！」
「でも王子が真っ赤になって怒ったらどうするの？」
「この状況なら、集団で喧嘩なんかできないでしょ。取り囲んで二度と立ち直れなくなるような悪口を言ってやりましょ！」
「なんか、面白くなってきたな」
「いや、エロいものが見れるかもしれないぞ」
「というか、男子は長袖と裸ワイシャツをもっと見たいと」
「そういうのやめろって言ってるでしょ、男子」

口々に騒ぎ、さらには輪唱めまでしながら、かなりの生徒たちが移動して行っている。その先頭は、もちろん阿川だ。
ついてくる生徒たちの大半は事情を把握していないどころか、みんながそちらに行くからついて行く
という者までいる。
「うわ、なんだこりゃ！」
阿川は先に声をあげ、さらに必死になって、望を捜しはじめた。

○

——ああっ！　またも無駄足になってしまったですよ！
望は頭を抱え込んだ。
阿川が絶妙のタイミングで追ってきて、逃げていく最大の原因である。まさに一本を脱した最悪の結果を招いてしまったのだ。
「どうしてこんな恐ろしいことを……」
望は後悔しつつもふらふらと逃げていく。と、しばらく行ったところで、異変に気づいた。蟻のよう
な者が合流するのだ。
「な、なんですか？」
望は周囲に目を配る。遠くに、砂埃があがっていることに気づいた。
——な、な、な……。こんなことになるなんて、聞いてませんよ？

段々近づいてくる。数秒後、それが百人を超える生徒たちの罵声だと気づいた七望は、恐怖から完全に正気を失った。
「きぃいぃいぃいぃいやぁあぁあぁあ！」
目玉をぐるぐると回転させ、七望は当然のように間違った、そして凄まじい結論を導き出した。
——こ、これは、あれをやるしかないですよ？ もう誰にも止められないんですよ？

○

「なんでこんな辱めを受けなくてはならん！」
「それを快感に変えてこその漢女でしょうに！」
絢子がわめく。
「どうでもいいけど、大人も追いかけるのをやめ……るわけにいかないよなぁ……」
阿天見がぼやく。
後方からは生徒たちが押し寄せてくる。止まれば、その波に巻き込まれそうだ。
——ともかく、あの小さいメイドを見つけないと……。あ！
そのとき、男児の望の姿が見えた。阿天見もそちらに進路を変える。どうやら体育館に向かっているらしい。
——捕まえて、体育倉庫で説明してもらえばなんとか……。

望はどうやら舞台袖に入ったようだ。出口は複数あるが、見つかりにくいところにある。うまくいけば追いつめることができるだろう。

「なんとかなるかも……」

阿知賀も舞台袖に飛び込む。その時、舞台袖の奥の舞台に、望がよじ登っているのが見えた。

「ちょっと待て……！」

阿知賀は望に向かって声をかけたが、望は逃げるように舞台袖から奥へすたすたと引っ込んでいく。

「ああ、もう……」

追いかけて奥へと行く阿知賀が、後ろからももちろん、紬子が入ってくる。そして、その後ろに生徒たちも当然のように

「うわっ、舞台袖に押し込められることになっちゃうけど……。あの子、逃げ場がない方に行っているから

か……」

阿知賀はつぶやく。望の後を追って舞台へと駆け上がる。そこで、先生が舞台裏の二階の舞台照明と緞帳を操作するコントロ

ールパネルの前に望が立っているのを見つけた。

「あ！　おい、怖がらないで！　先生は何もしないから」

そう呼びかけたが、振り返った望の目には、完璧な渦巻きの印が浮かび上がっていた。

「嘘だ！　ウチをつかまえて、あんなことやこんなことをするつもりですよね？　こ

え、ウチにはもうわかっていますとも。そうに決まっているんですよ？」

「そうじゃないから！」

「そうじゃないなら、この数字なんですか？」
ゆいは壁の後ろを指差した。
死神は振り返ると、待合室をぎっしりと生徒たちが詰まっている。
「うわ、だから、これは成績で……」
死神は理解するが、ゆいは首を横に振った。
「成績でこうなったとしても、もう逃げられないじゃないですか！　そうですよ、だから、こうするしかないんですよ？」
ゆいはコントロールパネルに手をかけた。
「こうする？　何を？」
死神は慌てて問うが、ゆいはふん、とばかりにコントロールパネルを叩いた。
「こうするですよ！」
と、死神の後ろ、つまり待合室に雨が降り始めた。ざぁああ、という音とともに冷たい水が落ちてくる。
「雨……じゃないな、スプリンクラ？」
その死神の言葉通り、天井ではスプリンクラが動いていた。待合室にまんべんなく水が降り注いでいる。
「冷たっ！」
「なんだよ、まったく……」
「こんなことで逃げられると思ってるのかよ……」

と、生徒たちが騒ぎはじめた。それも当然、今は待合室いっぱいに生徒たちが押しかけている状態なのだから。

「……水落すって、まさか！」

阿久比ははっとして空を見上げた。

中堂は完全に混乱して、叫んでいた。

「だから、こうするしかないって言ったですよ！」

待合室にぎっしりと押し寄せた生徒たちの怒号が、やがて悲鳴に変わりはじめた。

「ひゃぁぁああああああああああああああ！」

「きゃあああああああああああああああ！」

「うわぁぁあああああああああああああ！」

「いやぁああああああああああああああ！」

男女を問わず、絶叫が待合室を揺らす。今や待合室は肌色に染まりはじめていた。

誰もが全裸あるいは下着姿。つまり全員が少なくとも衣服の一部を失っている。

彼女は近くの男子を吹き飛ばすべく魔法を使いはじめ、男子は逃げ出すべく飛び上がろうとするが、狭い場所で一斉に

術が使われたため、マナ不足に陥り、壁にぶつかるわ、転ぶわ、近くの者ともつれあって春者で

されるわという地獄絵図が展開しはじめた。

「こりゃあ……ひどい」

阿久比は遠巻きから下を見つつ、ぶやく。

「そういえば、昔の画家の描いた猫って、こんな感じでしたわね」

やはり無事にいたことで難を逃れた天子は、他人事とばかりに言った。

「ここに来た事情はわかったが……。どうするつもりだ？」

綺納は阿久比と望を交互に見つつ、阿久比に問いかける。

阿久比は困り果てて、望の方を見た。

「事情を説明すれば……」

望は逃げ場を失って震えていた。まだ混乱しているのか、正気に戻ったのかはさっぱりわからないが、少なくともそこにいたのは一人の哀れな怯えた女の子であり、その身体の小ささと相まって、あまりに痛々しく見えた。

「……いや、彼女の事情を説明してもらうってのは、ちょっとな」

阿久比は静かにつぶやいた。そして、おそるおそる下を見る。裸の女たちはみんなで見れば恥ずかしくない、ということに気づいたらしく、羞恥心から互いに争うのをやめ、今度は壇上の阿久比へ恨みの目を向けていた。真っ赤な野獣の目が、多数暗闇の中で爛々と輝いている。

「それなら、どう収拾する？」

綺納は自分がどうしていいかわからぬ、というように阿久比に聞いた。

「そりゃあ……」

阿久比は「仕方ない」とでも言いたげな暗さを目に浮かべた。

「……僕はそう思うことにするさ」
そうつぶやいて、俯向いた。
「おい」
綱吉はそれを引き留めるように言ったが、現状はどうすることもできない。
と、そこに天子が割って入る。
「わたくしと阿児院がここでむつみあえば、誰も手を出せなくなりますが……」
「それは勘弁してください」
阿児院は即座に却下したが、黙って殴られる以外の選択肢も今のところ見つからない。生徒全員を相手にして怪我をさせずに済ませるほどの強さは今はない。
「まあ、覚悟は決めた。身体だけは丈夫だからね」
そう軽く言って、猛り狂う生徒たちの前に立った。
生徒たちは今にも飛びかからんばかりの勢いで、一斉に殺到してくる。
彼らを怯えさせぬよう、阿児院は構えることをこらえて目を閉じた。
そのとき声が響いてきた。
「待ちなさい！」
罵声が飛び交う喧騒の中にあってなお響き渡るほどの声だった。

生徒全員が動きを止めて、一斉に入り口の方を見る。それは上方からだった。天井近くの窓から、ゆっくりと舞い降りてくるけなの姿があった。手には拡声器を持ち、背中にはころねを乗せている。窓から差し込む光が逆光になって、どういうわけか妙に神々しい姿。

「けな……」

目を見開いたころねがつぶやく。

生徒たちも動きを止めて、ざわめきはじめた。

「今回のこと、お詫びします。あたしが確認を怠ったばかりに」

けなは口を開く。

「あたしはここで、ご迷惑をお詫びします。制服は新しいものを差し上げます」

よどみなく続けるけなである。生徒たちはその言葉を素直に聞いていた。

が、何人かはけなの視線が時折ころねの手の中に向くのに気づいていた。カンペを読んでいるのだ。

「しかし、それだけではお詫びになりません。あたしは、ここで犯人に処罰を与えたいと思います！」

けなは強い口調で断言した。

生徒たちがざわめく。

「え？　処罰？」

鬼丸もそれには驚く。けなは鬼丸の力を制御しているらしいが、そんな能力があるとは聞いていなかった
からだ。
するとけなは鬼丸の前に降り立つ。
そして珍しく怒った顔で鬼丸を見上げた。
「あちゃん！」
「は、はい……」
これには鬼丸も口ごもる。
「あちゃん！　あちゃんのせいでご飯が硬くなっちゃったんだからね！」
けなは鬼丸をびしっと指差しながらしかりつける。
「え？　ご飯……？　硬……？」
鬼丸が戸惑っていると、けなはころねを呼びつけた。
ころねは、するりと近寄ってくると、ポシェットから、ずん、と巨大なポリバケツを取り
出した。ゴミを捨てるのに使うそれだ。
「昨日炊いたご飯が余りました。このままでは捨てなくてはなりません」
ころねは無表情に言い放った。
「あちゃんが無理に炊かせたんだからね！　もう乾いて硬くなっちゃってるけど、罰として食べて
もらいます！」

けなはポリバケツの蓋(ふた)を開ける。そこには、乾燥(かんそう)したご飯がぎっしりと詰まっていた。

「え……ちょっと……」

さすがの舞夜丸もこれには後ずさった。

ころねがご飯しゃもじを突っ込み、かちり、と音がした。

「乾いてる！」

舞夜丸は悲鳴をあげた。

「だから、乾いているって言ってたでしょ！　さぁ、もったいないから残しちゃ駄目(だめ)だからね！」

けなはころねの手からしゃもじを受け取ると、舞夜丸を押さえつけ、その口に乾いてかちかちになったご飯を詰め込みはじめた。

「や……やめ……もがっ！　硬……歯が……！」

「大丈夫！　我慢(がまん)すれば食べられます！　あたしはこのくらいの量なら頑張(がんば)れば食べられるもん！　だから、硬いのだけ我慢すれば問題ありません！」

むちゃくちゃなことをけなは言った。そして、ひたすらに舞夜丸の口にご飯を詰める。

「硬くなったご飯……」

「蒸しなおさずに食べるのか……」

「あの量……」

「なんか馬鹿馬鹿（ばかばか）しくなってきた……」

「ああ……帰ろか……」

いきりたっていた生徒たちも、これには完全に毒気を抜かれてしまっていた。呆然（ぼうぜん）として、無理矢理乾（むりやりかわ）

た氷水を飲み下す陽和の姿を眺めている。

その隙（すき）に、ころねが生徒たちの前に出てポシェットを開けた。

「さぁ、並んでください。サイズとタイプをおっしゃってくだされば、制服を用意いたしますよ……」

生徒たちはおとなしく列を作りはじめた。

こうしてただ一人の少女の犠牲（ぎせい）を払（はら）って一連の騒動（そうどう）は幕を閉じたのだった。

○

そして、今回の陽和は一人自室のベッドで横になっていた。どうやってあれを吸収できたのか原因もわからな

いが、ともかく最大サイズのポリバケツ一杯（ばい）分の氷水はすべて陽和の腹の中に消えた。代償（だいしょう）は、殴（なぐ）られるより

もつらい腹痛。

「ああ……平穏（へいおん）な生活は遠し……」

陽和は天井を見上げて嘆（なげ）く。

と、その視界にころねの顔が割り込んできた。ベッドに転がる陽和の上から見下ろしている。

「何だい？」
死神が聞くと、即答しながら、納得の思いことをころねは言った。
「いえ、怒ってはいないのかと」
「怒って？」
死神が問い返すと、ころねは珍しく皮肉めいた口調で口を開いた。
「……死神さん、このような事態を招いたかをあなたはご存知のはずです。貴方様の、偶然が奪ったとはいえ」
「ああ……」
死神は軽く息を吐き出して、首を振った。
「……そのことなら、あの子が悪いんだろうさ。それに、僕が怒っているかどうかとは別問題だ。嘆いてはいるけど」
「それならば、埋め合わせをしたいのですが」
「埋め合わせ？」
「はい。あなたを慰められないかと」
「……また、からかっているんじゃないだろうね？」
「相手にしてくれませんか？」
無表情にころねはそう言った。
が、その声はひどく切なげに響いた。

「いいや……そんなことはないけど」
純一は、しどろもどろになる。
「良かったです」
ころねは純一に向かって優しく微笑んだ。記憶が確かならば、笑顔を見たのは三回目だった。
そして、ころねは腰を曲げて純一の上にかがみ込む。
「っと……。からかっているんじゃなければ、いやらしいことをしようなんてしないでくれよ」
口ごもりながら純一は言った。
「大丈夫です。あなたが望む通りにしようと思っていますので。ただ、あなたを慰めたいのです。幸い、生身の人間の感情に左右されない身体に作られていますので、添い寝してラブソングなど歌いましょう」
ころねは純一のベッドに滑り込み、するりと純一の腕の中に収まった。
「……っと、こら」
「駄目ですか?」
上目遣いで純一を見るころねである。
その、紫色の宝石のような輝きを目にして、純一は思わずころねの肩に手を回していた。
「その……駄目、じゃないけど……」
「勃起しました?」

「え？」
「いえ、約束しましたか？　と」
そう言われて思わずころねの顔を見返した[illegible]である。
ころねは[illegible]を見ていた。
「……また、騙したね」
[illegible]言うと、ころねはにやりと口の端をつり上げた。
「世の女性陣はこうして男を騙すべきだとお伝えしておきましょう。さて、それでは約束の確認
「しなくていい！」
[illegible]の伸ばしてきた手を払いのけて怒鳴る。
ころねは横に寝たまま、彼女はいつもの調子で口を開いた。
「それでは、またからかっても怒りませんか？」
[illegible]はその顔を見返し、彼女に妙な芝居がかった調子がないのを確認すると、仕方ない、というように息を吐き出した。
「実害がなくて、けなの得になるように許してのことならね。でも、ほどほどにしておいておくれよ」
「では、そのように」
ころねはうなずいた。
「ああ……」

鈍丸はそう言って目を閉じた。

「あの……」

「ん？」

ころねの呼びかけに鈍丸は目を開く。

「そう言った割にはベッドから追い出さないんですね」



ころねはいたずらっぽく言った。

「おなかが痛いからすぐに寝ようと思ってたんだよ！」

「そういう言い訳は使用するものと記録しておきます。さて、放置していらっしゃったならまたカピカピになったご飯を食べさせられかねません。今日はやはり棚（たな）に戻します」

ころねはベッドから立ち上がる。

「ああ、そういえば、けなはあの後見ていないけど」

「白ポリバケツを倉庫に戻しに行かれましたが……どうしたのでしょうね？」

○

「うぇぇぇえん、ねばねばして取れないよぅ！　助けて、あーちゃん、ころねちゃん！」

けなは悲鳴をあげていた。

倉庫の二階の壁に貼（は）られたとりもちにひっかかって。

「バナナの皮で転んだときに見つけたお米のビニールに行きたかっただけなのに、お米の袋（ふくろ）を取ったらから金だらいが落ちてきて、ふらふらしてたらトランポリンで打ち上げられてここにくっついちゃったよう！」

けなは泣いた。

しかし、罠をしかけた少女は、その頃には自分の部屋の布団にもぐってぶるぶると震えていた。

「おっかねぇ！　この学園おっかねぇですよ！」

、続けながら助けられたのは一時間ほど後のことだったという。

2　こぴー人間を作ったら？

暗い室内。そこは奇妙な機械で埋め尽くされていた。光を放つパネルに、グラフの浮き出たモニター。冷却

ファンのうなる音が、途切れることなく響いている。

その部屋の中央、自動稼働アームの先端につけられた電動ドライバーを操っているのは一人の少女だった。

無頓着なのか、適当な衣服をひっかけた姿。整えられていないショートカット。ゴーグルを額に乗っけた

は、頬に油をこすった跡がある。

木多淑恵。それが彼女の名だ。人並外れた機械工学の才能があったことで、陰謀に巻き込まれ、紆余曲折あって、悪の組織阿久斗

つくことになってしまった少女である。今は研究員として働いているが、自分の趣味の発明に没頭する時間の方を多く取って

いるため、平日もこうして『コンスタン』の研究所の倉庫を借りて作業しているという次第だった。

「くくく……ついに完成したよ」

にやにやしながら、淑恵は顔をあげた。

彼女の前には、人形が横たわっていた。

『人形』というのは、人格や感情が備わっていない人間のことである。工場の作業用などに使われることが多く、人間に似た外見を持っていな

いことが多い。この人形も、頭部はつるりとしてほとんど凹凸がなく、まるでデッサン人形だ。これ

から肉付けする素体のようにしか見えない。それが作業台の上に横たわっているのである。

彼は悪魔の形の頭頂部の、鼻の上の位置にある丸いスイッチを指で押そうとしてためらった。

「むぅん、この発明を産み出したものは、果たして神か、悪魔か……。漆黒の闇から忌むべき存在を呼び戻すがごとき所業になってはいまいか……」

回りくどい言い方をするのは彼の癖である。というか、率直に言えば彼は重度のゲームマニアなのだ。

「お館様、相変わらずの恥ずかしい言葉遣いでござるな」

呆れた感じの声が彼の背後から声がした。

部屋に入ってきたのは、小さな人影である。

呆れた感じで言った声の主の口調は、自身も妙な言葉遣いである。見た目も妙なものだ。侍風の服装で、小柄な身体の足元まで届くような長いポニーテール。自身の身長の数倍もあるような刀を背負っている。

彼女はけいす。最終魔王を封印するために作られた人造人間なのだが、現在はその役目も終えてしまっており、[illegible]いをして自宅で過ごしている。

「ん、何に来たの？」

渋い顔で振り返る。

「何に来たの、ではござらん。お館様がお呼びになったのです、お客人」

けいすはそう言うと、後方を指差した。

「あ、そうだった」

黒神惣一は洗浄液を床から取り上げて手でスプレーし、ハンドタオルでそれをぬぐいつつ、脇にあった椅子を足で向こうに押し出して座るようにすすめた。

「忙しいみたいだね」

入ってきたのは死人間だった。古い友達と接している時のように、滑ってきた椅子にひょいと腰掛ける。男勝りな性格の女ぽくないせいか、浮世離れしている爺さん好きな性格に似ているせいか、死人間は黒神惣一にはそれほど遠慮がない。

「いや、忙しかったけれど、今終わったところだよ」

黒神惣一の脇に死人間は立ってテーブルに肘をつく。

「その長髪、いや、問題なのかい？」

死人間は首を左右にあごを振った。

「長髪よ。だが、ちょっとばかりやばい奴でねぇ」

黒神惣一は自慢げににやりとした。

「やばい？　違法なのかい？」

「法律で定められていないものは違法とは言えまいねぇ。つまり、法律で定められるようなレベルのものじゃないってことだよ」

意味ありげに黒神惣一は言った。

「それでも危険なものには違いないんだね？」

死人間の問いに、黒神惣一はうなずいた。

「だから君が特別なんだよ。いや、爆発とか暴れ出す危険があるとかそういうことじゃない。君だけが自己を

たくてね」

「自己？」

「うん。つまり、こいつは人格をコピーする形なんだよ」

博士は人形のつるりとした頭部の形を指差した。

「人格をコピーする？　それは死霊術のようなものかい？」

阿丸は驚きに目を見開きつつ聞いた。

「君の記憶は、神経網に保存されたデータログが参照されるけど、こっちは人間の脳から人格をコピーするところが違うんだよ」

淡々と言うと、阿丸は面白そうに身を乗り出した。

「そうか。人間の記憶が送り込まれている間も、こちら側の肉体に残っている場合があったね」

「そう。そこを応用して人格をコピーするロボットを作ってみた。先に言った、肉体の魂ってものがどこにあ

るのかってのを考えてみたかったんだよねぇ」

「それをやってみた結果、成功してしまったということは、魂が実体として存在、しかもコピー可能ってこと

になるのかい？」

「そう。妙な話だよね。とはいえ、これは存在を主張する道具。やり方によっては人間の魂を別の形へと持って行って

できることを意味するんだよ。これは君の耳には入れておきたい話だったんだ」

「どうやら、憶えておかなくちゃいけないみたいだね」

日向は真剣(しんけん)な顔でうなずいた。
「しかし、この内容の仕様書、これ、どうしよう？　ってことなんだよねぇ」
綾城は困ったように肩をすくめた。
「どうしようって？」
小野寺が問い返すと、綾城は仕様書を前に出し、日向に手渡した。
「ま、近くで見てみてよ」
「体格も少し大きめだけど」
日向は仕様書に書かれている形になっている人形を上から見下ろす。
綾城は人形の顔の上に手をかざして口を開く。
「いや、作ったのはいいんだけど、これ、悪目立ちきまくりじゃん？　とか思ってさぁ。これっ
る、とした身分のは、自身を押すと、押した人の見た目になるように作ってあるんだ。服部(はっとり)君がよくやる自分の身よ
うに、マナを凝固(ぎょうこ)させて表面に覆(おお)う」
「それじゃあ、同じ形が大人……？　なんか妙なことになりそうだけど」
「うん、だから綾城がコピーするが、幻覚のようなものは施(ほどこ)してあるよ。自分が偽物(にせもの)であることを
認識(にんしき)するようにして、さらに周囲の人間には知られないようになっているんだ」
「時間制限はあるな。でも、悪用できる限りは一回の使用で壊(こわ)してしまうべきだね」
日向は腕を組みながらそう言った。

恵はうなずいた。
「まぁ、君からそう言うとは思っていたよ。ちょっとした後押しが欲しかったんだ。それとデータ
が欲しいと思ってね」
「データ？」
阿紀が聞き返すと、恵はひょい、と阿紀の手を取り、その手を自身の体に押し寄せた。
「ちょっと……！」
阿紀は驚いて声をあげた。
ぶぅん、と低いうなりが腕輪からあがる。その表面が光りはじめ、マナが凝結していくことがわ
かる。
「ごめんごめん。君で試してみようと思ったんだ。大丈夫、あまり変なことにはならないから
恵は阿紀に手を合わせて謝った。
「いや、大丈夫って……ホント？」
阿紀は心配そうに腕輪を見下ろす。
「ホント、ホント」
恵は無責任に手を振る。
と、マナの結集が終わり、光が消える。
祭壇には、阿紀とまったく同じ姿をした存在が横たわっていた。

「うわ」

阿形はぎょっとして声をあげる。

「そうやって驚かれると、自分のこととは言え傷つくな」

[illegible]は阿形の身体を引き起こしながら言った。

「いかにも僕(ぼく)が言いそうなことだ」

阿形は目を閉じた。

「そりゃ、僕は僕の複製だからね。自覚はしているけれど、偽物っていうのは気分のいいものじゃない。[illegible]いけど、僕に権利が与(あた)えられないなら、早いところコピーを消してしまって欲しいな、本物の僕は僕と話していたくはない」

[illegible]は阿形にそう言った。

「それは同感。[illegible]のは当然みたいだけど」

「そういうこと。データ操作は何時間ぐらいあればいいんだい？」

[illegible]は阿形にそう言った。

[illegible]は微笑みながら応える。

「一時間ぐらい、[illegible]きればいいかな。それにしても、やっぱり同じ性格の人間が二人揃(そろ)うと面白いよねぇ」

「僕は面白くないさ」

「もちろん、僕も面白くない」

「さて、話すってのは面倒だ。しゃべらなくて済むと嬉しいんだけど」

「そうだね。僕は、僕よりは君がしゃべっている方がいい。それほどゆっくり話をする機会がなかった

からね」

「今後の僕の振る舞い方についての示唆が欲しいな。けなは面白すぎるから」

の人間の声で言った。

「制御するというか、呼吸を合わせて話すことをもう諦めたみたいだねぇ。でも、それを本気で人間相手にする

だよ？　会話としては対話だけど、忙しいなぁ」

悪魔は笑った。

○

「ここ、こいつは面白いことを聞いたですよ……」

闇の中でうごめく黒い影。

それは、生まれながらの自動人形と望まれていた。小さい身体をメイド服に包み、おでこをきらりと光らせ

て、闇の中をのぞき込んでいる。



男爵の事件の最中に立ち聞きをしてしまったのだ。そして、希望もついついそれを見てしまい、処刑人になったのを目撃している。
「今の会話からすると、あのボタンを押した人は化けるということですよ？」
そして、希望はまたも頭の中で妙な計算をはじめた。今回、それほど飛躍した結論は出なかったが、それでも大胆な計画を立てる。
「そうだ！　あの装置をちょっと借りて、皇帝のコピーを作ってウチの言うことを聞かせるですよ！
そして、希望は幸せになる……なんと完璧！」
そして、希望は興奮のあまり、遺憾なく才能を発揮しはじめた。素早く皇帝の部屋の外のコントロールパネルの位置まで走ると、非常ベルを鳴らし、さらに電源まで落とす。
「うわっ」
「明かりが消えた」
「可笑しいね、電源が入らない。外に出ようか」
中から人の声が聞こえた。
希望はその声を聞くと、再び扉まで走って戻る。そして、殺虫剤をひっつかむと、扉から人が出てきたその瞬間、一気に殺虫剤を噴霧した。
「うわっ！」
「ひゃっ！」

厨房で白く染まり、悲鳴をあげる天……いや、天下である。

如月望はその動けなかった人を見逃さなかった。

――天下なら自ら招いた騒動で動けないってことになるですよ……！

望にしてはすばらしい読みを発揮し、動けなかった天下の腕をつかんだ。

「こっちですよ！」

如月望は天下の手を引いて走り出した。

「っと、そうなのかい？」

天下の性格は単純である。こういう場合は素直に従ってしまうのが彼女だ。

そして、如月望は犯人が追ってくるのを避けるべく、厨房の外側へと移動した。犯人の天下の手を引いて真っ直ぐ走っていく。如月望の短い

うちに、把握しにくい院内の構造もあって、あっという間に撒いてしまっていたのだ。

「待て！」

「どこへ行く気だ！」

後から聞こえていた犯人の怒声がすぐに遠ざかる。犯人は足は速いけれど、構造を把握していない。逃走経路らあるので、如月望の逃亡

は容易かった。

「ふふふ……ここまで来れば」

如月望はメンテナンス用のパネルの裏側にある空間に潜んで、改めて天下の顔を見た。

「それで、どうしたの？」

彩夜はいえ、杏樹も身内に完全な阿児である。こんな状況で自分自身を追い出した望に対しても人間的に柔らかく接している。

「い、いや、そ、それがですね……」

望はしどろもどろになった。

当然と言えば当然だが、望は阿児と会話した経験すらほとんどない。それが、狭い部屋の中で阿児に寄り添っているというのは刺

が強すぎた。

「ちょ、ちょっと、離れてもらうことはできないですか？」

「ごめん。でも狭すぎるところに入ったのが悪いんだとは思うんだけど……。ちょっと失礼、これ

なら大丈夫な」

阿児は望の腰を両手でつかんでその身体をひょいと持ち上げると、阿児の胸の辺りもちょっと高いところにあるパネ

ルの上段に腰掛けさせた。

「ひゃああ！」

望は驚いて声をあげたが、座らされてみると身体の周囲を一望できたことでなんとなく落ち着いてしま

う。が、阿児の顔がやたらと近い位置にあることになる。

「あ、あ、あのですね……」

望は顔を真っ赤にして手足をばたばたさせた。

しかし阿児は望を子供扱いして可愛がるような態度で、その頭を撫でた。

「それで、どうしてあんなことをしたの？」

「そ、それは……。って、ウチは供物じゃないですよ？　もう死人ですよ！」

「それは失礼。お若く見えたので。いや、それも失礼だったかな」

「今そっ、ちょより至上です」

望は頬ふくらませた。

「それは、改めて失礼お詫びしないと。では、あそこまでやったからには、それなりに理由あってのことなんですよね？」

阿見は居住まいを正した。

「そ、それは……。実は、その力を使って、望の言葉のコピーを作りたいんですよ」

望は真面目に言った。

阿見の目つきが変わる。

「そんなことをしていいわけないでしょう」

真面目にそう言って、有無を言わさず望の肩を押さえつけた。

「ちょ、なにするですよ？」

「何も、じゃなくて、しかるべきところに行きましょう。一体どんな……」

「ひゃ、いや！　いやぁ！　人を呼ぶですよ？」

「解剖されたくはないけど、人が来たら来たで、突き出すだけだ」

「ぎゃ、ああ！　いやぁああ！」

悠里は足を大の字になってばたつかせた。

「だから、そんなに暴れ……あ！」

紗希は声をあげた。そして、動きを止める。

悠里の足が空中で止まっていた。

「ひゃあああ……って、そうか。スイッチ……」

動かなくなった紗希に気づいて、悠里は胸をなで下ろす。

「でも、ウチがスイッチを押したってことは、どんなことに……？」

○

「まいったな、あの時はここの時間が停止したぞ」

紗希は首を横に振った。

「やばいことなの？」

悠里が心配そうに聞き返す。

「やばいと言えば、やばいだろうね。君は見ていなかっただろうけど、色々な事件を起こしたことがあるんだ。ちょっと危険な性格は問題があると思うな。妄想と現実があふれているけど、人物の大事な判断力が低いって感じかな」

紗希は答えた。

「それはやっかいかもねぇ……」
北斗は感心したようにうなずいて言い、それから今度の扉のパネルをチェックして首を振った。
「やっぱり今度の扉は簡単じゃないねぇ。まいったよ。ってことは、水波が正しかったわけか。確かにまともな
じゃなさそうだねぇ」
「うん。あれを理解しようとしてるんじゃないかな。卓也は作品を作り代わろうとしているらしい。もしか
したら、け―なをコピ―して、とか考えてるんじゃ……」
阿川先輩は言うと、北斗は感心、ふぅ、と息を吐き出す。
「それなら、まずは」大丈夫
「どうして？」
「いや、そんなに簡単には再現できるものじゃないから。関係者以外に公開されないとはいえ、作品の中身を変えることをき
くわけじゃない。それに、作品の全体を再利用しようったって、作品だけ―なだからねぇ。ろくなこともでき
ないだろうさ」
「なるほど。それはそうだ。それに「今ピ―」しているのが僕の性格というなら、特になにかあるわ
けじゃなさそうだ」
阿川先輩はうなずいた。
「ふふっ。それはどうかな。君はまだ今日の作品の難儀（なんぎ）を知らないと見える」
北斗は感心して軽く笑うと、阿川先輩は不満そうな顔をした。

「え？」
「いや、こっちの話よ。でも、問題点はあるかな。衝撃に弱い部分がある。スイッチを強く押すと
はあるかもねぇ」
「問題点？」
死刑囚は問い返すと、納得したような顔をしたが、すぐに首を振った。
「いや、心配するほどのことはない。普通なら、魔力を押した者がコピーするだけなんだ。しかも、前任者
される。が、魔力を与えて融合させると、体液が混じり合い能力がちょっととだけあるかな。それにしたっ
て、魔力の組み合わせ次第では、ちょっとゆがんだ能力が生まれるってだけだよ」
「魔力の組み合わせ……つまり、人間の能力があふれているけど、魔物の能力は低い人体、魔物の能力は高いけれど細胞が弱すぎて動か
ない人体とか？」
死刑囚がつぶやきに、納得した。
「ああ、そうそう。そういう……」
そして、表情を凍りつかせた。
「それ、笹原望美で試すってことだよね？」

○

「あ、あれ……？　動けなくなったってことは、逃げられるですよ？」
望は、パネルの上から飛び降りようとした。と、その肩に当てられた阿比の手に力がこもった。
「ひゃ！」
そう望が声をあげると、阿比は顔を起こして笑いかけた。
「逃げなくていい。大丈夫。もう、わかった」
「わ、わかった……？　それって何が……」
ただならぬ気配に、望は声を震わせた。
だが、阿比は優しい声で望にささやきかけた。
「つまり、僕が帝位を奪おうってことさ。僕がけ一なをたぶらかせば、それでいい。僕が偉大になろう」
「ちょ、そんな！　駄目ですよ？　ウチが偉大なるために、それを……」
「僕が偉大になれば、君がなったのと一緒なんだよ。それに、君が思うようにはしない。僕が帝位についたなら、側にいてもいい」
「そんな勝手なことを……」
「勝手じゃないさ。僕も君もあるんだから」
阿比は言った。
そこで、望は何が起こっているのかを悟った。

「そうですか！　松谷、退って……！」
「そういうことだよ。わかったら、静かにしておいてくれればいい」
阿九は望に笑いかけたが、望は首を横に振(ふ)った。
「駄目ですよ？　それじゃウチが悪者……」
あくまで抵抗(ていこう)する望であるが、阿九は容赦なく望の口に指を押(あ)し当てた。
「いけない子だね。少し黙(だま)っていてくれないと困るな」
「むむ、もが……」
それでも望は首を横に振る。
阿九はにやりとして、望の肩(かた)に置いていた手を首筋に滑らせた。その刺激は、望の身体をぴくりとさせる。
「ひ！」
「抵抗できなくしてあげるよ、子猫(こねこ)ちゃん」
阿九はほくそ笑(え)み、望の首筋から下へ指を這(は)わせ、顔をぐいと望に近づけた。
「うわ、ひ、ふわぁあああ……」
望は悲鳴をあげ、全身を震わせた。

「うん……？　倒(たお)れている」
彼は意識を失って倒れている望を見つけ、声をあげた。
「じゃあ、何かされた……。危害を加えられないんじゃなかったのかい？」
中年男は驚(おどろ)いて声をあげた。
二人で捜索(そうさく)に出た結果、望を見つけたというわけだった。
「まだ息はある」
純児は望に駆(か)け寄って抱(だ)き起(お)こした。
「気を失っているだけだね」
中年男も望の顔をのぞき込んだ。
望は、顔に皺を寄せて、荒(あら)い息を吐(は)き出している。
「おい、大丈夫かい？」
純児は望の身体を揺(ゆ)すった。
「う、うーん……」
望は目をぱちぱちさせる。そして、純児の姿を認めると、いきなり叫(さけ)び声(ごえ)をあげた。
「いやぁあああ！　やめて！　いや　でもやめないで！」
望は純児の身体にしがみつき、さらにはぁはぁと荒い息を吐(だ)き出しはじめた。いきなりのことに、純児は思
ず身を引く。

「うわ、ちょっと、何なんだ……」
が、望が夢中になって阿丸に追いすがり、身体をすり寄せていく。
「うにゃあああ！　めちゃくちゃにしてぇええ！」
「うわぁああ！　勘弁してよ！」
阿丸が強引に望の身体を引きはがし、手首の根っこをつかんでぶら下げた。そこまでやったところで、望
ったらしい。暴れていたのが、ぱたりと止んで恥ずかしそうな顔になる。
「はっ……。まさか、私は何を……？」
「何がだよ。君が盗んだ人形は違う、それで……何があったんだ？」
阿丸がややききにくそうに言った。
望が顔を真っ赤にして首を横に振り出した。
「な、何もなかったですよ……。そ、そうそう、いきなり筋チョップを打ち込まれたんです
よ！」
そう言いながらも、望は乱れたメイド服を直しはじめた。
阿丸って困った顔で必死に首を振り返る。
必死に顔を赤くして首を振った。
「私を見ないでくれる？　その……情けなくて、なんとなく手を握りたかったからさぁ」
「いや、僕はそんなことしない……。ってことが言いたかったんだ」

阿比留は解答を口に出した。

「だから、そういうことを言わないの。私だって、さすがに恥ずかしい……」

地味島は恥ずかしげな笑みを浮かべた。が、ゴーグルを触って真面目な顔を作ると、望月に向き直る。

「とにかく、月影は逃げたんだよね？　まさか、彼自身の年齢を成人に代わろうなんて言ってなかった？」

すると望月はぎょっとした顔になる。

「ど、どうしてわかるですか？」

「やっぱり……」

阿比留と地味島は顔を見合わせた。

「欲望が混じり合って厄介なことになってるな。でも人間の年齢を変えることはできないっていうんだから、大人になったことにはならないんじゃ……」

阿比留がそう疑問を口にすると、地味島は即座に首を振った。

「男の子のことだからわからないだろうけど……。女の子はこうすることで言うことを聞かせるつもりだよ」

地味島は言いずらそうに、望月を指差した。

「言うことを聞かせるって……？　え？　年齢？　そんなことができるの？」

阿比留は戸惑うように望月を見た。

「だから…… まぁ…… 人にも依るけれど……。少なくとも、君を憎からず思っている子に迫ったりすれば…… ねぇ？ そして、厄介なことに、女の子の大体が持っているってことは、女の子が理想としているような迫り方が本来の姿ってわけで……」

普段はさばさばしている紬恵も、さすがに口ごもる。

「ええと、それはつまり……。なんと言っていいやら……。それで、形代はどこに行ったかわかるかい？」

阿久津の望みが下降した。

「そ、そんなのわからないですよ！ うわぁあああああん！」

紬恵は、自由になると、まさに脱兎のごとくという形容が似合う速度で、向こうの世界へと去っていく。

「あ、また逃げた……」

阿久津は、呆れ顔で頭をかく。

「彼女のことよりも、形代を捕まえないと……」

紬恵は、促す。

「どうやって？」

「そりゃあ、君を落としやすそうな彼女達から当たっていくしかないんじゃない？」

「落としやすそうって、そんな……」

困り果てる阿久津に、紬恵はため息をついた。

「私が指示するとおりに動いてくれればいいよ。まずは[illegible]を把握しよう。ええと、不二子……」

悠太は自分の端末を取り出して、連絡先を検索しはじめた。

○

江藤冬子はカフェにいて、女子寮の学生データを整理していたのだが、その時、携帯端末の着信音が鳴りだし、目をそちらに移した。

が、画面のその発信者名に[illegible]。

「先輩」

そう呼びかけてきたのが、[illegible]だったからである。[illegible]だったから、どちらを優先するかは考えるまでもなかった。

「どうなさったの、[illegible]」

冬子はほほえみかける。

[illegible]は、少しいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「ちょっと、二人だけで話したくて」

「あら？　[illegible]からのお誘いなんて珍しいですわね」

冬子は目を輝かせた。立ち上がると、カフェのカップを置いたままで[illegible]の手を取った。

阿川はそれを握りかえす。千条寺は頬を染めた。

「それじゃあ、少し歩きます？」

「いや、二人きりになりたいんです」

「まあ……！　それじゃあ、阿川はわたくしの〈部屋〉……！　ねぇ、どうなさいましたの。本当にわたくし、嬉しくって！」

千条寺は阿川の腕にすがりついた。

「それが、大事な話なんですけれど」

阿川は、本物の千条寺の部屋に招き入れられてすぐ、そう切り出した。

「阿川様のお話なら、わたくしにとってはすべて大事ですわ」

千条寺は阿川の腕にしなだれかかりながら言った。

「それは助かります。その……、実は、どうやら〈僕〉の偽物が歩き回っているようなんです」

阿川は千条寺に促されるままに、ベルベットのかかったソファに座る。千条寺は阿川の肩にもたれて、その顔を[illegible]た。

「偽物？」

「ええ。博士さんが作った人形で、人の外見をコピーする機能を持っています」

「まあ！」

千条寺は驚きに目を開いた。

知美は真面目な顔になり、千子を見つめ返す。
「ところが、これが機能が狂ってしまい、危険な存在になってしまったんです。どうやら、宰相の地位を狙っているらしい」
「宰相の地位？」
千子はそう聞き返したが、話をまともに聞いている風はない。知美に見つめられて、頬を染めている。
「ええ。けなを利用して、僕を殺し、けなを傀儡にして権力を握るつもりらしいんです。だから、僕は先生に、僕であることを証明して欲しいんです」
「証明？」
千子はうっとりと知美に見とれている。
「そうです。ここで僕に何かアクセサリーの類でも渡してください。僕が持ち物を、顔を合わせたとき、それを目印に、僕が本物と証明して欲しい」
知美はそう言って、千子の頬に手を添わせた。
千子はその言動に反応して、ぴくりと身体を震わせる。
「あん。そういうことでしたら、キスマークでもよろしくなくて？　ね、わたくし、知美様なら、体中いくらでもキスして差し上げますわ。証明するときは、シャツを脱いで、胸元にあるわたくしの愛の印を見つけるだけ。最高じゃなくて？」
千子は知美の首筋に、唇を寄せた。

「それはいいね」
春風はくすくすと笑って、千子の頬から髪、そして頭を左手で移した。
「ね、もちろん。協力するからには、ご褒美をいただけるんでしょうね」
千子はくすぐったそうに首をすくめ、それから春風の正面に顔を持っていく。
「それはもちろん。今だって、キスしてあげようとは思ってるさ。それ以上は、僕は偽物を潰して
しまった後で……」
春風は千子の頭に回した手を引き寄せ、千子の唇を引き寄せた。
が……。
「あら？　それがご褒美になるはずがないじゃない。わたくし、キスは挨拶代わりなら、と申しました
のよ。偽物はキスなんてしませんもの」
千子は意地悪っぽく笑って、春風の胸から手を引きはがした。
春風は戸惑った顔になる。
「そんな……。僕は偽物なんて……」
「あら？　すぐわかりましてよ。愛の問題ですわ」
「……愛？」
千子は余裕のある態度で腕を組み、春風をさげすみの目で見据える。

「簡単に言えば、わかるんですのよ。だって、どこか違いますもの。別の人が混じっているみたい。自
いの女の子が考えた理想の男の子みたいな臭いがしますわ」
「くっ……」
氷沢刹那が唇を噛む。
「先程の話からするに、あなたが自分の身を狙っていることについてだけは本当のことを言っていたの
でしょう？　そんなことをしようとするからには、あなたは他の多くの人間と同じように、周囲の
けることができない、って違って？」
亨平が挑発するように言うと、悔しげに氷沢刹那が首を振った。
「その通りだよ。それでどうする？　僕をどこかに突き出すっていうのかい？」
「ふん、そうね。どうするのが良いかしら。わたくし、あなたが偽物と気づくまでは、結構キド
キしましたのよ。だから、許して差し上げようかしら」
「え……許して？」
「そう。ねえ、あなたの考えていること、面白そうだから。あなた、女の子にそうやってお願いをす
ることで、けなまで落とそうとしてらっしゃるんでしょう？　それ、傍で見てみればよろし
いわ」
亨平が面白そうに笑う。
氷沢刹那が戸惑っていると、亨平がさらに続けた。

「他人の魔法能力を奪う物の、物の因つかないようなことがあれば、わたくしの方が魔法能力より深く愛しているとい

になりますもの。それに、あなたに一度落とされてしまったその女は、実際魔法能力は気ずくなってわ

たくしにとってはこれまた都合がよろしい。落としてみなさいな、服部絢子（じゅんこ）と曽我（そが）部なを」

そして、千早子、魔術（まじゅつ）を使えない一般（いっぱん）人の用いる装置、絢けなの。進化を遂げて、人形少女に渡

「あなた、発揮された魔法能力を持っていないでしょう？　これでうまいことやりなさいな。最後は勝負を

と思いますけれども。それまでは頑張（がんば）ることですわ」

人形少女は頷いて、装置を受け取り、千早子に手を振った。

「違うね。最後でうまく行くさ」

屋上に残された千早子は、ひとつため息をつく。

「……うまくいかなそうだから、手を貸してあげればよかったかしら？　少し時間がかかるけれど

も、人形少女の兄の方にある装置なんかいくらでもありますのに。なにか気になる理由があるのかもしれませ

わね？」

○

絢斗がかかってきた電話に出たことに驚く。装置は登録されていない。装置はそう多くない。が、それを受けてみる

と、面白かったので一度

「……いったいどうしたんだ？　自分のものがあるだろうに」
《それが何者かに奪われてしまって》
「奪われた？」
《そうなんだ。早く会って話したい》
「わかった。どこに行けばいい？」
《人が来ないところがいい。済まないが、至急頼むよ》
「わかった」
そう言って会話を切った絢瀬。しかし、その話には疑念を抱く。
「さすがに、警戒しておいたほうがいいかもしれないな……」
阿九の行動にしては少しおかしいところがある。まして呼び出された先が人目につかない場所。罠である可能性がある。
絢瀬は刀を握り、周囲を注意深く見回しながら待ち合わせの場所へ近づく。しかし、その最善にもかかわらず、罠らしきも
のは見当たらなかった。
「待たせたな」
絢瀬は警戒しつつ、阿九の前に立った。
「いや、大丈夫。それより、大変なことになったんだ」
阿九はいきなり、両手で絢瀬の手を握り、そう切り出した。
「な……。どうしたんだ、手を握ったりして……」

絢乃は顔をそらし、口ごもる。
が、阿九は真っ直ぐに絢乃の顔を見つめていた。
「すまない。でも、本当だったんだ。実は、僕の偽物が歩き回っているらしいんだよ」
「偽物?」
驚いて、絢乃は阿九の顔へと目を戻した。
「そうなんだ。本多さんが作った人形は、周囲の人をコピーするものだったんだ。それが偽物の僕を追い出そうとしている」
絢乃は阿九が嘘をついているようには見えなかった。
しかし、どこかに引っかかるものを感じていた。
「だから作品が盗まれたのか。いや……でも、その……」
「信じられないのもわかるけれど。僕が本物だって証明することは難しい。それに、周囲の人間はすでに偽物の言うことを信じてしまっているんだ」
「藤井先輩もか?」
「そうなんだ。僕のことを好きだなんて言っていても、本物か偽物かわからないなんてひどい話だ。ね
は、違うよね?」
阿九は握った手をその顔の前で持ち上げ、絢乃に懇願する。
「う……ちょっと待ってくれ」

綺羅は顔を少し後ろに引いた。
最初からこの阿見に違和感（いわかん）を持っていたが、それでも不本意な偽物にだまされたと聞くと、対抗心（たいこうしん）のようなものが生まれないでもない。もし自分が本物の偽物を見ることができたなら、自分の方がより阿見のことを想（おも）っていることになるわけで……。
「大丈夫、僕を信じて。もし、僕の偽物が出てきて、どちらが本物かを迫ってきたら、迷わず僕の方を信じてくれればいいだけさ」
阿見はさらに綺羅をたたみかけるように言った。
「だ、だから、ちょっと待ってくれ」
綺羅はいやいやをするように首を振り、後ろに下がる。
が、阿見は手を放さず、それと同じだけ前に出た。
「僕のことが嫌（きら）いかい？」
「そ、そういうことじゃないだろ？」
「怯（おび）えているんだね。大丈夫、僕に任せてくれればいいから」
「だから、そうじゃないって……。お前、少し変だぞ」
「変ってことは、僕を疑っているってことかい？　それなら、本物ってことを証明しなくちゃいけなくなったな」
阿見は手を放すと、戸惑っている綺羅のあごの先を人差し指と親指でつまみ、くいっと顔をあげさせる。

「ちょ、ちょっと待て……。一旦待ってなんだ？」

綿向は耳まで真っ赤になりながら、緊張した声をあげた。

「君を満足させられるのは、この世界で僕だけってことさ」

阿見は綿向の顔に顔を寄せていく。

「ば、馬鹿……やめろ……」

綿向はあごにかけられた指をほどけず、下を向いた。

「嫌なのかい？」

ささやくように阿見は言った。

「そ、そういう問題じゃない……」

「それなら、怯えているだけだね。子猫ちゃん、大丈夫、僕に任せて」

阿見はうつむいた綿向の頭へと手を移し、髪を愛おしげにかき回した。そして髪に軽く顔をうずめる。

「あっ……」

綿向は体を硬直させ、顔をあげてしまう。

「さぁ、僕のものになってくれ」

阿見はゆっくりと綿向の顔に顔を寄せた。

「ひ……だから……その……」

綿向は小刻みに左右に首を振っていたが、やがてその目を閉じ、唇を軽く開く。

「それでいい……」
そして、阿東光はその唇を……。
「や、やっぱり冗談……！」
綺納はどん、と阿東光の胸を突き飛ばした。
阿東光はふらふらと後ろに飛ばされて、尻餅をつく。
「僕を信じられないのかい……？」
困惑したように阿東光は聞いた。
綺納は激しく首を横に振る。
「そうじゃない！　そうじゃない……。だけど、内容は君がやっぱり少し変だ。もしかしたら偽物のかもしれない」
「そんな……」
「い、いや、違う。そんな顔しないでくれ。でも、私の知っている君は、信じてもらうためだけにそういうことをする男じゃなかった。そういうことだ」
綺納は苦しんでいるかのように、荒い息とともにそう言う。
阿東光も立ち上がり、落胆したように首を振った。
「いや……そういうことなら、わかったよ。でも、僕は僕であるってことを証明するのは大変だ。別の女の子に頼まないといけない」

そう言われて、綺羅は切なげに自分の胸を抱いた。

「そ、そういう言い方をしないでくれ……。別の女の子となんて、君は私をもてあそんでいるみたいだ。私だって……その……傷つく」

「そういうのは罪だとわかっているさ。でも、僕は僕だってことを証明しないと、消えてしまうんじゃないかって不安なんだ」

「わ、わかった……。だが、だったら、ころねに会えばいいじゃないか。本物かどうかは私たちには機械を使わなければ見分けがつかないが、ころねならわかるだろう」

綺羅はそう言った。

すると、純一は一瞬驚いて目を見開いた。

「ころねなら見分けがつくって？　それはそうだ。思いつかなかったな……」

「ああ、わかればいい。だから、他の女の子に信じてもらうとか、そういうことを言っていないで……」

綺羅は純一の顔から目をそらす。

「私は、君のことをずっと信じているぞ。だから、今度二人きりになったときは、心の準備をしておくから……」

そして、綺羅は乙女(おとめ)の目で純一の方を振り返(かえ)った。

「そのときは続きをしてくれたって構わないん……って、いない！」

すでに阿比はその場におらず、そこには禍々しくよどんだ空気があるだけだった。

「な、なんだってんだあいつは！　人物人物なんて関係ない！　とにかく次会ったらただじゃおか

ない！」

綺乃は独り、地団駄（じだんだ）を踏（ふ）んだ。

○

「なんだか知らないが、魔王（まおう）が次々と女の子を口説いているらしいぞ」

「なんでも人物が現れていて、これから騒動（そうどう）が起こるが、その時に自分の味方をしてほしいとわけのわか

ないことを言っているらしい」

「なんでも、有力な人物が認めた方が、人物から協力してくれとか」

「なんのつもりだ……。それより、女の子を口説って、口説かれる子がいるのか？」

「いや、それがガンガンうまくいっているらしい。めろめろになっちゃうのも多いとか」

「女は強い男が相手ならそれでいいのか！　ってか、あいつ、魔王様はじめ、いい女くらいでもいるじゃねぇ

かよ！」

「それでも口説かれちゃうらしい。彼氏（かれし）がいるやつまで落とされてるとか……」

「そりゃ、しかし、命かけても魔王に突っかかっていくだろ」

「うん。だから、女は口説いて、男はぶん殴って逃げるってのを繰り返している」

「ひでぇな……。何をするつもりだ……」

「さぁ？　ころねちゃんとの勝負の場所に向かってるって話が……」

校内は騒然としていた。死神が暴れ回っているのは周知の事実となっており、女子生徒を男子生徒が追っかけまわったり、死神から逃げたりと、忙しい。

そんな噂話を聞きつけて、純也は困ったような顔を恵に向けた。

「……どうしたらいいんだろう？」

「そりゃ、望みの欲求に従って、無茶苦茶になっているとはいえ、自業自得なところがあるよね。君がその気になれば女の子を口説くのなんて簡単なんだから」

「好きでそう生まれたわけじゃないさ」

「怒っちゃ駄目よ。しかし、けなところねはどこにいるんだろうね。早く守らないといけないよ」

純也はそう言って、星寿組で椅子に座った。ここは元剣道部の部室で、純也は手分けして校長を探し回ったが、どうにもならずに作戦を練るために帰ってきたのだ。

「勇者の力で死神を倒しきるんじゃないのかい？」

純也は聞いた。マナは個人固有のものだから、その気になれば個人をトレースすることは容易である。

「いや　かなりの上位権限がないとそれは無理だよ。ハッキングすれば可能だけど　そのリスクはおかしたくないな。学園に来てからはけっこう監視されているからねぇ」

彼はそう言った。

「問題なく　ころねの居場所ならわからないかな？　そもそもころねがいれば僕が本物か偽物かわかるはずだよね？　それなら　ころねとけなが一緒にいるかどうかわかれば安心できるんだけど」

「確かにころねなら偽物かわかるねぇ。申し訳ないけど　不良があることを隠すようには作っていないからなぁ」

「あくまで興味本位だったね　でも　僕をコピーしなくても良かったのに」

「うん　そこなんだけどさ」

彼は椅子から腰を浮かせ　組んだ足をほどいて大きく開き　その股の間に両手を突いて身体を乗り出すと　にやりとした。

「実は　僕の記憶をコピーしたのは　二人きりになった時　誘惑してみたら　どんな反応するのか確かめたかったってこともあるんだ」

「え……？」

僕は目を見開いて言葉に詰まる。

彼は　床を蹴って椅子ごと移動し　僕の傍に寄ると　顔を下から見上げる。

「驚くほどのことじゃないでしょうに。そりゃ、女の子は興味もあるんだからさぁ。真面目よりしたいところもあるって言うか　そもそも経験してみたいって側面もあったりしてね」

「それは、つまり……」
「君と同じ、顔がちょっとドキドキすることしてみたいって思ってたんだよねぇ」
彼女は死神の言葉に頬を赤らめた。
死神は慌てる。
「ねぇ、そんなことしている場合じゃないよ。ころねの残り時間を確かめないと。けっこう時間が危ないんだから」
「そこが問題なんだよねぇ……。ほら、君は死神の仕事に執心じゃないか。だからさ、少しずるいことを考えたりもするんだよ。死神が独り占めしたら気分がいいだろうな、なんて」
彼女は大胆に死神の顔に額を寄せ、おでこを死神のおでこに重ねる。
「そ、そんな大胆には見えなかったと思ったけど……」
死神の声に戸惑いが混ざる。
「君が鈍いからさ。ゲームとの会話、魂の存在を詰め込んでるものを、私が女だってことを忘れて真面目に話しあってくれる人のことを好きにならないわけがないじゃない」
彼女は潤んだ目で死神の目を見る。
「だ、だから、そんな場合じゃないって……」
「こんな場所からしているんだよ。実は、ころねの残り時間はわかってるんだ、今、残り時間は別の場所にいるよ。だから、残り時間は危なくないかもねぇ」
彼女は珍しく小悪魔っぽい悪戯な顔で見上げた。

「……そんな！　放してくれよ。僕は行かないと！」

「無駄だって。君が地獄に落とされたら、私は寂しくなっちゃう。ね、少しでいいんだ。私に素敵な気分をさせてくれないかな？」

「そんな理由で……」

「うん。いろいろ事情があるってことはわかってるんだよ。でもさ、私も女なんだな……」

彼女は僕の首にからめた腕に力を込めて立ち上がった。

そして……。

○

その頃、けなは最近になって拝引しつらえられた皇帝の用に寝室にいた。それというのが常備というほかの何の変哲もない寝室である。

けなはそこで昼寝をしていたのだが、[illegible]



「あー、あーちゃん、どうしたの？　一緒に寝る？」
「それもいいかもしれないけれど、そんな場合じゃないんだ。僕の物が君を狙っているんだよ」
阿九はソファにだらしなく横になっているけーなの前にしゃがみ込む。
すると、けーなは寝ぼけた声で答えた。
「んー、そりゃ大変だね」
「……もうちょっと、真剣になってくれるかい？　僕の物が君の中に取り入って、僕の物でありながら本体を掌握しようと
えているんだ」
阿九は真剣に言ったが、けーなはまだ完全に目覚めていないらしい。
「取り入るってどういうこと？」
「そりゃあ、君から認められて……。つまりずっと君の傍にいて、幸せにしての本体を利用しようとしている
ってことさ」
「うん、ずっと傍にいるっていうのはいいよね。あーちゃん、ずっと一緒にいようね」
けーなはぼんやりとした顔でうなずくと、ひょいと阿九に抱きつき、一緒にソファにごろりと転がる。
「ちょ、ちょっとこら」
阿九はくすぐったそうに言った。
「寝るだけだよ。ねぇ、うとうとするのって気持ちいいよね。特に抱き合ってうとうとするのは最
んだよね」

けなは純兄の頰をすりよせた。
「……だから、そういうことをさせるのが恥ずかしいってことなんだから。駄目よ。僕が偽物だったら、どうするの？」
純兄は思い出したような声をあげた。
「大丈夫。確かめてないけど、あちゃんは本物だって。ほっぺたつけたら、ぺたってするもの。じゃあ、おやすみ」
けなは、ぽやぽやした顔で純兄の頰にキスをした。
「っあ……。だから、駄目ってば、ねぇ、確認するけど、僕が偽物だってわかるってことなのかい？」
純兄は聞いた。
「うん。だけど、偽物も本物も、あちゃんはあちゃんだよ。あたしは何があってもあちゃんの味方だもん。誰かが偽物だって言っても、あちゃんのことをかばってあげるよ」
けなは夢うつつの声で言った。
純兄は、小さく笑った。
「優しい子だな。もう……。でも、そう言ってもらえると嬉しい」

○

慎太郎は、人形の首の後ろ、髪の毛に隠れている部分につけたスイッチを切った。
人形は、がくりと力を失ったように倒れ、すぐに周囲のマナを吸収して元の体勢に戻ってしまう。
「そりゃ、勝手に止まったとは思ってるんだよ。だけど、やっぱり恥ずかしくて本人に言えるわけないじゃないか」
慎太郎は、人形から出てもらっていたけいすを呼び出して、倒れた人形に付けてもらう。
「それに、君だって消したくなかったのはわかってるよ。コピーであっても、魂があるからには、その生まれた意味がなければ甲斐がない……。だからこそ迷ったんだろうな、体を手に入れる時間を取ったところで、すぐに体を作れると本人もわかっていたんだろうからね……。精霊が勝手に出ていったと思った。もっと人間らしくならなくては……」
慎太郎は人形にそう呼びかけた。
「お館様、何故人形殿が倒れたんでござるか？」
けいすは不思議そうに首を傾げた。
「それは、こっちが悪かったからだよ」
「いや、それはわかるでござるよ。だけど、こっちが何か失敗したとばかり」
「人形を探して、外を回っていたとき、一瞬だけ不穏な気配を感じてそちらに向かったのを見計らって、人形の方から接触してきたんだよ。ころねが自分に見つけられると気づいて心配になったんだろうね。私はすぐ気づいたけど

スイッチを切り替える機械を作ったからね。騙されてあげることにした」
「そうでござったか。でも、なにやら難しいことを語りかけておられたようでござるが？」
けいすが問うと、博士は首を振った。
「君はわからなくてもいいよ……。私なりに彼らにわびなければいけないことがあったんだよ。あ、でも、この物語の主人公にもわびないといけないこともあるなぁ」
博士は頭をかいた。
「なんです？」
「そりゃ、もちろん、主人公からさらに恨まれる原因を自分から作ってしまったってことさ」
そう博士が言ったその頃、天才少女の機能が停止したと、連絡を受けた主人公は、けーなを寝かせたまま、研究所を後にしたところだった。
妙に浮き立った雰囲気を感じていた主人公だったが、それが良くなかった。のんびり歩いて、生徒たちの真ん中に突入してから、生徒たちのただならぬ雰囲気にようやく気づいた。
「あ、もしかして、なんか変なことになってる……？」
その後の凄惨さは、とてもこの場では書くことができない。

３　夜の役　楽しい団体

ところで経理主任はいつも忙しい。会長のリリィ・白石はいい加減というわけではないが、業務の事務処理を忘れることさえやっ

ていれば、儀礼的なことは無視してしまってもかまわないだろうという性格であるため、雑務は経

、長谷川の電卓に任されることになってしまっている。

「トマトジュースが足りないでありんす」

大竹美智恵はマナスクリーンをすさんだ目で見つめつつ言った。白い肌に赤い目の容姿のような外見はさらに

車がかかっていて、ひどく病的にすら見える。

……「トマトジュースならデスクにのってるぎゃ」

そう言って自分のデスクを指差したのは、神山カンナである。ボーイッシュというよりはワイル

ドな外見が、今は疲労しきっていて髪も乱れ、ワイルドを通り越して遭難者のようになっている。

女もマナスクリーンにデータを果てしなく表示していた。

「あんさんが買ってきたトマトジュース、塩が入っていないでありんすよ！」

神山は無言でデスクを叩いた。ストローの入ったトマトジュースの缶が少し跳ね上がる。

カンナはうるさそうに顔をゆがめた。

「トマトジュースには塩を入れちゃ駄目だぎゃ。あれは無塩に限るぎゃ。自然のままじゃないと駄目ぎゃ」

「あんさんのその[illegible]なんとかならないもんでありんしょうかねぇ。疲れている時は塩、譲れないでありんす」

「おどれは自分の汗でも乾かして舐めてればいいぎゃ」

「……あんさん、よほどその自分の毛むしられたいようでありんすね」

実況者カンナの言動が止まる。互いにぎらぎらした視線を交錯させた。

と、この[illegible]険悪になったことを察したのか、その時、[illegible]が口を開いた。

「ぐが」

[illegible]長い黒髪の人間である。多くの[illegible]がそうであるように、クールな[illegible]、そう言っている彼女の表情もほとんど変わらない。が、その口調は有無を言わせぬものがある……と思えば、そう聞こえないこともない。

実況者カンナは、双方とも椅子の背にもたれかかった。

「確かに、あちきが疲れていたのが悪いでありんすよ」

「わてもいらいらしていたのはわかってるぎゃ」

「ぐがぐがぐがぐが」

——[illegible]アルヌルは、さらにそう続けた。

実況者は面白そうに笑う。彼女にはアルヌルの言葉が理解できるのだ。

「……なるほど。そうでありんすね。たまには[illegible]も必要でありんす」

「そう言えば、ここんとこ、まったく依頼がなかったぎゃ」
「ゼロ戦でひどい目にあったでありんすからねぇ。しかも、それ以来まったく依頼が来ていないでありんす」
「修繕に大金を使ったぎゃ。わてらも傷ついたのに、懐も冷たいぎゃ」
「それならたまには羽目を外すでありんす」
「賛成ぎゃ！」
[illegible]、カンナは盛り上がる。
「ぐが」
「うん。ここはアルヌールにおごってやるぎゃ。あの戦いのとき、ゼロに操られていたアルヌールをぶん殴った詫びもこめて」
カンナが自慢げに自分の胸を叩き、[illegible]さを感じてカンナを見た。
「カンナは太っ腹でありんすねぇ」
「違う。わてら二人でおごるんだぎゃ」
「ほんに？　まぁ、よろしおす。アルヌールのためなら」
一度は呆れた顔になった[illegible]が、すぐににやりと笑った。
カンナも笑みを見せるが、すぐに真面目な顔を作る。
「しかし、そうなると問題は今後ぎゃ」

「あのお方が、休暇を許すわけがないでありんす」
「ぐが」
三人は腕を組んで悩むが、時間が過ぎるばかりで何も言葉が出てこない。やがてカンナが首を振った。
「ええい、考えても考えてもしょうがないぎゃ！」
「どう考えても、あのお方から休暇をもぎとる方法はないでありんす」
製造長官はあきらめたように手を広げた。が、何かを促すかのようにアルヌルが口を開いた。
「ぐがぐが」
その言葉を待ち焦がれたかのようにカンナは目をぎらりと光らせた。
「結局、逃げるしかないぎゃ」
製造長官は真剣な顔でうなずいた。
「長官、今こそ逃走であって、その……時……。やるなら今でありんす」
製造長官カンナは顔を見合わせ、にやりとした。そして、同時に椅子を蹴ると、身体を翻して研究室の扉に殺到、ドアをはじき飛ばすようにして開けると、廊下を滑るように走り出した。アルヌルはゆったりと歩いて行くが、なぜか製造長官カンナと同じ表情。
しかし、そこに後ろから声がかかり、三人は動きを止めた。
「おい、ちょうどよかった。ちょっと妙な依頼が入ったもんでね……」
後ろからの声に振り返るまでもなくリリィの声だったので、三人は後ろを振り向かぬままで済ませた。

止めた行動を開始。素早く前へとダッシュする。
「……って、あ、こら！　てめぇら、馬鹿野郎！」
リリィは手を伸ばしたが、それには慣れている天使である。あっという間に廊下の角を曲がり、リリィの追撃をかわした。

リリィはわけもわからず後に残されてしまった形になる。
「なんだ、あいつら……。くそ、サボりだな。帰ってきたら、生きているのが嫌になるほどの拷問『おばあちゃんのぽたぽた焼』をかましてやる……」
そうつぶやいてリリィは顔をゆがめた。
「……しかし、なんだろうね。『家族旅行』として使っている間に魔王を倒しに行くと言い残して、寺院に向かったから、援護してくれって、手紙が来たのさ」
リリィは手帳を取り出して、その中から相手の名前を探す。
「どうせあいつらは出ないだろうから……最終兵器も使うか。ま、あいつが起こした不始末を見たいなもんだ。できるかどうかも見てやろうじゃないか」
そして、リリィは悪魔の紗井阿久斗を呼び出した。

○

「こりゃ、きっと怨念てるぎゃ……」
「一度使ったからには、それは気にしないほうがいいでありんす」
街へ繰り出したカンナと[illegible]は暗い顔でため息をついたが、アルヌールは首を横に振った。



「ぐが」

「……そうでありんすね。確かに、私としては今の遊びのがいいでありんしょう」

うなずく零夏である。

なるほど、とカンナも納得（なっとく）する。こうなると切（き）り替（か）えは早い。カンナはすぐさまテンションを上げる。

「よーし、遊ぶぎゃー！　じゃあ、まずはうどんとピザを軽く腹に入れるぎゃ。それから……」

「あんさん、月見うどんとかピザとか、満腹っぽいもの見るとすぐに獣（じゅう）化するでありんしょ
に……。それにそんな量を食べられないでありんすよ」

零夏は呆れるが、それでも笑顔（えがお）になる。

「でも、ピザは良さそうでありんす。そういえば、新しく開店したところが、世界ピザ生地（きじ）を回転させる
のチャンピオンの店だそうで」

「んじゃ、ピザで行くぎゃ。今日まではうどんは見ないことにしておくぎゃ。ピザなら零夏の好きなトマト
えるぎゃ」

「真っ赤なタバスコもかけ放題でありんすよ。そういえばイタリアンには辛いものが多いでありん
すねぇ」

「楽しみだぎゃ！」

笑いながら歩きはじめた二人が、アルヌールが怒声をあげた。

「ぐが」
「え？　後ろに誰かいる？」
「いや、振り返ったらあかんぎゃ」
黒猫美少女カンナが声を震わせる。
何者かがつけてきているのだ。
「せっかく林檎と仲直りしたんだから、騒動には巻き込まれたくないでありんす」
「ん、ありゃ明らかに人間ぎゃ」
カンナは鼻をひくつかせた。嗅覚が発達しているのである。
天才も暴食者も多種多様な院内能力を握っており、さらには魔法少女の戦闘能力も巻き込まれている。可愛い見た目に似合わず、戦闘能力は高い。
振り返らず、追跡者の能力を値踏みした。
「それにしても、尾行者は隠れるのが下手でありんすねぇ……」
「ぐが」
「ん、人間じゃなくて、妖怪っぽい？　あ、そういえば同じ匂いがするぎゃ」
「ほしたら、まあ、なにか事情はわからないけど、結局のところ、それほど問題にはならないでありんすかねぇ」
「うん、いざとなったら、なんとでもなりそうだぎゃ。とはいえ、ついてこられても困るぎゃ。少しまいてから遊ぼうとするぎゃ。じゃ、行きつけの蕎麦屋へ」

カンナはそう言った。

そして、匠大と申し合わせて走り出す。道の角でうまく別れ、それぞれが人混みに紛れた。手練れの追跡者もな
いただろうから、簡単には見つからない。追いついてこられるはずもない。

やがて匠大と落ち合って、蕎麦屋に入った。

「問題なくまけたぎや」

「これで落ち着いてお蕎麦……って、イタリアンのはずでありんしょ？」

「ぐが」

「まぁ、人が集まりやすいところを言ってしまっただけぎや。ちょいと蕎麦をたぐって、銚子一本つけて、それから新しい服もその辺で見ればすぐに揃うぎや」

「お銚子はやめるでありんす……」

匠大はメニューを広げて、軽いものを注文する。やがて、甘味と蕎麦と蕎麦がきがテーブルに並んだ。

「わさびはつゆに溶く派？ 蕎麦につけとく派？」

「気にしたことないでありんす」

「ぐが」

「そもそも蕎麦しか食べない？ ああ、そうなんかぎや……」

匠大が椀に箸をつけつつ、無言で食事をしていると、店の別の数人の客たちが妙に騒いでいるのが聞こえてきた。

「あれ……」

「なんだろうね　食べたいのかしら？」
「見ちゃいけません……！」
女の客たちは、何かを見てざわついていた。女の子たちが座っている方向のようだ。
「……なんか嫌な予感がするでありんす」
[illegible]　おそるおそる日向の方を向いた。
「ぎゃ！」
「ぐが」
カンナとアルヌルも声をあげた。
窓には、べったりと二人の男の顔が張りついていた。
「な、あれはつけてきていた奴だぎゃ……！　まいたはずなのに！」
「ぐが」
「そうか、総当りで内側をのぞき込んでいたんでありんすね！」
男たちの背後は、近くの店の人が不審そうにその男たちを見ていた。その男たちの周囲は人が引いていた。証拠である。
その男たちは、男子の細い女のような格好だった。よく見てみると、大人の男たちは何も漏れず整った顔をしているが、いかんせん外見には気を遣っていないらしく、田舎の気品が漂っていった家である。
「で……ありゃ、なんだぎゃ？」
「さ、さぁ……こうなるとまるでわからないでありんす」

カンナと練習用人形はさすがに顔を見合わせて動きを止める。

その練習用人形、トランペットがほしい子供、水中の小魚を狙うためにホバリングしているカワセミのごとくに天をにらんでいる。微かに揺らすると、何やらむやみな精神を内にたぎらせているかのようだ。にしては構えである。

と、その練習用人形はするり、と腰の後ろに手を回した。そこから出てきたのは、なんと小さな鎌だった。そして、窓から離れると、ドアを開けて中に入ってくる。もちろん、その後は練習場の入口のところへ向かう。

「な、な、なんだぎゃ」

「何か言いたいことがあるなら、落ち着いて話すといいでありんす」

カンナと練習用人形の言うことも聞かず、その練習用人形は鎌を振り上げた。

「オラの名は、もなみ！　魔法使いを倒すためにやってきただ！　まずは魔法の手本を選るだよ！」

もなみと自分のことを名乗ったその練習用人形は一番近くのカンナに飛びかかると、鎌を一気に振り下ろす。

「とお！」

がぺしっ、と間抜けな音が響いただけだった。

カンナは右手の人差し指と中指の間で鎌の刃を挟んで受け止めている。

「お、おちつくぎゃ。わてらのような見習い魔法少女の相手は、ずないぎゃ」

「嘘だべ！　だって制服を着てるべ！」

もなみがじたばたと暴れるので、カンナは鎌ともなみを持ち上げた。

「何すんの」

「殺すの?」

カンナと鎌の農夫は顔を見合わせた。

「それは、魔女の手下の仲間だべ! だから退治してやるべ!」

もなみは手足でわめく。

「いや、そう言われても、わからないぎや……」

カンナはどうしたものかと黙(だま)り込む。鎌の農夫はそんなカンナを肘(ひじ)でこづいた。

「と、とにかく外に出るでありんす。ここでは迷惑(めいわく)でありんしょうから」

「あ、ああ……そうみたいだぎや」

カンナはうなずいた。

客人はじっと、こちらを見ている。

手早く財布(さいふ)を出してアルヌールに渡(わた)すと、[illegible]手づかみに口で[illegible]、カンナはもなみをぶら下げたまま外へ出て行く。

「こら! 放すべさ、卑怯者(ひきょうもの)! [illegible]るだよ!」

「あ、はいはい、わかったぎや。ともかく場所を変えるぎや」

「あ、皆様(みなさま)、申し訳ないでありんす」

カンナと鎌鼬は左肩口からも頭を下げつづけた。
そして、もなみがぎゃんぎゃん騒ぐのが収まりそうにないので、困って顔を見合わせる。
「ぐが」
お金を払い終わって出てきたアルヌルが、街の方向を指した。
「そうでありんすね。公園に行きやんしょう」
「確かにそのほうがいいぎゃ」
公園へ行く間、もなみは暴れ続けた。
「放すべさ！　人権侵害」
「……鎌を放せば下に降りられるぎゃ」
公園に着いてから、カンナがそう言うと、もなみは簡単に納得した。
「あ、そりゃそうだべ」
もなみは手を放す。べたん、と下に落ちる。そして、自信ありげな顔でカンナを指さす。
「ふふふふ、自由になればこっちのもんだべさ。覚悟するべ！」
そして、もなみは再びカンナに飛びかかろうとする。
「だから、落ち着くぎゃ」
カンナは手を振った。その指はまだ鎌に挟まれていて、鎌の柄の部分がもなみの顔の数センチほど先を通過する。が、もなみは大きく後ろに飛び退いて、怯えた顔をした。

「武器は卑怯だべ！　そうか、さっき放せばいいと言ったのも、武器を奪う策略……なんと悪賢いべ！　さすが魔王の手下」

「いや、だから、そうじゃないぎゃ」

杖を振るカンナだが、もなみはいきり立ったままだ。

と、そんなもなみの前に、アルヌルが立ちはだかった。

「ぐが」

「ぬぅ、おっきい奴だべ！」

もなみはひるむ。

「ぐがぐがぐが」

「おめも魔王と関係ないって言うべか？」

もなみにもアルヌルの言葉がわかる。と、アルヌルは人間の国で通る標準化された言葉を使いはじめた。

「ぐがぐがぐがぐがぐがぐがぐが」

「え？　魔王軍は確かにこの周辺の村を襲って通っているが、別に人を殺して支配しているわけじゃない？　さらに魔王は退治されたが、っていうような奴は、他にもたくさんいるが、誰も討伐していないからやめておけ？　だべか？」

もなみはアルヌルの言葉を繰り返した。

実際はアルヌルはさらに沢山の情報をもなみに伝えているのだが、もなみにはそれしかわからなかったらしい。だが、それだけでも十分だった。

「そうだべか……」
もなみは暗い顔をして下を向いた。
「オラ、魔王を倒したかっただけなんだべ。そら、お姉さん方は悪いことをしたべ。この通りだ」
もなみは頭を深くさげた。
「あ、わかればいいぎゃ。これに懲りたら無用に悪いことはやめるぎゃ。わてらと同じ制服の生徒がいて
襲っちゃ駄目ぎゃ」
カンナはそう言って鎌を返す。
すると、もなみは鎌を腰に差し、とぼとぼと歩きはじめた。
その後ろ姿を見つつ、健太郎は苦い顔になる。
「なんか悪いことをしたような気になりんすね」
「つっても、しょうがないぎゃ。どうしろっていうぎゃ。そもそも、なんで魔王の子供の頭が冒
ってのは何ぎゃ？」
カンナが口をとがらせる。
「ぐが」
その問題は、アルヌルが答えた。
彼の仮説によれば、介護の担い手のいない土地に、魔王の子供のような人間が作られることがあるという。が、彼らは
入者の死亡はどこにより有罪者の方に変わりやすい。さらに長く一つところで過ごして、自我が目覚めた個体は買い取り手がな

く周囲などの状況に振り回されたりすることが多いらしい。
「さらに、あの体内の何かの欠陥がある可能性も高そうなんでありんすか」
[illegible]暗い声になる。
「じゃ、[illegible]いるはずだぎゃ」
「ぐが」
「……[illegible]いるとしても、連絡はすぐにとれる状況ではなく、[illegible]壊れているんじゃないかってことでありんすか」
[illegible]アルヌルの説明に、肩をすくめた。
それから、気まずい沈黙が流れた。
「……まぁ、まぁ、ピザでも食べに行くぎゃ。[illegible]意味わかんなくなっちゃったことだし」
カンナが無理に笑う。
「ぐが」
「そ、そうでありんすね。アルヌルも無理にかかわるべきではないと言ってるでありんすし」
[illegible]ぎくしゃくした[illegible]言うと、カンナと肩を組んで歩き出した。
「さぼりだけに楽しむぎゃ！」
「[illegible]い、ないない。今日は楽しむでありんす！」

体の動きだけは大きく、しかし、死んだ目でウィンドウショッピングとしゃれ込んだ天使が、もちろ

ん、笑い声は、空しいものとなる。

「あはは、たのしいぎゃ」

「たのしいでありんすね」

「ぐが」

が、その沈黙の時間は自然と多くなる。と、その沈黙の間、背後でとんでもない音が、響いた。

どがっしゃん！

嫌な予感にかられて振り返ると、案の定そこにはもなみがいた。しかも、最悪なことに、どうやらカ

フェのテラスに座っていた男に飛びかかって、すっころんだものらしい。

「ぐぎゃ、ぎゃ……」

「最悪でありんす……」

カンナと紺は頭を抱えた。座っていた男は、どう見てもまともな人間ではない。派手な色のスーツに、妙な色の

クセサリーをじゃらじゃらとぶら下げている。

「情けないるべ、魔王の手下」

もなみはカフェの椅子をぶっ倒しながらも、また例の口上を述べはじめた。

幸い、からまれている男は、あっけにとられているようで、まだ怒り出してはいない。

カンナと紺は顔を見合わせ、苦笑いを浮かべた。

「……やるぎや？」
「……お付き合いでありんす」
[illegible]はうなずく。同時にカンナが走り出した。カンナは横っ飛びにもなみを抱え上げると即座（そくざ）にきびす
その後[illegible]はすっ飛んで行くと、倒れた椅子や乱れたテーブルを直し、有無を言わせぬ速度で頭を下げた。
「大変失礼したでありんす！　では！」
それからカンナよりも早いスピードでその場から逃げ出した。

○

「はぁ……まいったぎや」
「やめろと言ったでありんしょうに……」
適当な場所で逃げてから、カンナが抱え上げたもなみに説教する。
しかし、もなみは不満そうな顔をするばかりで、答えようとはしない。
「ぐが」
見かねたアルヌールが問うと、もなみは同じようなことを繰り返した。
「だって、オラは魔王を倒さなければならないで」
「そう言われても、それをやめろと言ってるぎや」

カンナがそう言うと、もなみは首を横に振る。
「納得しないといけないべ」
「……あのなぁ。そのわりに無関係な人を襲ってどうするつもりだぎゃ？　ホントは魔王が誰かも知らないんじゃないぎゃ？」
カンナはそう聞いたが、もなみは否定した。
「コンスタン魔術学院の上級生達……っ知てるなら、なんで手当たり次第にやってるぎゃ？」
「上級魔法使いがいっぱいいるべ？　だから、そいつらを倒して経験を積むのが当然だべさ」
もなみの言っていることは、一応は筋が通っている。もっとも、もなみは反論などしそうにはないし、大筋では間違ってはいるが。
「本当はそんなに多くないし、今は魔王様がその魔力を抑えているぎゃ」
カンナはさらにそう続けたが、もなみはまだそれを信じない。
「本当はこの街のどこにでもひそんでいるべ？　それにやっぱり、生徒達はかなりの数の魔法使いなんだべ？」
「だから、そうじゃないって言ってるぎゃ……」
カンナが目を閉じると、新たな案をふと思いついたように手を叩いた。
「それなら、案内してあげやんしょ」
「え？」

カンナももなみも同時に驚きの声をあげる。
と、鎧の騎士はカンナに耳打ちをした。
「詳しい事情はわからないけど、子供の遊びでありんしょ。いざとなったら鎧の騎士を呼び出して、ちょっと遊んでもらうでありんすよ」
「なるほどぎゃ」
それにはカンナも同意した。
「わかったぎゃ。それじゃ、協力してあげるぎゃ」
もなみを下に降ろし、カンナは自分の胸を叩く。
「協力するべか？」
「そうだぎゃ。鎧の騎士に会わせてやるぎゃ。一緒に戦ってやるぎゃ」
カンナは自信有りげに言った。
普通の人間なら、不意に殴っても勝てない。そして、その迫力を見たらもなみは驚くだろうし、それで[illegible]されたと信じるだろう。そう思ってのことだったが……。
「それなら行くべさ！　さぁ、ついてくるべ」
もなみは頷いて立って、一歩踏み出した。まるで「自分がリーダーだ。ついてこい」と言っているかのような態度。
「だから、案内するって言ってるぎゃ」
カンナは言ったが、もなみは動かなかった。

「だから、無理に行かなくちゃ行けないって言ってるべ？　東京の中心の場所はわかってるだよ。経験を積む必要はなくなっただけだべ。お前さん方なかなか強いだでなぁ」
もなみは大股で歩きながら言った。
兵太はその後をひょこひょことついていく。
「え？　場所はわかってるでありんすか？」
「そうだべ。当然、調べてるべ。ほら、早くついてくるべ！」
もなみは楽しそうに大きく手を振りながら歩いて行く。
「ちょっと……どこへ行く気ぎゃ」
「だから東京の中心ってところだべ」
もなみが歩いて行くのは、普通の住宅街だ。
「なんでこんなところに……」
兵太は戸惑っていると、もなみはある小さなアパートの前で立ち止まった。
「なに？　ここなんかぎゃ？」
カンナが問いかけるが、もなみはそれには答えず、すたすたとアパートの入口の前へ。そして、下に落ちていたブロックを両手で頭の上まで担ぎ上げると、それを思いっきり窓に叩きつけた。
がっしゃん！
「ぎゃ！」

「ひぃ！」
天井が、破壊(はかい)される音が響く。それと同時にカンナと館長が驚きの声をあげた。
「なんじゃ、こらぁ！」
穴の中からだぶついたシャツを着た男が顔を出してきた。頭をそりあげている。それどころか眉(まゆげ)まで
ない。明らかにまっとうな人間ではない。
「に、にげるぎゃ！」
「こりゃまずいでありんしょ！」
カンナと館長は動き出そうとするが、それよりも早く、もなみは行動を起こしていた。
「とぅ」
もなみが、間の抜(ぬ)けた気合いを入れる。
気がつくと、鎌の先端(せんたん)がスキンヘッドの頭部に突(つ)き立っていた。
「ぎゃあああ！」
「ひぃいいい！」
カンナと館長はさらに悲鳴をあげる。
スキンヘッドの頭からは血が流れ出ている。ほんのわずかしか刺(さ)さっていないとはいえ、見た目は良くない。
「なんじゃあ、こらぁあああ！」
吼(ほ)えるスキンヘッド。

カンナと鉢巻男が逃げようと周囲を確認する。が、アルヌールが「ぐが」とつぶやいて指差した道の向こうを見て愕然
とした。こちらを見て怒りの顔で駆け寄ってくる男がいた。なんと、カフェでもなみが襲うと
ていた男だった。

「……っ鉢巻男てことでありんすかねぇ？」

「ま、まいった、ぎや……」

鉢巻男とカンナが戸惑っている間、スキンヘッドはもなみを捕まえて持ち上げていた。

「放すべさ！　こら！」

「舐めたことやってんじゃねぇぞ、このガキが！」

スキンヘッドの剣幕は凄まじい。このままではもなみが大変なことになってしまうのは
いなかった。

「や、やるんかぎや……？」

「ど、どうしたものでありんすか……」

カンナと鉢巻男の額から汗が流れる。

腕に覚えがないわけではない。ただ、町中でたぶん素人を殴るというのは、ある種の一線を越えた人間ない
は、場合後を考えてしまう。

と、その逡巡の間、果実を差し出していたのはアルヌールだった。

「ぐがっ！」

果泉もなみの身体を引っくり返し、スキンヘッドが頭から抜いてもなみに突きつけようとしていた鎌はじき飛ばす。

「ちぃ！　なんだてめぇは！」

スキンヘッドは叫び、左手を伸ばした。そして、その左手を輝かせ、アルヌルに向かってマナ球を撃ち込んでいく。

「ぐが！」

アルヌルはそれをたやすくはじき飛ばしたが、彼が魔術を使ったことは、カンナと男達が行動するには十分だった。

「不用意に攻撃をしたってことは異界の魔術師じゃ、ぎゃ！」

「そういうことなら、無抵抗でさえすれば問題ないでありんす！」

三人はうなずきあって左右に分かれる。

「どっ、ぎゃあああん！」

カンナはその左手を蹴上げてスキンヘッドを一撃で吹き飛ばした。

「そぉおれぇえい！」

鉄壁男爵は突風を起こして走ってきた男の足をすくうと、その隙に果泉は背後に回り込んで延髄に一撃を加えた。男はあっという間に気絶して道に倒れ込む。

「つまり魔術師ってことは……」

「ホントにその筋肉が太かったぎゃ」

侍女長カンナは顔を見合わせた。

「ぐが」

アルヌルがもなみを下に降ろし、大声をかけた。

「ぐがぐが」

「え？　つまり、どういうことだぎゃ？」

「もなみの言っていることは、ある程度は嘘じゃないんでありんすか？」

「ぐがぐが」

そしてアルヌルは、もなみから聞いた話を要約して話しはじめた。

なんでも、もなみが持っていた魔王の手下リストというものを見た限り、悪質な地上げを行っている業者の名前ばかりだったのだという。

「そして、もなみの家が地上げされそうになって、脅されていたんでありんすか」

「とはいえ、そういうことなら、こいつらを騎士団に突き出せば終わりだぎゃ」

カンナは胸をなで下ろす。

「そうでありんすね。おそらく、魔王というのは、脅しにつかったはったりか何かでありんしょう。違法行為が向こうのしていたことなら、すべて解決でありんす。さ、まだ時間はありんすよ。してもなみを帰したら、晩ご飯にピザを食べるくらいはできるでありんしょ……」

「ぐが」

楽しそうに言った錬金術士アルヌルは、遮った。

「え？　そう簡単にはいかない？」

「ぐがぐが」

「領主閣下は、賄賂が贈られている？　騎士団の連中も例外なく。犯罪を行いたいがためだけの違法な取引を見逃して貰っている？」

「……まいったぎゃ」

「それでも領主閣下の所に行けばなんとか……ならないでありんすね。よく考えたら、兵士をぶん殴っていない。騎士はこの街にいないでありんす」

「賄賂なくても、まぁいい顔しないはずだぎゃ。それに領主閣下も地下の闇取引を潰しに事を構えたくない……ということは」

錬金術士カンナは少し顔を暗くする。

「まぁ、報告だけはしておくかぎゃ？　それで帰る……とか？」

カンナは無理やり笑みを作って言った。

しかし、錬金術士の表情は笑えない。

「そういうわけにはいかないでありんしょ？　もなみの一家の稼業は行商に決まっているでありんす」

「そらそうだぎゃ……。ってことは？」

「こっちから行かなきゃいけないでありんす」

[illegible]は肩をすくめる。

「ぐが」

アルヌルがその後ろを指差した。

[illegible]に倒された男も立ち上がり、逃げながらどこかに連絡をしている最中だった。

「これで、さらにまずいことになったぎゃ。向こうの勢力が襲撃できなくなったぎゃ」

「もなみ、家につれていってくりゃれ。そうでないと、家が壊れてしまうでありんすよ」

。

「これが、もなみの実家でありんすか」

「なんというか……率直に言って……ぼろいぎゃ」

「ぐが」

アルヌルさえも絶句した。

そこは、敷地こそ広いが、中央にある屋敷は木造の平屋で、作りは実に豪奢だが、どうにも古い。傾きかかっていて

そこには、館『笹原』とあるも、幽霊屋敷と言われるだけの雰囲気があった。

「しかし、地上げ屋に狙われるのはわかるぎゃ」

カンナは周囲を見回した。街中、ここだけが緑たっぷりの都会のオアシスとなっている。けっこうな
さの園内を何軒かで所有しているようなものだ。

「旅館にこだわらなくとも、料亭でもなんでもやれば儲かるでありんしょうに」

「それが、何をやってもうまくいかないべさ。オラが屋台をやってそこの料理を食べているくらいだ

もなみは黙って脇を指した。整った顔立ちがそこにあった。

「なんでもうからないぎゃ？」

「それは考えることではないでありんしょう。それより、ここは好守にくい場所でありんす」

喧嘩ばかりしている夫婦である。そこが旅館には適していないことはすぐにわかった。向こうは体を隠

て移動できるし、火を付けることもできる。

「確かに、これは厳しいぎゃ……」

「ぐが」

二人で話し合っていると、旅館から人のよさそうな夫婦が出てきた。いかにも女将さんと、旦那さんという感じの

だ。

「もなみ！」

女将さんが駆け寄ってくる。

「ああ、これはでありんすね……」

旦那さんが口を開くと、それよりも早く、女将さんが頭を下げた。

「ええ　ありがとうございます。院の天才ですよね？　お願いしていた通りに連れてきていただい
て。いや、この子が魔王を倒しに行くんだなんて無茶を言いまして……」
どうやら事情を知っていた風ではある。そういう事態は話が早いが、今の状態を歓迎していないらしい。
「いや、それがだぎゃ……」
「はい？」
「どうも、その……もなみちゃんが魔王の手下……というわけでもないんだけれども、ともか
く、そんなのにつっかかっていって怒らせちゃったんだぎゃ」
カンナが困ったように言ったが、それでも事情がわかっていないように、女将さんは目をぱちくりさ
せた。
「はぁ……そうなんですか」
「いや、そうなんですか、じゃないぎゃ……。ええと、簡単に言うと、危ない奴がやってきて、
この家、燃やされるぎゃ」
そう結論付けカンナが言うと、さすがに女将さんはうろたえはじめた。
「えええええ！　ど、ど、ど、どうしたら……」
「ともかく隠れるしかないぎゃ。こっちでやるから、家の者はところに籠もっていて。この
なみをしっかり捕まえていて欲しいぎゃ。この子ほっとくと戦おうとするに決まってるぎゃ
カンナがそう言って、もなみを女将さんに引き渡した。

もなみにしがみつかれた女将さんは、しきりに頭を下げはじめた。

「女将さん、もう、なんと言っていいやら……」

「お礼はあとでよろしおす。それより、早く家へ入っていて欲しいでありんすよ」

家の者が促すと、弥五郎さんが女将さんともなみの手を引いて歩き出した。

「さて……向こうはどう動くぎゃ……」

「ぐが」

「うん。今宵よりは、家を潰しちゃう方が早いと判断するはずだぎゃ」

「結局どうあれ、手を出したのはこっちでありんすからねぇ。かなりの手勢ではやってくるはず

でありんす。家を壊す程度でなら、自分達が来ないと踏むでありんしょう」

「でも、向こうはこっちの様子を見るぎゃ。その、復讐が優先されるだろうと思えば、家を壊すのは、こ

らに喧嘩を売ってからになるだろうぎゃ」

「ぐが」

「家を壊すのを、こちらをおびき出すために使われる可能性はある……か。危険はあるけれど、家を囲む形

かれるしかないでありんすね……」

三人はそう打ち合わせた。

その話が終わった夜、周囲の闇に、ただならぬ雰囲気が漂うのがわかった。

「来たぎゃ」

「敵でありんす」
「ぐが」
兵はそれぞれ四方に走った。
時を同じくして、開戦の合図を告げたのは、詠唱銃の一斉射撃だった。
発砲を受けたのは、一家の家来衆を守っていたカンナである。
「爆発系かや……！」
不意をつかれたカンナは、銃弾そのものを避けることには成功するも、その後の激しい爆発には巻き込まれる。
どう、という爆発音と共に大地を揺らし、爆煙が巻き起こる。
勝ち誇った魔術師は、自らが放った詠唱銃の効果を確認すべく、詠唱銃を握ったまま木の間から姿を現した。
しかし、煙が晴れて、彼が見たものは、倒れているカンナではなく、一体の巨大な獣であった。その姿は巨大な狼に似ていた。
「な……！」
魔術師は驚きの声をあげる。
「……そう来るなら、こっちも最初から全力で行くぎゃ！」
獣と化したカンナは、一声吠えると、近くにいた魔術師に飛びかかり、瞬時に押し倒して武器をはじき飛ばした。
しかし、それを見た他の魔術師たちは戦法を変えてきた。マナ球を木々の間から動き回りながら撃ち込んでくる。

「ぎゃ、ぎゃ……殺虫剤はちょっと、とややそう、とじゃ死なないからって、絶滅危惧レベルに追い込みそうな武器を振りまわしてくるのはどうかと思うぎゃ……」

カンナはぼやくが、それでも木の幹を蹴って素早く空中を跳び回り、一歩も地面に降りぬまま、五匹を連撃で地面に打ち倒した。

それでも、カンナに対する攻撃は止まない。

「……こっちを倒すことだけが目的になってるみたいだぎゃ」

そのカンナのつぶやきと同じ感情を、銀髪美人も抱いていた。

「結局、こいつらにも手を出していたでありんすね……」

術リリィは結局、昔からその筋の人々から鬼畜と呼ばれている。それは、気に入らない奴をすぐに腕を伸ばしてぶん殴る癖があるからだ。もちろん、昔からその筋の人々はリリィを恨んでいる。その数は圧巻であるの顔を覚えていて恨んでいるであろうことは間違いない。

その銀髪美人、カンナ同様かなりの苦戦を強いられていた。「機械コウモリ」を呼び出しての攻撃を行える銀髪美人、この環境下ではかなり有利に戦をすすめられるはずだが、どうやら敵側にも手練れがいるらしい。「機械コウモリの無線電波に気づいたようで、敵側より妨害の超音波を放ちはじめた。銀髪美人、これでは限界に入っている

コウモリしか操れない。

「コウモリを呼び戻せば、身は守れるでありんすが……」

銀髪美人は焼却炉の陰に隠れており、カンナのように銃撃を受けることはないが、結局のところそれは物陰に隠れて、銃撃し合うのと同じことだ。そして、そんな持久戦になれば、当然数が多い向こうに分がある。

「こりゃ、まいったでありんすよ……」
そして、アルヌルも別の相手と戦っていた。こちらはなんと魔法使いたちの持ち込んだ重機、ショベルカーと
で格闘（かくとう）する羽目になっていたのである。
「ぐがが……」
アルヌルはショベルを抱きかかえるようにして前進を阻（はば）んでいるが、馬鹿力（ばかぢから）のアルヌルとい
えども互角なのはそこまでだった。さらに、動けないアルヌルに対して、魔法使いたちは離れたところか
らマナの球を次々と撃ち込んでいる。アルヌルも防御（ぼうぎょ）フィールドで対抗（たいこう）してはいるが、マナの消費が激
く、防ぎきれはしない。
「ぐがが……ぐがっ！」
アルヌルは悲鳴をあげた。
ショベルカーがそのアームを左右に動かし出し、ある力の方向に回ってしまったアルヌルが、その力に耐（た）えきれな
くなったのだ。
アルヌルはショベルに持ち上げられ、放り捨てられる。
「ぐがっ！」
地面に放り出されたアルヌルは、そこで背中に柔（やわ）らかい感触（かんしょく）を受けて、顔を後ろに向ける。同様にカンナと[illegible]
されていた。
「う……。や、やばいぎゃ」

「これは……命を守ることだけに必死になった方がいいかもしれないでありんす……」

「ぐが……」

天井、泥(どろ)だらけになった顔を見せた。

が、何をする間もなく、柄の悪い取り巻きたちに囲まれる。

「舐(な)めた真似(まね)してくれたな、お嬢(じょう)ちゃん」方

リーダー格らしき白スーツにリーゼントの男が、前に出てきて声をかけてきた。

無言でいると、白スーツは勝ち誇って迫る。

「まぁ、後でこじれるといけねぇが、けじめだけは取らせてもらう。殺しやしねぇが、せいぜい良い声で泣いてもらわねぇとな」

白スーツはあごを振って手下に命じた。大男が応じ、カンナたちの髪(かみ)をつかんで強引(ごういん)に立ち上がらせる。

「助けを呼んでいるかもしれねぇ。館の鍵(かぎ)、壊して押(い)し入るぞ」

その白スーツの手下が、数人がかりで家の扉を蹴飛ばしはじめた。

「や、やめ……」

カンナがうめいたが、カンナを背後から押さえているのとは別の男が、その腹を蹴りつけて黙らせた。

「ぐっ……」

カンナは痛みよりも、屈辱(くつじょく)にその顔をゆがませた。

「っ黙てな、殺しやしねぇ。それにしても、大家さんが来るかと思って、戦くらいの数も減ってきちまったい

なくて助かったぜ。今更来ても遅いが」

スロッツはそう言って、家の扉を蹴り開けた。

「うぐぐ……来るときに大家の前でおけばぎゃ……」

「サボりだから無理だったでありんす……」

「うう、ピザが食べたかったばかりに、こんなひどい目に……」

嘆くカンナたちだが、そんな言葉、誰も聞いてはいなかった。

ただ一人を除いて。

「まいったな、何をしても気分が良くはならない状態になっているなんて」

背後からそんな言葉が聞こえてきて、魔法使いたちは顔をしかめた。

「てめぇ、何の根拠もないことを言ってやがる……」

スロッツの男は、聞き捨てならない言葉を発したと思ったのだが、振り返って動きを止めた。

「なっ……化け物じゃねぇか！」

「……化け物？」

魔法使いたちがざわつく。

スロッツの男からそう言われたのは当の本人、難しそうな顔になった。

「そんな風に驚くくらいなら、最初から僕の名前なんて使わないでもらいたいんだけど」

「え……じゃあ……」

[illegible]ちは、慌てて彼らから離れはじめた。

「馬鹿野郎！　びびってたら話なんねぇだろうが！」

[illegible]ツは――彼[illegible]指して、そう言ったが、[illegible]ちにカンナたちを人質にとれ、と手で指示した。

[illegible]ちは、それに応じて[illegible]カンナたちの顔を突きつけようとした。

阿九斗は顔をしかめる。

「だから、殺す気はないって言ったのに……」

阿九斗はそう言った次の瞬間、カンナたちを捕まえていた男たちの腕が大きく横に広げられた。まるで、[illegible]ちの意志は別の[illegible]動き出したかのように。

「おい、おい……何してやがる……」

[illegible]ツは怯えた声をあげた。

「わ、わからねぇっす……手が勝手に押さえられてるみたいで……」

[illegible]ちの言葉に、[illegible]ツは阿九斗を見た。

阿九斗は暗い顔をしてうなずいた。

「僕がやってる。だけど、僕がやりたいわけじゃない。まぁ、僕の言うことなんて聞いてくれないだろうから、時間がないから説明せずに手短にやるけど」

「な、何言ってやがる……ってえ！」

アロイツは魔術を放とうとして、やはり動きを止めた。その手が勝手に開く。まるで十字架にかかっているか
のような姿勢になる。
「馬鹿な……！　人間が同時に押さえつけられるマナの量なんてあり得ねえ！」
狼狽したアロイツは怒鳴った。その顔はまだ恐怖の色しかなかった。それを見た阿丸は落胆の表情を浮かべ
る。
「それがわかったなら、今、僕が何を考えているか想像したりしないわけ？　つまり、そのどう
たら許してもらえるか、とか？」
阿丸はため息混じりでそう言った。
と、アロイツもその手下たちも、ようやく意味を飲み込めたらしい。追従するような薄ら笑いを浮かべて、詫
びの言葉を並べはじめた。
「す……すんませんでした。歯向かったりして。いや、そりゃあ、しかし、頭目の命令には逆らえ
いるからで。ねぇ、そうだ。兄貴、舎弟にしてくだせぇな。俺っ……」
そのアロイツの言葉が終わるまで聞かず、阿丸は首を横に振った。
「違う。そういうことじゃない」
その声に怒気はなかったが、そう言った瞬間、アロイツの口から凄じい悲鳴があがった。右腕がねじれ、バキバ
キと音を立てていた。

「ぎゃあああ！　す、すんません、すんません、そ、そういうことじゃなかった……。こ、この件からは手を引きます……。だから……」

「そういうことでもない」

阿久比が手を伸ばしかかるように言って、乙ロツの手に視線が向いた。途端、手首が振れてねじれる。またも悲鳴、暗くなった空に響いた。

「謝（あやま）る相手が違う。そんなこともわからないなんて」

そう言って、阿久比が手を振った。男たちは、全員がその身体を宙に浮かせた。そして、吸い寄せられるように阿久比の前に並ばされる。

恐怖に凍（こお）り付いた顔をしている男たちに、阿久比はまるで教師のように言った。

「さて、どうするべきか理解わかった人は？」

が、そんなことを言われて、素直に手を挙げる者がいるはずもない。沈黙の前、阿久比は呆（あき）れたように首を振った。

「ごめんなさい、と一人ずつ謝るべきだろうに」

阿久比が手を振った。近くにいた一人の腕がねじられて悲鳴をあげた。

まだ腕をねじられていない者は、慌てて謝罪を入れはじめる。

「ごめんなさい！　ご、ごめんなさい！」

が、阿久比は即座にそれを否定した。

「人に言われてから謝ってどうするんだ！」

そして、さらに二人の男が身をねじった。
軟体動物のようになった魔法剣士たちが地面に転がってうめく。
「さて、どうするべきかわかったかい？」
もう何度も同じ質問を聞いた。
だが、またも答えられる者はいなかった。同じ質問を何度も繰り返すうち、魔法剣士たちは、理性を残していたはずだ
が、今は全員が情けない悲鳴をあげてのたうつだけの存在となっていた。
「お、恐ろしいぎゃ……」
「せ、強盗……いや、それより恐ろしい何かでありんす……」
「ぐが……」
助けられたはずの天人族の者たちが身を寄せ合って震えていた。
「どうしてわからないんだ……。ちゃんと謝って、まっとうに生きるってことを誓うなんて
なことが何でできない……」
「ち、誓います……誓いますから……」
召ツの男が泣きながらうめいた。
魔法剣士たちが暗い顔で首を振った。
それにも魔法剣士たちが首を振る。
「だから……言われてからやっても遅いって」

そう言って男子生徒はねじろうとしたが、ねじる必要はないことに阿光丸は気づいた。
「まぁ、いいや。ともかく自分から捻じ曲げてもらうのが重要なんだ。結局のところ、そういうことなんだ
からさ……」
そうつぶやくと、魔法使いたちは呪文を再び唱え浮。と、ねじ曲がっていた男子生徒の周囲にマナが集まり、みるみるう
ちにその男子生徒はまっすぐに戻りはじめた。彼の顔も血の気が戻ってくる。
魔法使いたちの顔がほっとしたような笑顔と、後悔の涙が光る。
「あ、ありがてぇ……よくわかりました。これからは心を入れ替えて……」
スコットは阿光丸の前に素早く正座した。
と、その瞬間、阿光丸が不愉快そうに光った。
「謝る相手が違うって言ったよね？ それじゃ、傷つけられたから謝ってるだけじゃないか！」
阿光丸は怒鳴った。そして、先ほどスコットの全身をねじり潰した。
「ぎゃぁああああああああああ！」
その凄惨な光景に、魔法使いたちは震え上がった。カンナたちも、さすがに言葉もない。
彼を冷たく見下ろし、阿光丸は困ったように言った。
「反省がわかるまで、治療してねじるを繰り返すから。一人でもわからなかったら連帯責任ってことになる。
わかった？」
魔法使いたちは言葉を発することもできなかった。

「ああ、この理不尽さは見たことあるぎゃ……」

「林間学校のときの肝試しの時でありんす……」

カンナと美雪は震えながら、目の前の光景を見ているしかできなかった。

男たちの骨が砕かれて、ぐにゃぐにゃにされては再生させられるという地獄絵図。

そして、男たちの被害再生が十サイクル目に入った時、さすがに異常に気づいた宿の人が、おそるおそる破壊された玄関から顔を覗かせた。

「ひぃいいいい！」

「うわぁぁぁぁぁ！」

女将さんも、番頭さんも、ものの見事に腰を抜かした。

血だまりにうごめく軟体動物と化した、柄の悪い男たちの末路。ただ、冷たい笑顔で突っ立っている魔王を見て平気でいられる者はそう多くないだろう。

「化け物、魔王ぁああ！」

「い、命ばかりは……！」

そう叫んで、二人とも気を失った。

それを見て、魔王はさすがに居たたまれない顔になった。カンナたちに歩み寄ると、頭をかいた。

「ごめん。ちょっと場所をわきまえなかった」

「……いや、その程度のことじゃないぎゃ」

「や　やりすぎというか……　なんというか……　でありんす」

「ぐが」

巨人　困惑(こんわく)して首を振った。

と　そこに石ころが飛んできた。　カンナに当たりそうになったのを反射的に手ではじき飛ばす。

「もなみ……」

石を木に何回もやった巨人がつぶやく。

「うわぁああん！　やっぱりおめえら魔物に関わったんだべ！　でなければ家の前にこんなただひどいことしてご先祖様に顔を見せるはずがねぇ！　家めちゃくちゃでねぇだか！　帰れ！　帰れよう！」

もなみが泣(な)き叫びながら　必死に石を投げていた。

「これは……」

カンナが何か言おうとしたが　それを巨人が制した。

「まぁ……　もういいでありんす　仕事は終わったんでありんすから」

「ぐが……」

アルヌルも立ち上がって　二人をうながした。

カンナはうなずいて立ち上がり　少し行ってもなみを振り返ったが　もなみはそんなカンナにも石を投げていた。

「あ……。ごめん。なんか、悪かった……。なんと言っていいか……。その……いろいろ付けて
くる」

[illegible]それを見て暗い顔になり、[illegible]ちを彼が持ってきたショベルカーのショベルに詰めはじめた。そしてショベルカーごとひょいと肩に担ぎ上げると、カンナたちとは逆方向に歩いて行く。

カンナはそれを見送りながら、苦笑を浮かべた。

「[illegible]ぎゃ……」

「真面目にやってたのがばからしくなりんす……」

「ぐが……」

「でも確かにあいつならまぁ処理してくれるぎゃ……」

[illegible]、[illegible]を振り払いながら、とぼとぼと夜の街の路地を歩いた。

「それにしても、とんだ一日になったぎゃ……」

「確かに今日はいい一日じゃないでありんす」

「ぐが」

「そう。サボり……って、っ[illegible]てるぎゃ！」

「ああっ！　そうでありんす！」

「ぐがぐあがぐあがうがうがう！」

「取り乱すなぎゃ、アルヌール！　ああ……でも、こりゃ[illegible]会長からおしおきだぎゃ」

「はぁ……　あちきらはピザが食たかっ　ただけでありんすに……」

〇

「本来ら　生きているのが嫌になるほどの拷問『おばあちゃんのぽたぽた焼き』をかましてやる
ところだが……。罰として晩飯おまえらは野宿」
リリィ有言　夜遅くなってから帰ってきた兵士　何かゆいところに手が届かないような顔を出した。
「の…野宿ですかぎゃ？」
「そうだ。つまり晩飯抜き　ベッド抜き　寝床抜きだ。敷地内の山で寝ろ　それだけだ」
「あの……　それだけでありんすか？」
「くどいな！　なんなら　やっぱりすげぇ罰を与えてもいいんだぞ　ぼんくらどもが！」
リリィが態度　天使に素直に退散した。
そして、山の山まだなだらかなところを見け　天国って星空を眺める。
カンナが地べたに　座り込んでぼやくと　無機質な口ことがらせた。
「ああ　どうしてこうなった　ぎゃ……」
「ぼやかれても困らし　お腹がすくだけでありんす、体はあんさんは野原で汚れても仕方でありんしょうが　あちきは汚れるのは嫌でありんす」

「もう喧嘩汚れまくったぎゃ。　気にするなぎゃ」
「ああ　もう　負けた喧嘩のも腹立つでありんす　だいたいありゃああんさんが……」
「ぐが」
「ああ　もう……　そうでありんすよ……　喧嘩お腹さらにすく……」
鮮黄色のマントが汚れるのも気にせず　ごろりと横になった。　そしてぼやく。
「ああ　ピザ……。　モッツァレラにゴーダ……。　トマトパプリカサラミ……」
「熱いぎゃ。　腹減る」
「あー　だって！」
鮮黄色の身体をじたばたとさせた。
と　そこに不意に声がかかる。
「あの――」
「ん？」
二人同時にそちらを見ると　男が大きなバッグを担いで丘に登ってきていた。
「ど……　どうしたぎゃ？」
半目をそらしながらカンナが問う。
どちらが悪いわけでもないが　今日のことはやはり気まずい。

「あの人は作り始めてきた料理にもねじ込んだよ。いや、それはいいんだ。それが……あのときの茶

いちゃってね」

陶九郎は、気まずそうに言った。

「あのときの？ 答え」

類美はそう問い返すと、陶九郎はバッグをおろし、そこら辺に転がっている石を集めはじめた。

「うん。いや、ピザが食べたかったんだって？ それと夜会から青葉の罰を与えられたと聞いてね」

「それと、石を集めるのとの何の関係があるぎゃ？」

「簡単だよ。窯(かま)でもなんとか焼けるものさ。ピザって作ってあげようと思ってね、発酵(はっこう)させた生地(きじ)と材料を持てき

たんだ」

陶九郎は石でコの字に組みつつ、バッグを大きく開けて見せた。

「おおっ！」

「ああっ！」

「ぐがっ！」

三人は目を輝かせて声をあげた。

「すごいぎゃ！ 伊達(だて)の名を落としてないぎゃ！」

「やっぱりこんなマメさが秘訣ってでありんす！」

「……あのねぇ、食べさせてあげないよ？」

「嘘ぎゃ！　思わず惚れたって言いたかっただけぎゃ！」
「そうでありんす！　さぁ、出すでありんす！　赤いもの　赤い食べ物」
……なんで赤いの？　いいけどさ、薪を集めてきてよ」
「ぐが」
「それじゃ、石の間に土を詰めて……」
そして、阿丸はピザを焼きはじめ、数分後、大きく丸くこんがりとしたピザが完成する。
「ぎゃ！　ぎゃ！」
「おっ、おっ！」
「ぐが！」
大きく焼けたピザを見てはしゃぎだし、カンナに至っては丸いピザを見てあっさりと跳ねた。そして、飢えた子供のようにピザに群がり、材料がなくなるまで、つまり石板を綺麗に平らげた。
「じゃ、さすがに僕は寮で寝るから」
阿丸は自分の胃に何を入れたかピザをつまんだ後、大きくねぎらいの言葉をかけてその場を立ち去る。
「え、一緒に寝るぎゃ！」
「そうでありんす！　むしろ抱いて！」
ふざけて騒いだカンナと寝具を共にしていたが、阿丸は寮に帰ると、すぐに眠たくなってしまい、跳ねて走っていった
カンナの腹を寝具にしアルヌルが収まる形で横になった。

「あ……そういえば……、今、思ったんでありんすが」
鯉太郎は天井を見上げながら口を開く。
「なんだぎゃ？」
「太夫殿が罰ぬるくしたのも……[illegible]大差で金ありんしょうかねぇ……」
それを聞いて、カンナはしばらく黙った後、感嘆の声をあげる。
「あ……そうかもしれんぎゃ……。でも……いい奴は、いくら相手がアレでも、骨を砕いて殺したりはしないぎゃ……」
「それもそうでありんすね……。まぁ、気にせずに寝んしょ……」
「ぐが」



「あ、でも、確かにもなみのことは気になるぎや……」
「解除されたままでありんすねぇ……。とはいえ、考えても無駄でありんす……」
そして、再び眠った。
が、朝になって、日登り、天冬を起こしに来た者がいた。
「起きるですよ」
その人物、もはや天冬院は恒例となりつつあるメイド服姿の希だった。
「ん……」
「な、なんで、あんさんが起こしに来たでありんす？」
カンナたちが不思議そうに見上げると、希は自分の背後から一枚の紙を前に突き出した。
「メールが未来の主人様から送られたんですよ。そしたら、どうせなら、朝食を作ってやれ、ついでに起こしてこい、と言われたんです」
希は、手帳を目の前に広げていた。そこには、へたくそな字でこうあった。
《ごめんなさい。ごしゅじんさまにれんらくきました。おまえらありがとう。まおうのなかまじゃない。もっかいごめん。ありがとう。もなみ》
「天冬、手を回してくれたんだぎや……」
「……ふぅ、安心したでありんす」
「ぐが」

兵太は、どこかくすぐったいような、ほっとしたような笑みを浮かべた。

「何をにやにやしてるですか？ こんなアホの手紙、メール出せないから、お絵かき版に文字書いて、そ

れを母ちゃんに送ってもらってるくらいのアホですよ？ 芋掘りくらいしか能のない」

少し苛立ったような顔をした。

兵太は目を丸くする。

「え？ 母ちゃん？……あ！ そういえば、あのおんぼろの旅館の名前、確かにありんした！」

「そりゃあ、旅館はウチの実家ですよ？ おんぼろで悪かったですね。でもまぁ、それももうすぐ

です。ウチの研究の錬金術であの旅館をビルにするですよ。そのための下準備もずっと整えておいたで

す。魔界の名だたる悪魔を地下室に仕掛けておいて、それをさらに魔界から召喚して盛ってやったですよ。そうな

れば、魔界を地下室にぶつかって、悪魔の勝手によって守れたって土地ってことで、価値が上がって、周囲一帯の土地を買い占めるだけで

お金がっぽがっぽ……ん？」

ただならぬ気配に気づいて、少女は兵太の顔を見返した。

兵太の顔は、先祖代々続いた親の敵を見つけたような、鬼気迫るものだった。

「……てめぇが元凶か」

「……これは即座に『おばあちゃんのぽたぽた焼き』でありんす」

「ぐが」

「……え？ ちょっと、なんですか？ なんで怒ってるんですか？」

王女はじりじりと迫ってくる兵に怯（おび）えて後ずさった。

その後、何があったかは、王女はもちろん、兵士も決して語ろうとはしない。

4　幽霊（ゆうれい）旅館へいらっしゃい

「完璧（かんぺき）……！　完璧な計画ですよ！　パーフェクト！　ばっちり！　素晴（すば）らしい！　天下を取れる！」

望（のぞみ）は理想の計画書にほくそ笑んだ。帳面に書いているのは『最強皇帝（こうてい）計画』。つまり、ウチが大皇帝になるための最終手段ということらしい。

「これはまさに最終手段。幸福を我（わ）が家（や）に呼び寄せる！　そして、我が家の幸福を活（い）かして幸福の連鎖を生み出せ、そしてウチに帝位（ていい）を譲（ゆず）らせる……！」

望は一人で盛り上がって叫んだ。興奮のあまりおでこが光る。

「我が家の特徴は何です？」

「その特徴は、幽霊ですよ！『笹原（ささはら）旅館はまさに幽霊旅館……！』って、うわっ！」

望は背後から声をかけられていたことに気づいて飛び退（の）く。

一人で盛り上がっていたわけではなかった。背後にはころねが立っていたのだ。

「な、なんで、ここにいるですか？」

「なんで、と問われても困ります。幽霊旅館の宿泊券（しゅくはくけん）の応募用紙を出したでしょう？」

ころねは、紙を望の目の前にぶらさげた。

「そ、それは、ウチが出した紙……計画の第一歩がどうして幸福屋に届かずにここに！」

「あなた、頭が悪いのですね。皇帝の侍女でもあります。手紙すべて検閲します」
「そ、そんな仕組みがあったですか……！　それで、なぜここに来たんですか？」
「いえ、旅館の下調べはさせていただきました。そこで、行うというのです」
「ああっ！　早くも挫折したですよ！　気合が入ってたのに……って、え？　行うって、どこへ？」
途中でころねが何を言っているのかに気づいたが、ころねの顔が青ざめた。
「このチケットの通り、『[illegible]』に泊」
「え？　そうなんですか？　そりゃまたどうして？」
「どうしてって、泊まらなくていいのですか？」
「いや、そりゃあ泊まってくれた方がいいに決まってますよ？」
「それなら決まりです。ああ、そうです、チケットには割引と書かれていますが、無料でお願いします」
「む……無料……！」
「泊まらなくていいんですか？」
「そ、それなら、宿代だけ無料ということで……」
おずおずと望が切り出した。
ころねはうなずく。
「いいでしょう。他にもついていきそうな人はいますが……。そのときは通常料金でお願いいたします」

「そ、その……」
仲里は帰ろうとしたころねを呼び止めた。
「どうしました？」
「いえ……その……、どうしてウチの料理部を知りながら、それに乗っかるですか？」
そう聞かれたころねは、即座にこう答えた。
「面白そうですから」
「え？」
仲里がぎょっ、とすると、すぐにころねは言葉を被せる。
「冗談です。いえ、半分冗談ではありませんが」
「は……半分、ですか？　では、もう半分は？」
仲里はそう聞いたが、ころねはそれには答えなかった。
「秘密です」
「……秘密」
仲里は戸惑ったが、ころねは黙って料理部を出て行った。
「むうん。気になるですよ。いや、しかし、ここはチャンス。さらに素晴らしい料理を練習しなくてはいけないですよ！」
俄然燃えてきたのか、仲里はさらに素晴らしい料理で立ちはじめた。

。

「行うよ、絶対楽しいよ！」

けなは嬉しそうにチケットを見せびらかしていた。

「そうなんだ、よかったね」

阿久津はスクリーンで議事を見ながら、そちらを見ずに応えた。

今度のことだが、けなは向かいの席でもりもりと米粉のお菓子を食べているところである。その姿は本当に自然だった。

だったのだが、けなは口をとがらせた。

「違うよ。あちゃんも一緒に行くんだよ？」

「え？」

阿久津が振り返ると、けなは二枚のチケットを扇状に広げた。

「……二枚、つまり、僕、ころね？」

「そうだよ！　行うよ、楽しいよ。タダなんだよ。旅館のごはんは味が違うよ！」

けなははしゃぐが、阿久津は真顔になった。

「だけど、君とそんなところに泊まったら、世間じゃちょっとした騒動になるんじゃないのかい？　それに、僕だけって……」

阿月花がそう断りかけると、戸棚(とだな)から降りてきたころねが横から入ってきた。

「セキュリティ、鍵開閉、その他雑務は済ませてあります。あとは阿月花さんが暗証番号を手に出なければいいだけです」

「そうだね」ころねちゃんは語る。「経営で疲(つか)れているんだから、こういう癒(いや)しは大事だよね」

「いや、君も体を休めしてないんじゃないかな……。いや、そのことは関係ないか。ちょっと、それって……」

何かあるってことか？　と聞こうとした阿月花、ころねは目で制した。

その表情を察した阿月花、チケットを受け取る。

「じゃあ、行ってみるか。入場時刻があるんだよね？」

「そうです。開館時間まで、それほど遠くないので、歩いて待ちます」

「遠慮じゃないのが救いだけど、まあ、いっか。楽しみだね。じゃあ、留守番頼む」

けなは、ころねにもチケットを渡(わた)すと、窓から外に出て行った。

それを信じた阿月花、ころねを振り返った。

「で、どういうことなんだい？」

「チケットをご覧ください。この『館』という名前です。あの美術館と同名です。つまり、彼女(かのじょ)の実家です」

「あ、僕がこの間行ったところじゃないか」

「はい。ご存知の通り、[illegible]皇帝の血を引くと自称(じしょう)し、いろいろと騒動を起こしています。しかし、[illegible]それ

が本物かもしれないという話になりまして」

「え？ [illegible]？」

「可能性がある、という話です。[illegible]から委譲(いじょう)された皇帝の秘宝があるという疑惑が発見されました。すでに[illegible]調査を行って

おり、その秘宝とされるものの[illegible]も確認されています」

「それは、何の？」

「玉璽(ぎょくじ)です。どのような効力があるかわかりませんが、皇帝の血に反応する仕掛(しか)けが施(ほどこ)されている可能性もあ

ります」

「……。皇帝の玉璽。証(あかし)[illegible]そんなところに眠っていたなんて」

「はい。玉璽を失っていたため、[illegible]使える者が皇帝であるという認証(にんしょう)[illegible]なっていたわけです。[illegible]

されていたはず」

「それをけ[illegible]な[illegible]なくちゃいけないわけか」

「はい。[illegible]気かれぬよう[illegible]行っています。[illegible]も普通(ふつう)に[illegible]行ってもらうことにしていま

す。[illegible]は、[illegible]この[illegible]知りません」

「でも、[illegible]となったら、ちょっとした騒ぎにならないかい？」

「[illegible]成り代わろうとしている[illegible]ん[illegible]た[illegible]す。[illegible]覚悟(かくご)しているでしょう。まぁ、どのような

かは別として。[illegible]の影響(えいきょう)は、先程(さきほど)も申し上げた通り、[illegible]シャットアウトすることで処理していま

す。噂では流れるでしょうが、嘘だけのことです。すべてが終わってから世間が真相を知ることになるでしょう」

ころねは、気を取り直した。

純也はうなずく。

「そういうことなら、僕も望んのいたずらだけは防ぐよう注意していよう。子供の騒動にならないといいけどな。あそこのご住職は、いい人だったし」

そして、真顔になると、純也はこうつぶやく。

「でも……どうして皇帝なんてシステムをまだ維持しなきゃいけないんだ？ 我々が通った僕が言うのも

うとは思うけど、皆の騒動のもとになるならない方がいいじゃないか」

「騒動は愉快だと思うのが人間的と理解していますよ、純也さん」

ころねはそう言った。

「そりゃあ、君たちはおろか、神もそういう考えだろうね。戦争も虐殺も、悪者でなければ必要悪と思うこともできる」

純也は肩をすくめた。

ころねは静かに答える。

「あなたも我々に近い側の人間です。そして、私の質問に答えるなら、皇帝を維持した方が良いのは、人間だからです」

「そうだってことは理解しているよ。しかし、どうしたって僕はそういうものが気に入らないら

いや。戦争を起こしたくないが、やはりぶっ壊（こわ）したい衝動はあるよ」

「危険な発言ですね。しかし、この国家は物語より、毎年問題が勃発（ぼっぱつ）していますが」

ころねはそう言って窓の外を指した。

「何？」

死神がそちらを見ると、そこでは男がチケットを売っていた。

「さぁさぁさぁ、売るよ、売るよ。チケット売るよ。楽園に宿泊（しゅくはく）するの白チケットだよ。何が起こ

か分からないよ。格安だよー」

だみ声を作って、購入したチケットを振り回（まわ）している。サングラスにマスク姿、首からは段ボールで作

た看板を提（さ）げている。

「……うわぁ」

死神は何も言えずに悲しげな声だけをあげる。

「確かに、自由な営業許可を出しましたが、大丈夫（だいじょうぶ）ですよ。チケットを買う人などいるはずがありま……いま

たね」

ころねはそう言った。

その横では、不二子（ふじこ）がそれに食いついていた。

「ホントですの？　死神様、けなどお泊りだなんて！」

「はい。ホントです。ホントですよ」
「ええい！ 許せませんわ！ わたくしも泊まります！ おいくら？」
「なら一万円」と桜子。
「高いですわ！」
「買わなくてもいいんだよ」
望がだみ左を通しているために間抜けな話しかなっていないが、ともかく、一人分の値段について値して一番高いチケットを買っていた。
「あ……どこで聞きつけたのか、木多淑恵さんも買っていますね。そして、大冬多さんが服部さんも
んでいます。服部さんは、嫌だ嫌だと言いながらも、大冬多さんに押し切られた振りをして購入しました」
ころねが淡々と実況する。
「言わなくていいから……」
阿丸はすでにこの恋外見のはやめて、頭を抱えていた。

○

「ようこそのお越しで」

頭を下げた女将さんと旦那さんは、阿見を見て緊張を顔に浮かべた。後輩の事情を知っている阿見は、なるべく柔らかい
を作り、親族であったことは、その後の電話でわかっているはずだが、さすがにあの異形を見ては、阿見は
ないはずがない。
それでも阿見が思いの外、穏やかな態度でいるのを見て、やや安心したのか、面白いい子に頭を立て、丁寧に挨拶を
したのが自慢の為だったのか、女将さんは客として阿見を迎える態度を崩さずにいた。
結局、泊まることになったのは、阿見だけとなったころね。絢子と子供の頃の思い出のひとつに阿見の部屋をしたいという要望だ。そ
して、この旅館の最上の部屋に案内された彼の全てを、ほくそ笑みつつこの女将が出迎えた。
——三年前の旦那様が、ウチに宿泊なさる時に授ける様にして建ててもらうですよ。
そう内心で思いつつ、見た目は殊勝に頭を下げる。
「いらっしゃいませですよ」
「うわ、すごいね。こういう雰囲気好き」
千代子はロビーを見回しながら嬉しそうに声をあげた。
「こういう高級旅館、いいや、まぁ……高級旅館でありますわね」
千代子は微妙な顔でそう言った。
ロビーのカーペットの毛はすり減ってつるつるだ。ソファの革もすり切れていて薄く、ガラスのテーブルはどことなく曇っている。太い大黒柱は細い傷が無数についているばかりか、表面が欠けずれて細部がくびれができていた。

「来訪者がされているところがまたなんというか……」

来訪者はいつもの癖で忌憚のない感想を口にした。確かに館内は傷んではいるが、埃がかぶっているようなことはない。綿貫が掃除をしていても隠せないほどにすべてが古くなっているのだ。

「いや、それは言っちゃだめ……」

綿貫は来訪者をたしなめたが、事実は事実なので、どうにもそれ以上の館の内部を擁護できずにいた。普通なら案内をする立場の者が言うところである。が、館主その者が苦言を洩らしているのだから、この館の状態も動かなかった。

「古いですけれど、その分、様々な歴史があるんですよ？　たとえば、あの天井からぶら下がっている籐の椅子ですが」

綿貫はロビーの奥の角、天井付近に縛り付けられている籐の椅子を指した。当然のごとく誰も座れないので、インテリアとして飾られているように見えるが……。

「あれは、座った人がことごとく首を吊って死んでしまった椅子。座ろうとした人もなぜか死んでしまったので、誰も座れないようにああして保存してあるんですよ？」

困ったことに、綿貫の説明は、はったりでなく事実であった。

「いや、呪いなんて、有り得ないよな？」

綿貫は恐怖心を誤魔化すように言い、来訪者の服の袖をつかんだ。

しかし、怯えていたのは絢ぐらいのもので、天子は絢の手をその袖から払うと「平気ですわよ」とたしなめた。

「呪いは黒魔術のものだってよく誤解されますけれど、マナを介している以上、対抗する手段は存在する。普通の魔術ですわ。体内のマナに干渉して殺せるような術がかけられているなら、相手の反応があるはずです」

「偶然が重なるってあるんだよね。でも、その『偶然』ってやつがないと人生面白くない。いや、不思議な予感こと

はあるって思ってもいいんじゃないかなぁ」

法子は、どちらともとれることを言ったが、少なくとも怖がっていないのだけは確かだ。

そして、肝心のけなは……。

「あーちゃん、すごいよね、怖いよね」

口では怖いと言っていたが、満面の笑みを浮かべていた。

「まあ、なんというか、信じた方が面白いって類のことではあるね」

阿九は興味なさげにうなずいた。

——くっ……しかし、勝負はこれからですよ！

望月さんは、唇をかみしめたが、遠里さんはにこやかに笑う。

「来てくれるお客さんには評判はあるんですよ？　ただ、吃驚しているだけでも評判が悪くなることはあるみたいですが。さ、最後はこちらですよ」

望月さんと一行は奥へ入った。廊下を進む際、空いている部屋の扉から、こう解説がはじめる。

「ここは、先ほどの部屋の隣の部屋、一人が首をつった部屋です。皆さんの部屋の隣、隣だから天井、ですが、夜になると部屋の天井の梁(はり)が、ギい――ぎい――と音を立てることがあるんですよ。それは、隣の部屋の梁に吊(つ)るした、ロープがきしんでいる音なんです」

ぬるりとおでこを光らせて、不気味なことを言う亜望である。

「ちょ、そんな……勘弁(かんべん)してくれ」

綿貫、またも声を震わせた。

しかし、他の者は反応を見せたり、似たり寄ったりだ。

「素敵ね。それなら、死霊(しりょう)術の応用になる部屋と聞いてますわ」

「夜は寒くなると、木が伸縮(しんしゅく)するんだよね」

「怖いよね、あーちゃん」

「そうだね。なんにせよ、結構な話ってことだな」

――げ、伝えられる話は信じにくいとはいえ……魔術(まじゅつ)は結構手強(てごわ)いですよ？

亜望、焦(あせ)りはじめる。

「そして、こちらが、住人のいない部屋ですが、端(はし)に置かれた鏡には注意してください。そこから白い服を着た女が出てくることがあります。大きな鏡の中に引き込んでしまうことがあると聞きますよ？」

部屋を見るや、自信ありそうに告げる亜望である。

「ひ、引き込まれたら死ぬのか？」

絢乃が声を震わせた。

「死にます」

望世が断言した。

「ひぃいいい！」

絢乃が震え上がった声をあげたが、その肩に死神が手を置く。

「そんな死に方をしたなら、絢乃が記録に残ってるだろ。霊能者さんも楽しませようとしてって言ってくれてるのはわかりますけど、あんまり度が過ぎると少し興ざめになりますよ」

「いえいえ、単なる事実ですので、警告しようと思ったんですよ？」

「はいはい」

純也が流す。

が、それを見ていた千秋が腕にしがみついた。

「きゃー！　そんな恐ろしい！　どうしましょう。鏡から出てきた悪霊に取り殺されてしまうなんて！　もしそうなったら、純也さん、守ってくださいます？」

千秋が上目遣いで純也を見上げるが、純也は困ったように眉を寄せた。

「すいません。さすがに僕も白々しいとわかりますので……」

「ちぃ！」

千秋が舌打ちした。

その後、女性陣を探索隊として、奥の部屋を探索しようと、望が先に立った。それに、戌神ころねがついていく。

「部屋の中を見ていなくていいの？」

「とりあえず、何かの時のために、そちらの部屋も確認しておこうと思いまして」

ころねが言った。

望は相変わらずの調子で部屋の由来を語っていたが、それを聞き流していた戌神ころねの次の言葉は、核心を突いた。

「この部屋からさらに奥、そこが開かずの部屋となっています、入れば、すぐに凄まじい現象が起きる。それは封

されています」

戌神ころねと顔を見合わせる。

「そこに何かが隠されているとか、そういうことは？」

「ふふふ、聞いてくれましたね？ 悪霊を封印した伝説の壺があるとされています。この壺、実は……」

望はさらに話を続けたが、戌神ころねに耳打ちをする。

ころねはうなずいて、戌神にささやく。

「おれはそこではなく、地下の倉庫に行く道がありました。ですが、彼らの言葉も信用されるべきか、本物があるかどうか

の最後まで確証を得られていません。そちらも調べてみる必要がありそうです」

「そうしよう」
阿丸はそう言った。
「あれ？　ささやきあっちゃって、どうしました？　恐怖ですか？　それじゃあ、気をつけてくださいね」
世望は意を知らず、にやにやとしながらそう言った。
そして、世望は望。死刑囚屋内に捕物を入れている隙にころねにささやきかける。
「どうですか。この先輩を怖がらせて、自分の精神を追い込んでいくんですよ？」
「そうですね。それより、今までの話はあなたが認識している限りで、本当と言っていいのですか？」
ころねが聞き返す。
「え？　本当ですよ」
「それならばわかりました。では、頑張ってくださいませ」
ころねはそう言った。
そして、疑わしそうな顔で振り返って、望よそに死刑囚屋内に入ってこう告げた。
「信じたくはないですが、もしかしたら大変なことになるかもしれません。ご注意を」
「……驚かしてるんじゃないみたいだけど。でも、って言うのは、ありえないだろうに」
「そうとも言えないかもしれません」

困った顔で、ころねは言った。いつも困った顔といえばそうなのだが。

「やっぱり[illegible]しているみたいだね」

「いえ……。あ、[illegible]皆さんと一緒だそうです。それまではお風呂をどうぞとのことです。他

に行きましょう。とりあえず旅館の中を見ていき、[illegible]までに[illegible]それを[illegible]見てもらいましょう」

「わかった。じゃあ、夕方から夜まではゆっくりさせてもらうことにするよ」

○

旅館に着いて、朔夜は一人、浴場に向かった。仲居は着替えなど、忙しかったようだが、朔夜の気になる風呂ばかりは向こうにや

せる必要もないわけで、しばらくぶりの一人きりの時間とばかりに、穏やかな気持ちで脱衣場の扉を開け

た。

脱衣場は清潔に保たれていたが、やはり古びていた。脱いだ服を入れておくカゴは並んでいる。怪奇現象など信じていない朔夜

も、それなりに陰気な雰囲気を感じるほどではある。

「……まぁ、思ったけど、お客さんは来ないよなぁ」

朔夜はつぶやき、浴場へのドアを開ける。それなりの広さがある露天風呂になっていた。広い庭に囲まれてい

るため、昼間であっても外から視線は通らないのだろう。

「とはいえ、最近はちょっとなかったくらい、落ち着くなぁ」

河内先輩のお湯につかり、ほぅ、とひとつため息をつく。身体を包む温かさに、疲れがするりと抜けていくよ
うに感じられた。

そして、そんな河内先輩のすぐ側の木の上に潜む影があった。もちろん、聖である。

「ふふふ。こうして男湯の側からなら、女湯にいたずらをしても、追跡はすぐに出来ないわけですよ……」

聖は木の枝にまたがり、ポケットから出した瓶を見てほくそ笑んだ。

水に溶かすと、真っ赤になる粉が入っている。これを上から女湯にまけば、お湯の色は血の池に変わるというわけだ。

「しかも、真っ赤になってから数秒後にはまた透明に戻ってしまうという優れ物。これで一度悲鳴をあげて逃げたみんなも、戻ってきたらあれは幻覚だったのか、それとも現実だったのかしら?"と頭を悩ます

ですよ」

聖は河内先輩が入ってきたので目をそらし、少しドキドキしつつも、女湯に誰かが入ってくるのを待った。が、不意に聞

こえてきた声に驚き、思わず河内先輩の方を見る。

「せ、先輩! どうしてここに!」

河内先輩が驚きに声をあげているのは無理もなかった。河内先輩の背中に全裸の一子が抱き留めていたのだ。

「あら、どうしてって、河内先輩が恋しくてやってきたに決まってますわ」

妖艶としか表現できない声で一子が言う。

「いや、だけど、ここ男湯ですよ?」

「どうせ、他にお客さんもいないんですもの。普通に正面から入ってきてしまいましたわ」
「そう言われても……ですね……」
「あら、おいや？　皆が来る前に急いで出てきましたから、あまり時間ありませんわ。ね、早く済ませてしまいましょう」
「ちょ、ちょっと済ませるって……」
さすがにその光景を上から眺めている健二は息をのむ。当然ながらそんな経験のない健二、あまりのことに心臓が破裂しそうなほどの動悸を覚え、駄目だと思いつつも視線は胸元に釘付けになってしまう。
「済ませるって、もちろんあれですわ」
「いや、だから、そういうことはよくないと……」
「あら？　家族の義務ということをおっしゃってるなら、もう兄妹関係は関係ありませんし、人としての倫理も関係ありませんわ。わたくし、元気な子を産みましてよ」
綾子が背中から健二の胸をなでて回し、自分の胸も押し当てている。
「ま、いや、だから……そうじゃ……ちょ！」
「ああ、普段はお強いのにこういう時は可愛い健二様、素敵……」
健二の下半身の方で手がうごめきはじめた。
健二、もう完全にのぼせ上がってしまい、目をぎらぎらさせながら荒い息を吐き出している。

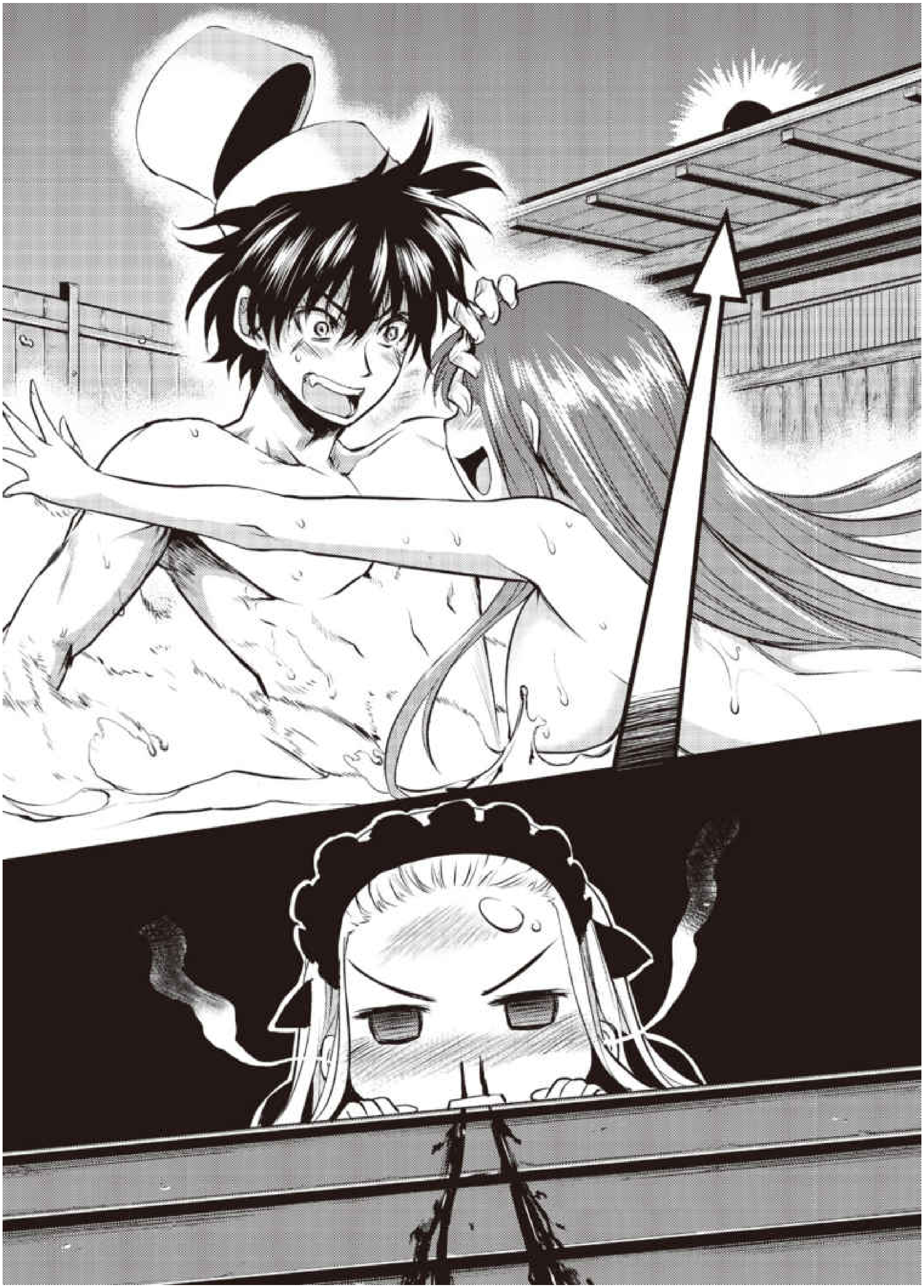
——ひ、ひい……。　すごいですよ……。　でも今もすごいのに、これ以上すごくなったらどうなってしまうのか……って、なんか顔がぬるっと……。　あ……鼻血。

しまった、と思った時にはもう遅い。鼻血がぽたりと[illegible]ちの上に落ちていく。

「ちょ、まって……鼻血……。何か落ちて……」

「ふふ……。　なにをそんな誤魔化そうとしてらっしゃるの？　それとも、ここをこんなにしていることがお恥ずかしくって……。　あら？　血？」

——やばっ……！



望は逃げようとする。が、その必要はなかった。

「こぉおらぁあああああ！」

叫び声が聞こえ、同時に、しゃきん、という音が響く。

望は思わずそちらに目をやると、一度は男湯と女湯の間の仕切りが内側より丸く切り裂かれたところだった。

そして、綺羅が女湯の側からそれを蹴破って男湯に姿を現す。

「なにをしてるか、このぉおお！」

綺羅の叫びだが、それに対する反応は奇妙なほど静かだった。

「ちょっと待て……これ、血だ……」

「な、なんで、お湯が真っ赤に……」

女湯の内部で、女子たちが声をあげていた。

「そんなことで綺羅に発見されると……って、ひ……い、いやぁあああ！」

目を向けて振り返った綺羅の声が、悲鳴に変わる。

――え？　そんな、自分の鼻血ぐらいで……。

望は、綺羅から女の子たちのいた女湯の方へと目を移す。

女湯の方も、赤く染まりはじめていた。

――あ、まさか、瓶を落としちゃったとか……。

望は手の中の瓶を確認した。しかし、それは蓋がされたままだった。割れて中身が漏れ出てもいない。

「じゃ、じゃあ、あれは何？」
哲望が小さくつぶやいた。
河内は首にタオルを巻いて、湯船から出ている。露天風呂はそれほどの大きさはないが、それでも男湯の露天風呂に比べれば
お湯を入る。その世界のどこかに、不穏(ふおん)な赤い煙(げむり)が舞(ま)っているかのような景色が広がっていた。
「あ……あれは何……。ほ、本当の呪い……」
哲望は恐怖(きょうふ)に声を震わせた。

○

「男の人の面です」
仮の鑑定(かんてい)を済ませたころねは、言った。
あの後、女将(おかみ)さんを呼んで話させてもらい、どこかに異常がないか調べさせてもらったのだが、わかったことは二点あった。それが男の人の面であること。そして、湯船から出てきたのではなく、湯船の外から血がぶちまけられたことだ。
「土地に来ている誰かの嫌(いや)がらせかな？」
河内は言ったが、ころねは「難しいですね」と首を振(ふ)った。河内は、切支丹(きしたん)の一団が周囲で秘密(ひみつ)の儀式を準備していることを思い出
た

「まいったな……。ね　念のために聞くけど　君のいたずらじゃないんだよね？」
「疑われて当然だとは思いますが　さすがに今回は何もしていません。もっとも　望さんの勤務態度を見習ってはいますが」
「じゃあ　[illegible]あるわけだ……」
[illegible]難しい顔でうなったが　望は姿を消してしまっている。
、結局[illegible]内風呂を堪能した後　浴衣に着替えて食事となった。女将さんが給仕してくれた心づくしを並んで食べるのは本来楽しい[illegible]はずだが　その[illegible]話になる。
「なぁ……　ホントに何もないのか？」
[illegible]心配そうな声をあげる。
「それは　あなた　信じすぎというものですわよ。望さんが[illegible]思ったって可能性はありますわ」
[illegible]茶化すが　[illegible]もそれほどの元気はない。
「そっちのが怖いよ。でもまぁ　[illegible]んだから　結局のところ誰がいたわけだよねぇ？　マナ感知でわかるんじゃないの？」
[illegible]こころねを見る。
「マナキャンセラーが働いているとは思いませんが　感知できませんでした。原因は不明です」
こころねの言葉に　全員黙り込む。
「すいません　あそこは[illegible]割れた事件があった場所……」

杏奈さんが何か思ったか、納得するような口調で言った。

一同はさらにどんよりした顔になった。

「いや、まぁ……ともかく、これは個人的な事件と考えよう。僕とところねは白望さんを探す。他の人は学園に戻っている。というのでいいよね？」

状況把握、全員がうなずいた。

食事が終わり、杏奈さんはその場を申し訳なさそうに辞し、ころねがお茶をいれはじめた。陽気、不安な皆を安心させるように茶葉を選ぶ。

「いや……ほら、いたずらだからさ、きっと」

「本当にいたずらならいいんだが……」

絢斗はそれでも暗い声を出す。

「いたずらに決まっているでしょうに。何を嘆いて先程からみなさん暗い顔をしているんですわ。のようなものを信じているのは、あなただけです。そもそも、なんでほとんどの謎が解れているこの時代に幽霊なんて……」

年下に言われ、絢斗は唇を尖らせる。

「この家は代々この土地の伝統祭祀を行っているんです。それには、不思議な力を信じることも含まれる」

「しかし、本来はシステムにすぎない。神をそのような力と見做して信奉することで、齟齬が生まれている。

そして、それを嫌ったのが、真犯人でしょう？　つまり先にスハラ神は滅ぼされましたわ」

「しかし……！」

綺羅と不二が言い争いになろうとするので、陣内が何とか割って入ろうとした。

「いや、その話はやめましょう……」

「いやいや。私は少し見解が違うなぁ」

しかし、それを制したのは浦辺だった。

「何すの？」

「この世界の謎はほぼ解明されているけれど、魂の問題は決着がついていないんだよ。私がやってみせたように、私たちの身体は別の魂が存在することは、もはや確定的。そして、それがどうして生まれるのかは、まだわかっていない。ゼロには実は魂があったことを、皆が発見しているでしょ？」

浦辺は独自の見解を述べはじめた。

「周辺の長い間と人が関わっていると、自我が生まれるとされているよねぇ。我々は魂の問題を扱ってきたから、魂は伝播する性質がある

と考える。我々は様々な経験を積み、人生を生きているのだよ」

「確かに、それは認めないといけないような気がしますわね」

不二も首肯してこれには納得しないわけにはいかなかった。

「そうすると、魂の成り立ちを見ることが出来る。もしかしたら、我々は魂の生まれる瞬間を見ることはできるかもしれないんだ

よね」

しかし、そう浦辺が結論づけると、不二は反駁した。

「でも、それは今回の話には関係ありませんわ。だって、人間の肉体は物理的なものでしょう？」
「それはそうなんだよねぇ。マナで再生できるとはいえ、元になる人体のDNAと同じ素材が必要なわけだ。そこに誰かいたと考えるのは、妥当だよ。だけど、私は、細胞の自意識が間違っていないと言いたいのさ。それに、彼女が生きているの、少し変じゃない？　ねぇ？」
悪戯っぽく阿丸がウィンクした。
「あ……まぁ……いや、そうかな」
阿丸はもごもごとそう言った。
「あ……」
紬が顔を赤らめる。
不平を口にして座り直した。
「変なことありませんわよ！」

○

「それじゃ、行ってこようか」
阿丸とこころねは連れだって出て行った。
残された紬たちは、気づいた気配はない。確信は紬だけだが

「だ、大丈夫なんだろうな……」

綺羽は虎心にしがみついている。それに気づいていないのか、虎心が綺羽の頭をなでて、初めてびっくりとした。

「おっ、やっぱり可愛いなぁ。綺羽、よしよしよし」

「ちょ、や、やめてくれ……」

「だって、しがみついたのはそっちじゃないかぁ」

虎心は綺羽のあごを猫にするように指でくすぐっているが、綺羽は虎心から離れることができず、ただくすぐったいと文句を言うだけだ。

「やめろ、こら、やめろ！」

「にょにょにょ、くすぐっちゃうぞぉ」

綺羽も必死になっているが、虎心は楽しくじゃれているつもりだ。

それを見て、けいなも参戦した。

「あたしもやる！」

けいなも綺羽にしがみついて「よしよしよしよし」とやりはじめた。

「だから、やめろって言ってる……こら、くすぐったいから！」

綺羽もだえ、三人もつれあって倒れる。全員が浴衣なので、裾がはだけてあられもない姿になっていく。それを見て、千子は苦笑でたしなめた。

「ほら、おやめなさいな。部長さんもそろそろ落ち着いたみたいですし」

「え？」

絢乃の不平そうな顔が見えた。

「もう、そう言われると、わざとやったみたいでかっこわるいじゃん」

加恵が苦笑に。

「楽しいからだと思ってた」

けなはまだ絢乃の身体に絡ませていた。

と、その時だった。

ぎい。——ぎい。——

低く、重苦しい音が響いてきた。

「え……？」

全員が動きを止めて、天井を見守った。

鳴っているのは、天井の奥深く。

ぎい。——ぎい。——

隣の部屋で何か重い物が吊られているような音。

「と、隣の部屋で首吊り……」

絢乃が再び加恵にしがみつく。

さすがに油断した態度でじゃれてあげる余裕はない。

「はた迷惑な代物よね？　それなら……」

「イタズラを疑った方が早いですわ！」

平子はそう言って白衣の裾を翻して廊下へ飛び出す。

少しだけ廊下を先に走り、壁に背中をつけて警戒しつつ隣の廊下をのぞき込む。

と、平子は一瞬行動を止めた。

そこには、髪の長い女の後ろ姿があった。その首は白いロープのようなものがからみついており、足は浮いていた。そして、体全体が振り子のように左右にぎぃーぎぃーと揺れている。

「悪ふざけを！」

平子は怯むこともなく、白衣のポケットから小さなマナ球を首吊りの女に撃ち込んだ。

周囲に被害を与えないように加減した一撃である。本体を確かめる時間が惜しい。

閃光、小爆発が起こり、一瞬で相手は光に満たされる。

「手応えが……」

しかし、平子は軽い感触に違和感を……

「……なんかいたよね？」

その頃になってやってきたけいなが、平子の後ろから廊下をのぞき込んで言った。

「私も見た。まるで首吊りしてるやつに見えたかな」

涙目で横に並んでいた。紗希も、その胸を抱きしめながら。
「や、やめてくれ……ホントにいたのか？」
「それが……消えましたわ」
千早が首を振った。
爆発が消えた瞬間、静かなもので、何事もなかったかのように時計の音だけが響いている。
「ひぃ、いい……じゃあ、あの人物……」
紗希が怯えた声をあげた。
「問題ないものを、人物がお言いでないですわよ。ほら、いくらでも出入りは可能なんですから」
千早が天井の入口を指差した。天井裏はゆるんでいて、どこでも外れそうだ。天井裏に入ることは不可能ではないだろう。
「天井裏から戻ってくるまでは、部屋でおとなしくしているのがよさそうですわね」
千早がそう言った。
部屋に戻った一同は、真面目な顔で座り込み無言になった。
「な、何をしゃべってくれ……」
紗希が震える声をあげた。
「確かに、暗すぎだよねぇ……。とは言っても明るい雰囲気にはなれないけどさ」
紗希も腕を組んだ。

「もし何者かによる攻撃なら、この部屋は襲われない限りは動かない方がいいですわ。逃げ道を用意しておく必要もありますけれど、この安普請なら恐らくでも壁を破ってでも逃げられますから。落ち着いてお茶でも飲んでいればよろしいのよ」

伊予子は落ち着いて言った。

「じゃあ、ホントの幽霊だった方が怖いよね」

けなが無邪気に言った。綺子は首をぶんぶんと横に振った。

「それはない！ それはない！」

「いや、わたくしも幽霊にあってほしいに一票ですわ。これがけなを狙ってのものだとしたらわたくしたちには少々荷が重いですもの。というより、責任を持ちたくないですわ」

「身も蓋もない言い方しちゃうとそうなるよねぇ。とはいえ、物理的なものであろうと、心霊的なものであろうと、私たちは妙な目にあっているわけだよ。マナが妙な動きをする。場所の多くは噂になっていたけれど、こういうのはミステリーゾーンと呼ばれたりしていたね。非日常的な異界。狂気をもたらす現象が起る場所ということだよ」

「そんな話は別によろしいですわ。危機があった場合どうすべきかを話し合わないと」

「けなを守って逃げるしかないだろうねぇ。何かあったらこのミステリーゾーンを出て行く。それを[illegible]ようよ」

二人は真剣に危機感を持ちはじめていた。

「で、でも、呪い殺されたりしないだろうな？」

納得できず、ずっと怨恨にしがみついたままだ。
「ま、そうなったら、誰も成仏できないからねぇ。気にしてもしょうがない」
「だから、幽霊なら楽しいって言ってるのにな。ねっ、幽霊って姿を消したり、変な音を出したり、誰かを脅かしたりするんだよね？」
「それ、大体あなたにもできましてよ」
千乃があきれて言うと、けなは口をとがらせた。
「えーっ、そんな、大人の幽霊みたいに……って、あ……」
けなは文句を言おうと身を乗り出し、その拍子に空になった茶碗をテーブルから落としてしまう。
「……いっけない。落としちゃった」
けなは手を伸ばす。
するとテーブルの下から出てきた白い手が茶碗を拾って、けなに渡してくれる。
「あ、ありがと」
けなは茶碗をテーブルに戻し「それでね……」と話を続けようとする。
全員が動きを止めた。
誰からともなく、自分の手をしげしげと眺める。
そして、もう一度全員が動きを止め、その一瞬後、絹を裂くような悲鳴が四つの口から先を争うように部屋の外へ飛び出した。
「きぃゃやぁああああああああ！」

「うまく感知できませんが、心音、振動からすると、複数の被害者が館内にいますね」
ころねは言った。
[illegible]ところねは館内をめぐっている最中である。犯人はまだ見つかっていない。
「それはあり得ないんだろう？」
「そもそも館の中には、空さんを除けば、奈々さんと那月さん。そして[illegible]の遺体一体それだけです。ご夫婦は一緒にお
り、[illegible]していました」
「外から誰かが来れば、結界を越えて入るはずなんだよね？」
「はい。ただ、電話は連絡をとれない状態ですね。マナが不安定です。それでも、異変があれば騎士には直接伝わってくるはずです」
「それも妙な話なんだよな。何が起こっているんだか……」
[illegible]は手の中の異空間に入った箱を眺めた。地下室から持ってきたのはいいが、今のところは骨董品の一つ入った箱の中身に意味はないように思える。
「ともかく、空さんがいる可能性がある場所は、ここだけになりました。開かずの間です」
ころねは正面を指差した。

阿賀見先輩が扉に手をかけた。鍵などかかっていなかった。

「……、開かずの間ってことはないじゃないか」

「そもそも旧部室の調査は総務委員会で行われましたが、開かずの間についての情報はありませんでしたね」

「じゃあ、ここで望むものが見つからなかったなら、部室に帰ろう」

阿賀見先輩の後から部屋に入った。

そこは倉庫のようになっていて、左右の壁は棚がしつらえてある。棚は何重にも並んでおり、一番奥に大きめの箱がやたらと目立つ他、どうにも興味を引くような物が入っていたものはない。ひとつひとつ調べていけば、なのかもしれないが。

「若菜がどうのと言っていたのは、これか」

阿賀見先輩が奥へ向かう。壁の隅の棚に、背丈くらいはあるもので、上から布を掛けられた額縁が入っている。阿賀見先輩が空いた布のすき間をのぞき込んで、ぎょっとした。

そこに望が描かれていたからだ。

「なんで、そんなところに……」

「ひ、ひぃいい！　来るなぁああ！　助けて！　許して！」

望は錯乱していた。

「おい、ともかく落ち着いて……」

阿久比がそう言ったとき、遠くで爆発音がした。それは平が放ったマナ球によるものだったが、このと

き阿久比はもちろんそれに気づいていない。

「彼女のことは後だ、急いで戻らないと」

そうころねに指示して阿久比が戻ろうとする。

しかし、その腕に望がしがみついてきた。

「ああ、行った！ 間に合った！ 行かないで！ い、いるんですよ！ 怪物がいるんですよ！ 時

てほしいですよ！ おっかねぇ、おっかねぇですよ！」

「ちょ、ちょっと放してくれよ。今の爆発を聞いただろう？」

「だ、だからですよ！ 化け物がいるですよ！ 物の怪のお化けですよ！」

望が泣き叫んでいた。

阿久比はころねに指示する。

が、ころねは耳に手を添え、こう答えた。

「江藤さんたちの声が聞こえます。全員無事ですね。大丈夫なようですが」

「ん……？ 遊びでさすがに爆発は起こさないだろうから……」

「推察するに、何かを見たようです」

「つまり、[illegible]化け物ってこと……？」

阿久比は望を見た。

望は泣きながら阿九にしがみつく。

「だから妖怪がいるんですよ！　ウチは毛むくじゃらの化け物をみたんですよ！　ああ　ごめんなさい！　今まで嘘を言ってました！　でも　今までのことは本当にホントなんですよ！　信じられないけれど　お化けがいるんですよ！」

望の生まれ育った村はわけのわからないものになっているが　望が今日目にした異形のものを見たのは本当だとしか思えなかったので　阿九は戸惑う。

「まいったな　何かが起っているってことは間違いなくなってきた　とにかく　後で戻って来よう　もう持ってきたし　紙と筆記具は準備……」

そう言って阿九は望の体を持ち上げて　来た道を戻ろうとすると　開かずの間で止めた正面の廊下が開いていた。ここはL字形に曲がった廊下の角に位置し　その細い廊下の奥に目をやって　阿九は一瞬で背筋が冷たくした。

紅を付けた　襦袢を着たおかっぱ頭の小さな女の子が二人　廊下の向こうに立っていた。　色違いの襦袢を着た一対のものと見え　揃いの髪型　そっくりな整った顔をしているのに　双子と思った。　それが何も言わず　こちらを見ぼんやりと　立ち尽くしているのである。

「あれは……」

が　阿九は冷静さを取り戻し　構える　と　彼女は滑るように廊下の向こう側に消えていった。

そう言いながらころねを振り返った阿九だったが　彼女は悲鳴とともに走ってくる着物の女たちを目にする。

「うわぁあああ！　助けてくれ　阿九　殺される！」

綱手は阿弥児にすがりついた。
「お、落ち着いて！　殺されやしないから！」
阿弥児は綱手の肩を抱いてなだめる。
「この子、怯えているんです。今は人間も機械も仲良くしないといけないというのに」
千手はそう言いながら阿弥児にさりげなくすがりつく。
「ねえ、あーちゃん、なんか変な感じがするよ？　何か、ざわざわする感じがする！」
けーなも阿弥児の腕にしがみついた。
そのけーなの態度は普段と違うものだったから、阿弥児としても不安が増すが、それに答えるよりも早く、今度は[illegible]が背中にのしかかってきた。
「あ、ごめん……なんか、私も大勢で」
「そ、そういうのやめてね……。と、ともかく、わかったから、みんな落ち着いて。相手が何体来ようと、どうにかならないものなんてないから」
阿弥児は全員に呼びかける。
全員というのは、阿弥児の体にすがっている全員のことだ。綱手が前から抱きついていて、右腕に千手、左腕にはけーな。背中には[illegible]が乗っていて、足は望ところねがそれぞれしがみついていた。
「ころねだけ明らかに冗談でやってるような気がするけど……。ほら、みんな離れて。今って何も来やしないじゃ……」

丸美はそう言って、廊下の向こうを指差した。
と……。そこには何かがいた。
背の高い女である。髪は床につきそうなほどに長く、その髪が前にばさりと垂れ下がっていて、顔を完全に隠してい
た。細い体は素っ気ないワンピースに包まれている。異様なのは、その体の動きだった。蜘蛛か蟹のように力
クカクと異常な関節の動きをしている。さらには、普通の人間の関節がそこにあるとは認識できないような位置で、体の部位をずらす
きすらしていた。肩甲骨や、骨盤を左右にスライドさせて、カタリ、カタリ、と一歩ずつ踏み出して
いる。
そう。それは丸美たちに近づいてきていた。
不気味な挙動に丸美は絶句していると、その女は丸美に気づいた。しかも、髪の隙間からそちらを見つめている。
「うわぁあああ！」
これにはさすがに丸美も悲鳴をあげていた。平然としているのはころねだけだ。特に取り乱したなど
というものではなかった。
「嫌だ！ ここで呪い殺されてしまうんだ！ あれはこの家に伝わる呪いの霊だ。お婆様が言っていた。触れる
だけでも命を奪う呪いの化身があんな格好をしていると！」
「ほ、ほら。大丈夫だ、君は強い子じゃないか。相手を睨みつけて、斬りつけるような。だから、ちょっと離れてい
て……」
丸美は相手の呪いの女を前に、躊躇していたが、さすがにそれを敵と見なして動こうと決意する。が……。

「そんな！　私はそんな風に見えていたのか？」
綺約はショックを受けた様子で言う。
阿見は慌てて否定した。
「いや、そうじゃない。本当は繊細だし、可愛らしいところもいっぱいあるってわかってる。
は、強がる必要があるときだって言っただけだよ」
「ありがとう。阿見からそういう言葉を聞けてうれしい」
「ちょ、ちょっと、阿見って……」
「だって、みんな死んでしまうんだろう？」
「いや、死なないから……」
阿見は否定したが、綺約は完全にぶっ飛んでしまっていた。
「死なせまいとして、そういうことを言ってくれる優しさが私は好きだ。ああ、今なら言える。死
際にだけ気持ちを告白するなど卑怯者とも思えるが、今は素直に言おう。好きだ。大好きだ。私は死ぬまで始
ていてくれ！」
綺約は嬉しそうに阿見にしがみついた。
「ちょ……あの……」
阿見は顔を赤くし、言葉に詰まった。
誰にどう聞いても愛の告白だった。

「せめて、せめて一言だけでも言ってくれ、私のことを愛していると！」
絢斗が叫ぶ。そして、すがりつくように興児を見上げた。
もちろん、それを聞いて黙(だま)っている子はなかった。
「おふざけにならないで！　興児様が愛しているのは、あなただけではありませんわ！　ねぇ、どうしてわたくしの愛に応(こた)えてくださいませんの？　この際はっきり聞いておきますわ、様誰を愛していらっしゃるの？」
詰問(きつもん)するような口調で言い、子供は興児を見上げた。
「何もこんな時に……」
「こんな時もあんな時もありませんわ！　大事なことなんですから！」
「あー、もしそうなら、私も仲間に入れておいてもらえるかい？」
渋沢が言った。
「あーちゃん、なんかあたしもやもやするんだよ。ねぇ、答えてよ！」
けなもどこか不安になって興児にすがりつく。
興児は困惑(こんわく)しつつ、あの化け物の方へ視線をやった。そいつは、その頃には、もうすぐ近くまで来ていた。
「ごががぐげぎがぎごごごごご……」
そんな、喉(のど)がつぶれたような声をあげながら迫(せま)ってくる。
「ああ、もう……！　わかったよ」

そして純也は真剣（しんけん）な顔で口を開く。

「僕だって、優柔不断（ゆうじゅうふだん）でやってたわけじゃない。僕は君たちが知っての通り特別な存在だ。だから、本来は僕は

いられるのはけなだけだ」



その瞬間、一同はショックを受けて固まる。

「だけど、僕は本心を言えば、僕はみんなを愛している。愛するなんて大人という物語の幻想だ。だから、僕は君たちの気持ちに応えたい。僕はまだ本当の愛を、自分の未来を持って決めちゃいない。でも、僕は僕の生き方を決められた時は必ず君たちの愛のために生きる。それが答えだ」

阿久利はきっぱりと言い切った。

「解決どころか……」

「愛を金ものにする言葉はねぇ……」

「あら？　わたくしはそれでもよくってよ」

「あちゃん、なんかあたし、もやもやするんだってば」

皆口々につぶやき、毒気を抜かれたように呆けた顔になる。

「だから、本心を言っただけなんだけどな……」

阿久利はなんとも妙な気分になったことに困惑する。

そして、困惑していたのは、本人たちだけではなかった。

「ぐが……」

あの化け物も照れたように頬を染めていた。髪の毛をあげて顔を出した化け物――アルヌルが両手で頬に当てている。

「そんな愛の告白を目の前で見られても困るでありんす」

ひょいと姿を現したのは、大竹美知恵だった。彼女も顔を赤らめている。

「ああ、[illegible]いたのに、ここまで来て台無しにしちゃった。全部、これだぎゃ」

神山カンナも廊下からやってきた。

[illegible]が揃ったことになる。

「あ、あ…… あれ……」

戸惑って、全員が顔を見合わせているのは、滑稽である。

他の者も、多かれ少なかれ、驚いていた。

「まさか、[illegible]……」

[illegible]が聞くと、[illegible]うなずいた。

「そういうことでありんすが、言い訳させてもらえれば、君たちがいるとは知らなかったでありんす。いや、[illegible]時は君たちがいることが[illegible]なかったでありんすよ」

「え？ それはどういう……」

「あの後、ここの[illegible]なみと仲良くなって、遊びに来たぎゃ。そこで、[illegible]ことをしようとしている

と聞いて、[illegible]してやろうと思ったんだぎゃ」

カンナが言った。

「じゃあ、[illegible]……」

[illegible]が聞くと、[illegible]照れくさそうに頬に手を当てた。

「あれは、隠れていたら、あんさんの力、あられもない姿を見放題……」
「それにしては、量が多すぎじゃありませんこと？」
「いや、あちきは千里眼持ちで、未来予知であれば決定的瞬間を上手く作り出すことができるでありんすよ……。その分、未来を
のを撮らなくてはあかんのですが」
「あのですねぇ……」
一同、呆れる。
「じゃあ、一つ目の首狩りと最後のあれは……」
満足げに閻魔と、アルヌルがうなずいた。
「ぐが」
「それじゃあ、あの時は？」
呆れ顔の閻魔と、内側の四天王から答える声があった。
「いや、こいつらから聞いて、面白くなっちゃってさ、さらに面白いおまけも見れて楽しかったよ。男ってのはこれだから困る」
にやにやしながら、美少女リィ、白石がやってきた。脇には二人の子供――もなみとけいすを連れている。
「これで一生オラにでかい態度できなくなるべ」
「いや、お館様、拙者には、今や同じ秘密を持っている友達ができたでござるよ！」

もなみとけいすが嬉しそうに手を振っている。
「でも、[illegible]いて、ここには近づけなかったはずでは……？」
死神仲間と、リリィが肩をすくめた。
「態度でかいし、ボクの顔を知らなかったから、のしてきたのが大勢いたよ。知り合いなら言っておくれよ」
「知り合いというか、[illegible]なんだからわかると思いますが……」
「細かいことはいいんだよ。さて、[illegible]も入ってきたらどうだ？　背中を流してくれる女が大勢いるみたいだしねぇ」
にやにやとして[illegible]言うリリィである。
と、それまで黙りこくっていた絢が、苦しげな声をあげはじめた。
「かっ……くっ……こっ……」
「ちょ、大丈夫？」
死神仲間が心配してその肩に手をかけた。
と、絢はいきなりその手を払った。
「こっ……こっ……告白……」
絢は肩を震わせ、声を絞り出した。そして、叫んだ。
「告白してしまったじゃないか！　みんなの前で！」

紡狩は顔を真っ赤にしてじたばたしはじめたが、それに対する周囲の反応は冷ややかなものだった。

「あなた、馬鹿(ばか)？　そんなこと、言わなくても全員気づいていましたのに」

「でも、いいんじゃない？　大人に成ったよねぇ」と古白。

「成人したなら、感謝されこそすれ、切れるのはよくないんじゃない？　先輩に対してさ」

リリィまで参言う。

「うわぁああ！　恥ずかしい！　お前らが悪いんだぞ！」

紡狩は真っ赤に殴(なぐ)ろうとしたのか何なのか、左手を振り回(まわ)してふらふらとあらぬ方向に倒れ込んだ。

「あ、危ない」

真っ赤な紡狩を支えようとするが、紡狩は開かずの間にある骨董(こっとう)の棚に倒れ込んでしまう。

がしゃん、と派手な音がしては大きな音が響き、さらに埃が大量に空間に広がる。

「ああ、こういうの、興醒めでしてよ」

「っもう、なんだかなぁ。弁償(べんしょう)は一生はしないぞ」

天子とリリィの呆れた様子にそう言う。

と、ころねが何かに気づいたようにいきなり声をあげた。

「しかし、まだ解決していない問題があります。マナの異常が続いていてです」

「まさか、何が？」

死闘の間と、ころねはうなずいて、扉の向こうを指差した。

全員がそちらを見る。
そこには白い服の女が立っていた。長い髪に細い体はアルヌールのそれと同じだが、真っ白な衣服を身にまとっているところが違う。
しかし何より大きい違いは――。
「おい、誰だありゃ？」
「知りませんぎゃ」
「キミらは？」
リリィは無言で問い、無言で首を横に振った。
「ということは、あれは……？」
「人間ではありません」
ころねが断言した。
「心音、駆動音ともに聞こえません」
そのころねの言葉を聞いて、リリィはふんと鼻を鳴らした。
「まあ、これもマナを使って練り上げた身体なんだろうが……」
リリィがそちらに向かって手を伸ばし、肩をつかもうとしたのだが、その手は空を切る。
「え？」
リリィの手は、その女性の身体を突き抜けていた。さすがにリリィも目を見開く。

「マナじゃないぞ……」

さらに何度も手を伸ばすが、彼女はそんな手などないかのように進んでくる。いや、進んでくるという表現も正しいのかどうかすらわからない。足を動かしていなかったからだ。彼女は直立したまま滑るように移動しているのだ。

「まさか、幽霊……」

絢が裏返った声をあげた。腰が抜けたのか、這いずって陣内の足にすがりつく。

陣内は絢の頭に手を乗せた。

「でも、悪意はないように見えるけれど」

確かに、その女性から感じた気高い雰囲気。近づいてきても身構えられなかった。やや細めの目が、何か言いたげな光を放っている。

ところねが口を開いた。

「彼女の出現で、マナの集まる中枢がわかりました。陣内さんが倒した棚にあった置物ひとつ……それが原因だと思われます」

「そんなものが？」

絢も驚いて立ち上がり、自分が倒して倒した置物を振り返る。

木箱の蓋が開き、そこから金色に輝く小さな木の枝が覗いている。一見するとなんでもない装飾品に見えるが、それはマナとは違う輝きを放っていた。近づいてきている女性と同じ光だ。

「これは……！」

純也は声をあげた。握っていた石の隙間からも、同じような輝きが漏れはじめたからだ。つまり、裏面の宝石も輝きを放っているということになる。

「な、何なんだ……」

純也はころねに説明を求めるように振り返る。

ころねは首を横に振った。

「何はわかりません。歴代皇帝が隠していた秘密がここにあった、ということなのでしょう」

そして、ころねは、怯えて純也の足にしがみついていた望の手を取って立ち上がらせた。

「ふえ？　な、な、なんですか？」

望は、そのおでこに宝石の光を反射させつつも、困惑を顔に浮かべる。

「あなたの一族は、皇帝の血を引いていたのではありません。しかし、おそらく、皇帝の命令を守り続けた一族なのでしょう。人知の及ばぬ事情で、もしかしたら発見を避けるために、裏面の宝石をこの状態に戻していたのかもしれません」

ころねの説明に、望の目が見開かれる。

「それじゃあ、ウチは、皇帝に仕えた一族……」

望は声を震わせた。これまでの悩みが、一気に流れ出ていくかのように、目から大粒の涙を流しはじめる。

「まぁ、良かったといえば良かったのかな……？　でも、それじゃあ、彼女は……」

阿丸けーなを振り返る。

「よくわかんないけど……。この人達、迎えに来た天の使いなんだよ」

けーなは言った。

それに応えるかのように、光り輝く使いが口を開いた。

「要塞を持つ資格ある者、準備は整いました。真の帝国を築くべく、蓬莱の玉の枝のあるべき場所へお戻りください」

それを聞いた一同は、さすがに何も言い出せずにいた。

ただ一人、けーなだけは、阿丸の袖を引っ張って口をとがらせた。

「ねぇ、あーちゃん。だから、もぞもぞするって言ってたのに」

あとがき

毎度有りがとうございます。水城正太郎です。

早くも二桁目の巻となりました。内容は短編集の体裁ですので、お気軽に楽しんでいただけるかと思

ます。この巻だけ読んでも大丈夫な構成になっておりますので、「アニメを見てから作品を知ったが、もう巻数が

るのかよ。既刊全部読むのは面倒くさいな」という方、この巻だけでお楽しみいただけます。内容はご

んの通り……とだけ言うのもアレですので、ご説明させていただくと、の初[illegible]ある、とだけ。ア

ニメで声を吹き込まれた登場人物を見て、書かねばならぬと思い立ったのです。

で、そうアニメの話です。好評のうちに放送終了いたしました。原作のストーリーをそのままに

かなり挑戦的な表現を用いた素晴らしい作品になっております。声優の皆様の演技もノリの良い最高な

のになりました、現在DVD、BDとも発売中です。見てくださった方、見逃した方、是非とも全巻購

をお願いしたいところです。ここまですべての巻を追いかけてくださった方は決して損をさ

せない内容となっておりますので。

さて、今回の本編の話よりも先にアニメのお話をしたのには訳がありまして、映像特典の『ミニアニメ』もひとつ、おまけの特典映像は、おいらがアイデアを出させていただいているのですが、そこに出せていただいたネタをこちらの本編でも少し使ってみたということをおしらせさせていただきたかったのです。本編のギャグの雰囲気を少しでも感じ取っていただければ幸いです。ミニアニメの収録は完了させていただきましたが、声優の皆さんの素晴らしい悪ノリ演技により、かなり笑える作品になっております。あわせてご覧くださいませ。

最後まで閲覧してくださった皆様、もちろん読者の皆様も感謝感激、今回の展開をご覧くださってもわかるとおり、もうちょっとだけ続きます。もうちょっとがどれだけかは[illegible]ですが、そんなわけで、今後もよろしくお願いいたします。

さてさて、まだまだ楽しめそうですぜ！

◆ご意見、ご感想をお寄せください。……ファンレターのあて先◆

〒151-0053
東京都渋谷区代々木2-15-8
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部
[illegible]

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。
『ホビー・データ』を経て、現在ライター集団『A－TEAM』主催。
作る料理がすべて学食の味になることに気づきました。良い言い方をすれば安定している懐かしい味。悪い言い方をすれば食えなくはないが薄っぺらい味。特にカレーうどんは絶品なのです。本当に学生食堂で出てくるそれの味がするという意味で。

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
＜一言＞
アニメの放送は終了しましたが、引き続きよろしくお願いいたします。

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT10

2010年8月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8